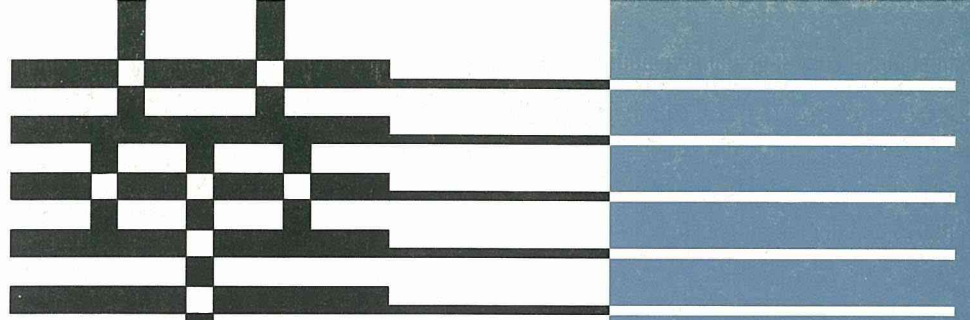


論文 / 著書情報  
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	No. 10
発行日 / Pub. date	1995,
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。



# Ka

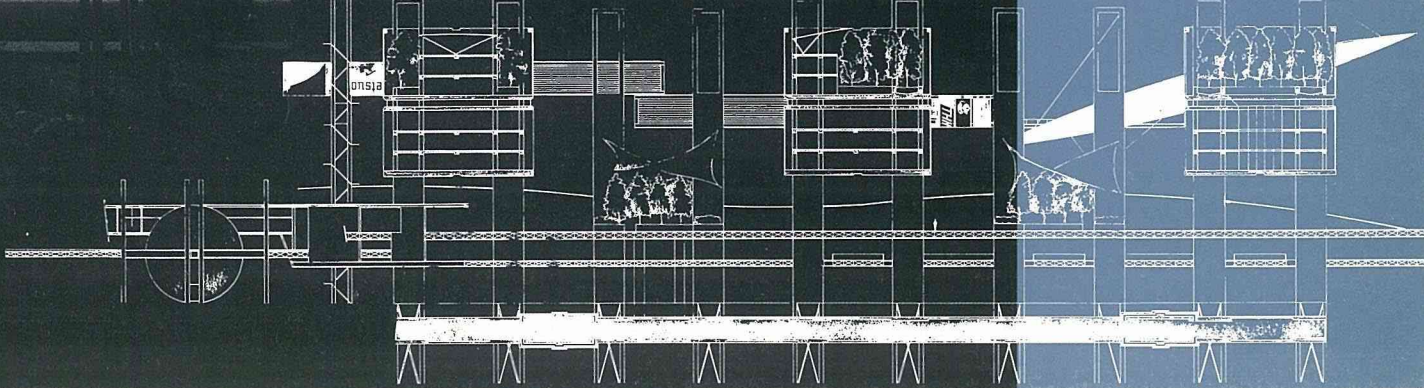
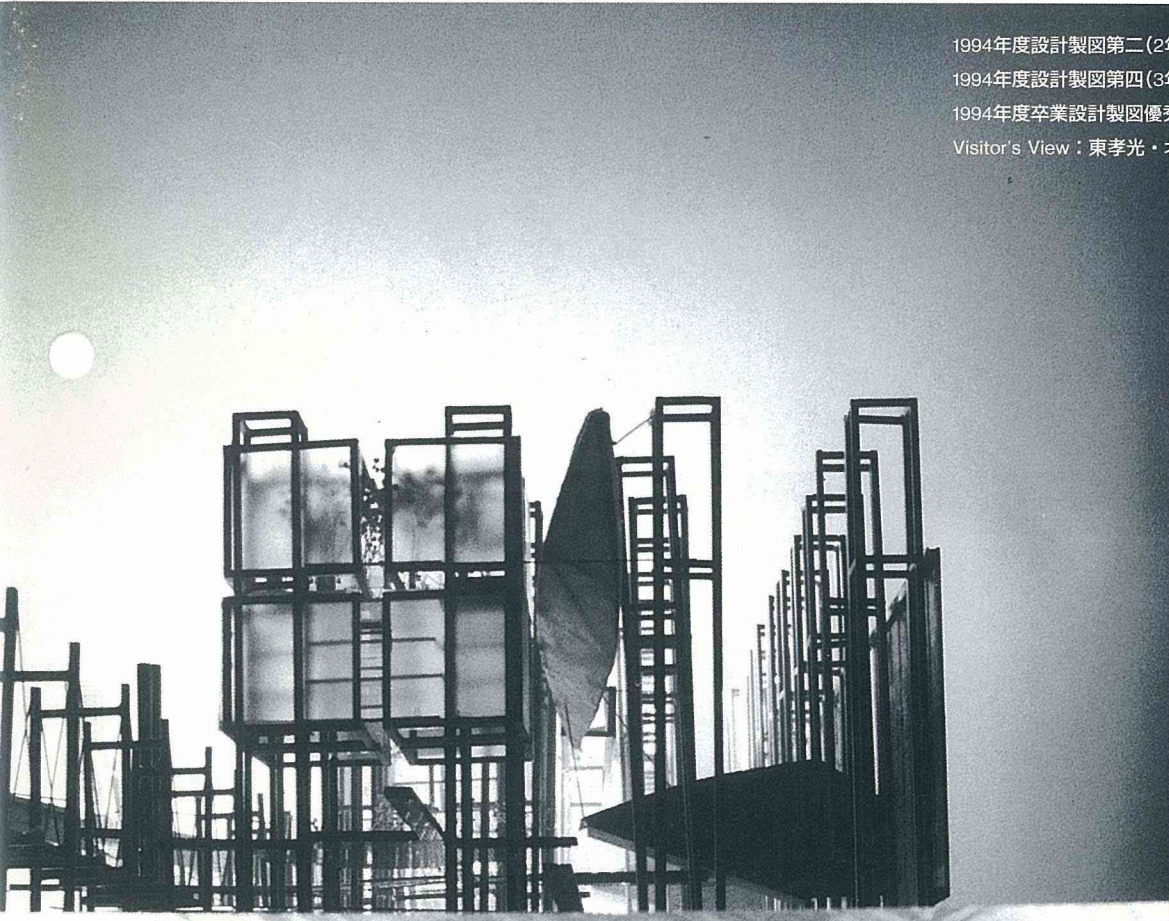
No.10 1995

1994年度設計製図第二(2年生)優秀作品より——2

1994年度設計製図第四(3年生)優秀作品より——16

1994年度卒業設計製図優秀作品より——44

Visitor's View : 東孝光・北川原温——52



# 1994年度設計製図第一(2年生)優秀作品より

Best Sophomore-Studio Work: Autumn Semester

## 低層集合住宅

Low-rise Housing Development

### 講評

助教授 八木幸二

代官山での集合住宅の課題も4年目を迎え、毎年設計条件を緩くしてきたため、ほとんど自由な課題となっている。しかしながら学生たちは、設計条件という枠に縛られることに慣れていくせいか、逆に自己内での定位が定められないまま苦しむようである。多くの学生は、集合住宅であるにも関わらず、単一の戸建住宅が少しずつ間隔を開けて単に15戸並ぶという配置に終始してしまったのは残念であった。ここに掲載される3作品のみが優秀というわけではないが、いずれも群としての造形を備えている点で評価できる。

笠井誉仁君の案は、このあまりにも高価な敷地に低層という非現実的な課題設定に対して住居群をコンパクトにまとめ、敷地の2/3をショップなどに割り当てている。また住居の1階部分も将来的には店舗になることを予測しての計画である。複雑な配置図はわかりにくいが見ると実に楽しい部分が見え隠れしている。

生木仁志君の案は、4つの住居タイプが混在し、造形的なまとまりの良さを感じる。しかしいっぽうで、住居プランは、シンプルな構成という点では他に類をみなかったが、たとえば収納等の考え方も不明で、十分に検討しているかどうか、意図していることが読み取れない点が惜まれる。

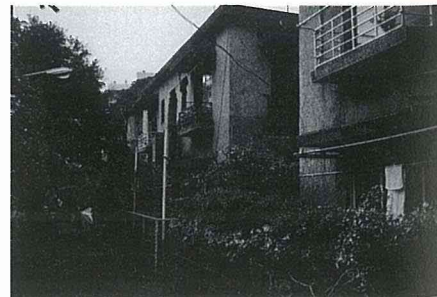
五嶋崇君の案は、3つのプランの組み合わせで、迷路にも似た不思議な豊かさを醸しだしており、他の家の下をくぐって通るなど、外部空間での工夫が随所に見られる。住居プランでは他の学生にも言えることだが、120㎡は決して狭い住宅ではないが、細切れに部屋を割るために、必要以上に狭く感じる案が多いのは残念だ。また壁構造の制約を悪く解釈してしまったプランでは、妙な壁配置が多く見られた。



代官山同潤会アパート建設当時の配置図

- 第一課題：志水英樹教授、八木幸二助教授
- 期間：10/5~11/16
- 課題主旨：関東大震災の復興事業として建てられた同潤会アパートは、日本の集合住宅の先駆的な存在である。現在さまざまな障害はあるにせよ、住みこなされたその表情は豊かであり、また集合住宅の将来を考えるうえで生きた教材でもある。課題は、この敷地に現代の集合住宅を提案するものである。
- 想定敷地：東京都渋谷区代官山同潤会集合住宅地、南斜面の街路で囲まれた一部とする。現在12棟の連立住宅(48世帯)が建ち並び、各戸は8/3、8/4.5/

- 3、4/4.5帖の2間~3間で非常に小さいが、敷地にはさまざまな樹木が生い茂り、区の保存樹林に指定されているものも多い。面積は3385.75㎡
- 計設条件：計画戸数15戸以上、1戸の延床面積は120㎡以内、階数は2~3階で地階は認めない。居住者は、4人家族を基準として考える。駐車場を各戸に1台分確保、その他共同施設等は各自提案。
- 法規制：第二種住宅専用地域(60/300)準防火地域/第三種高度地域
- 授業内容：現地見学/敷地模型各自製作/ポリウムスタディ/エスキスチェック/講評会



# 店の棲む街

Living over the Shop in Town

笠井誉仁  
Takanori Kasai

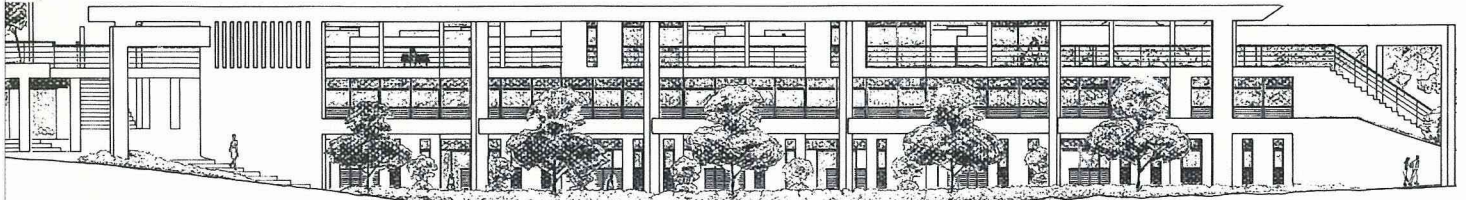
3つの円弧はそれぞれの境界を示す

ここから南へ向かって延びる壁とともに、裏にあるゴミ捨て場を隠し、そこへアクセスする人びとを引き込む。

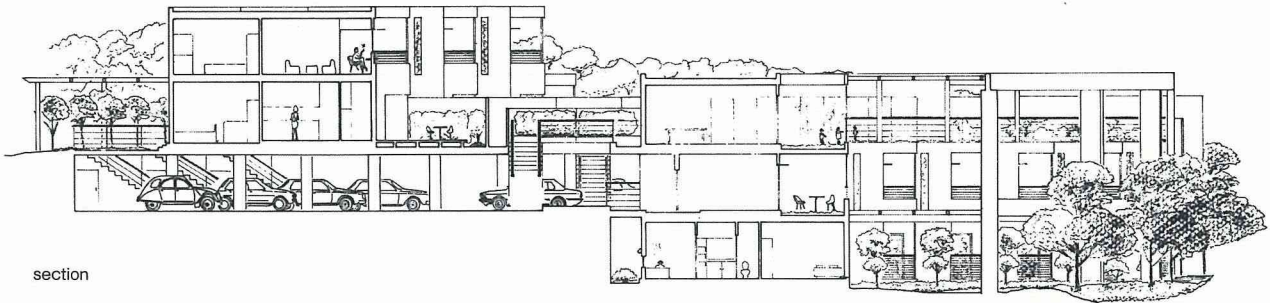
site plan

居住領域を示すとともに外観上 GALLERY の円弧に調和している。

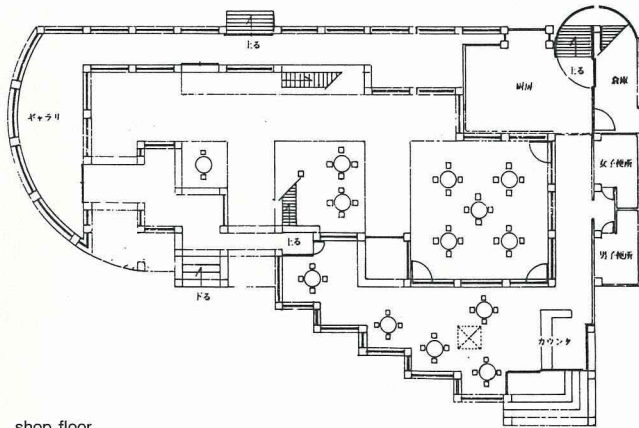
大階段からまたは車でアプローチする人びとは、住宅のエントランスとして明確に意識する。



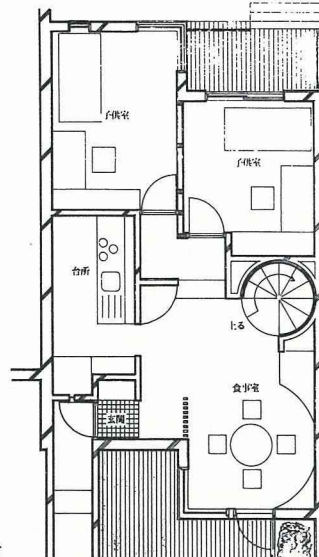
south elevation



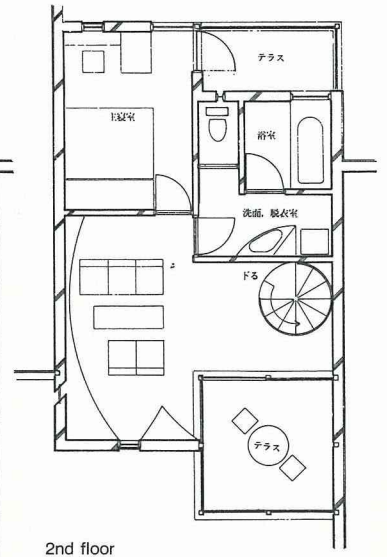
section



shop floor



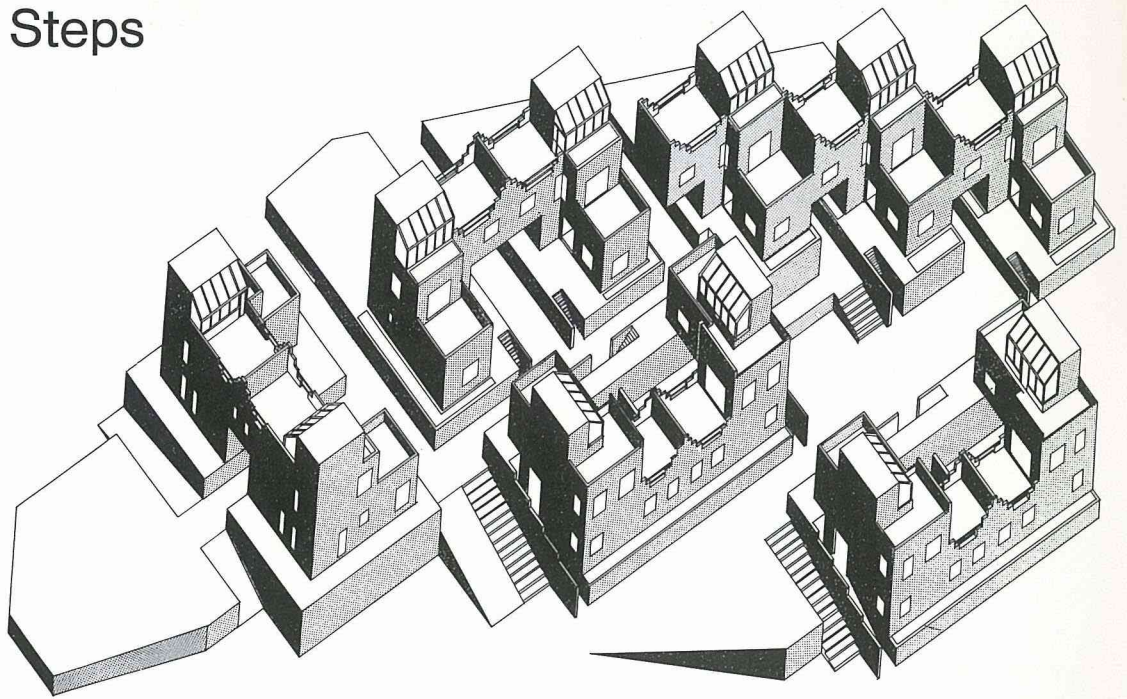
1st floor



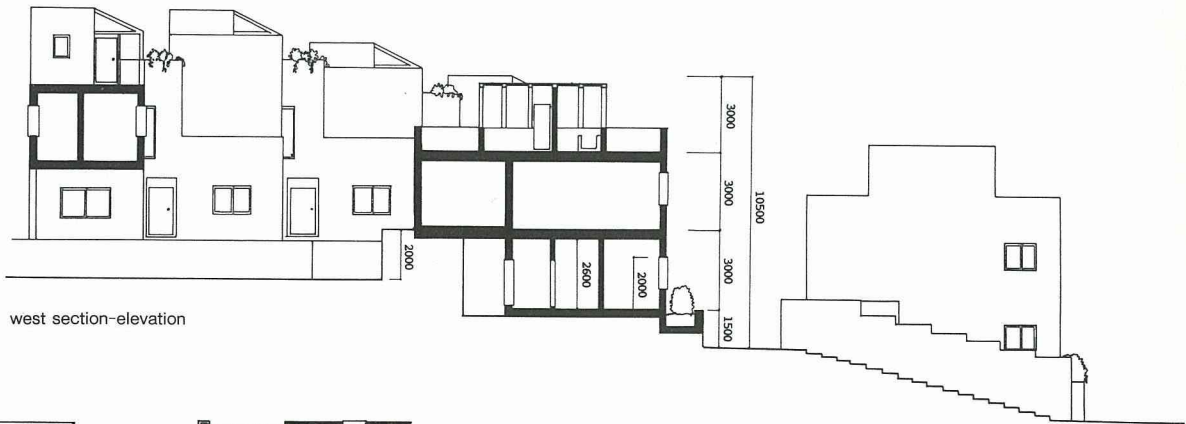
2nd floor

# Houses with Steps

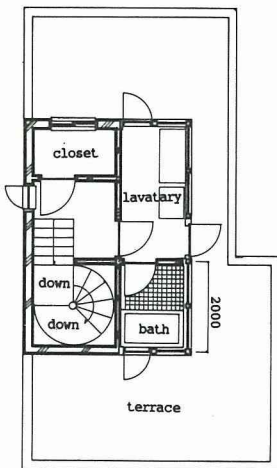
五嶋 崇  
Takashi Goshima



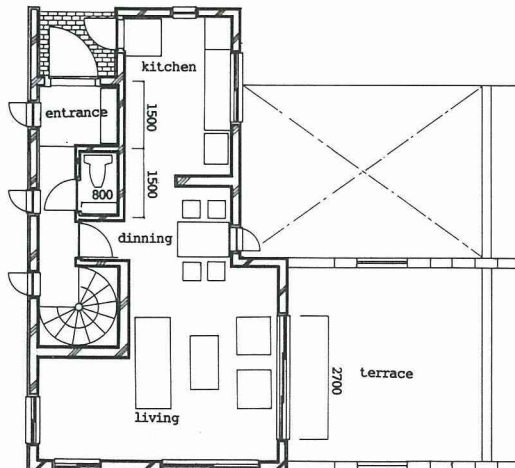
south elevation



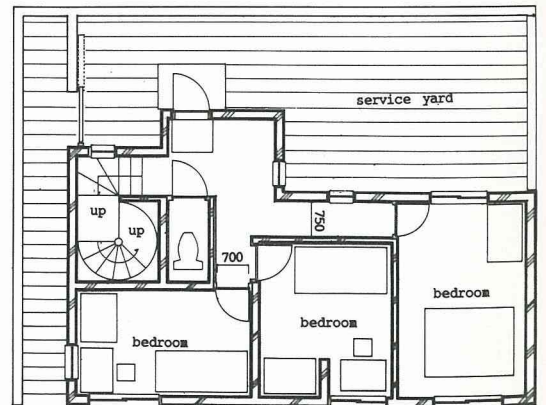
west section-elevation



3rd floor



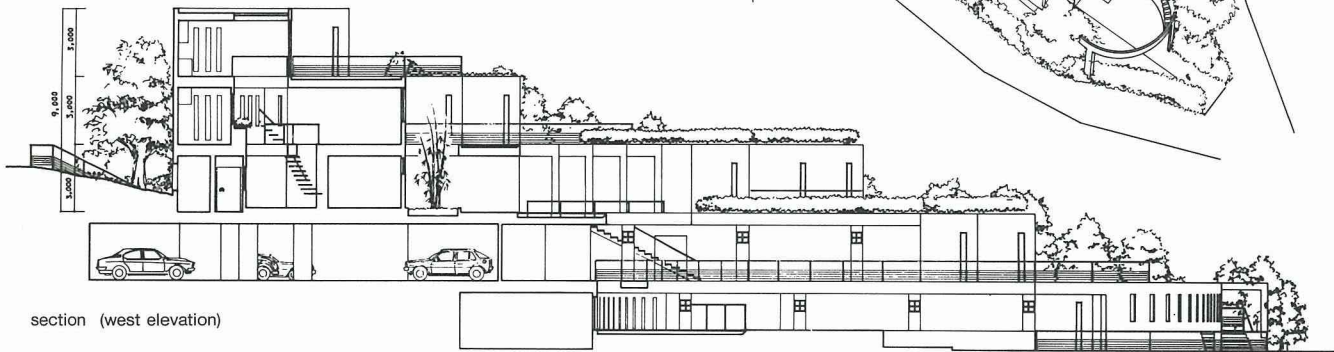
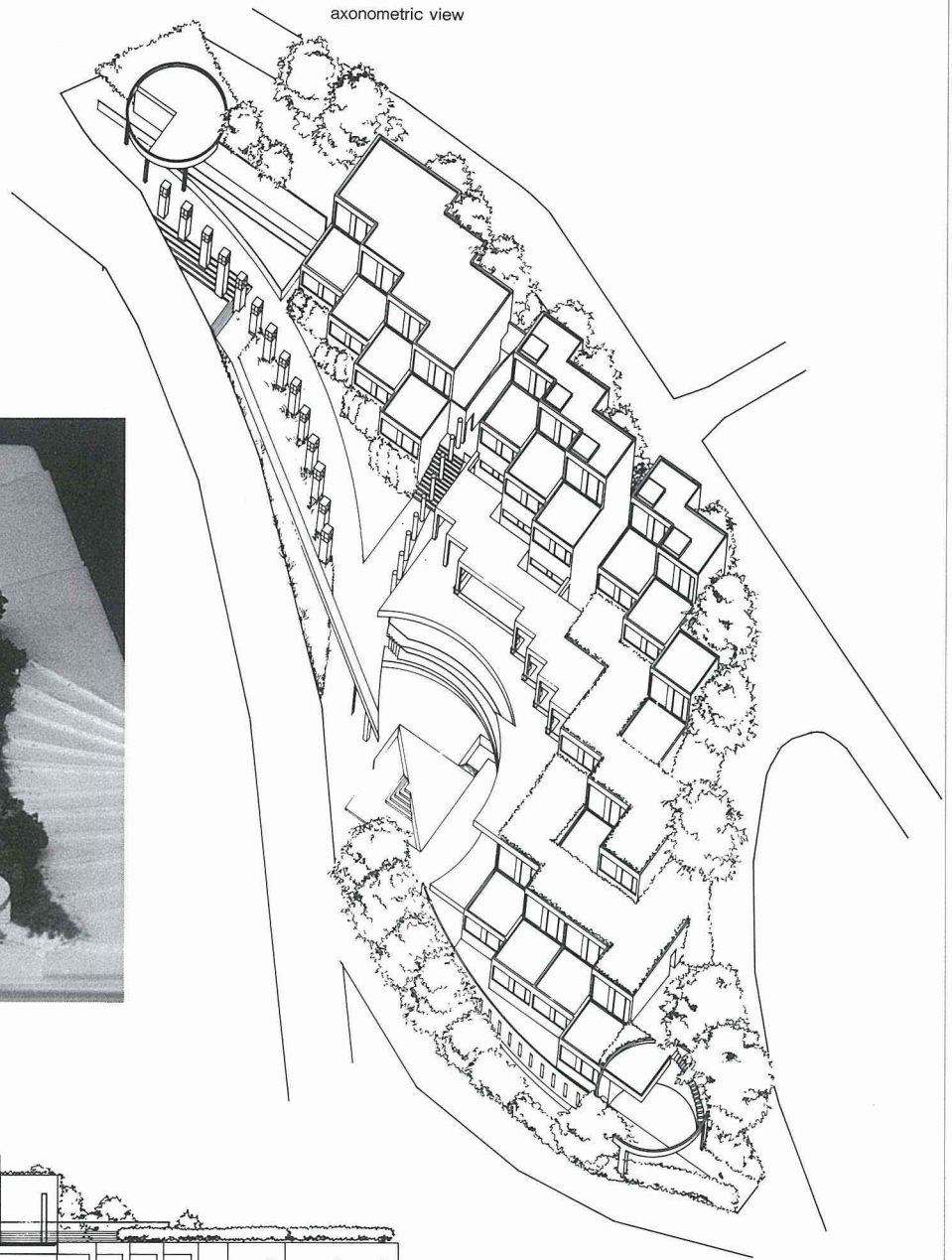
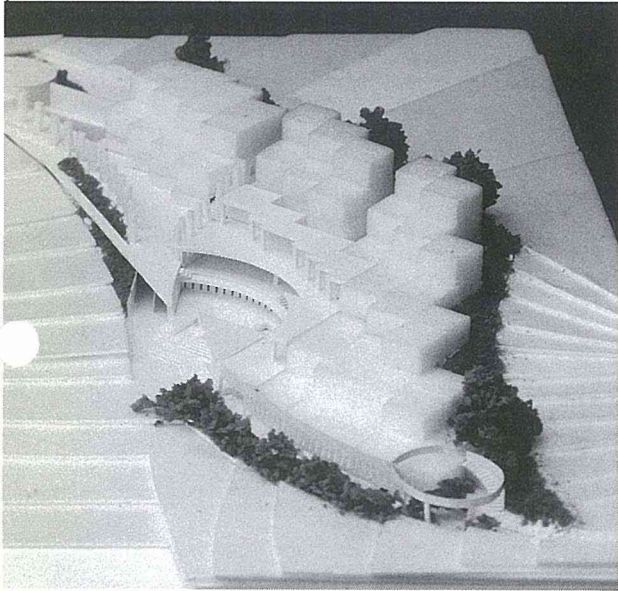
2nd floor



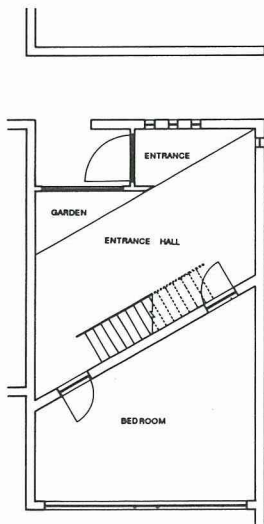
1st floor

# Falls Garden

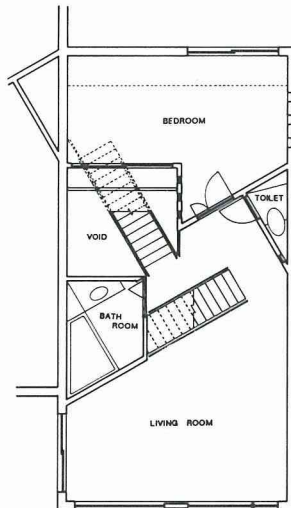
生木仁志  
Satoshi Seiki



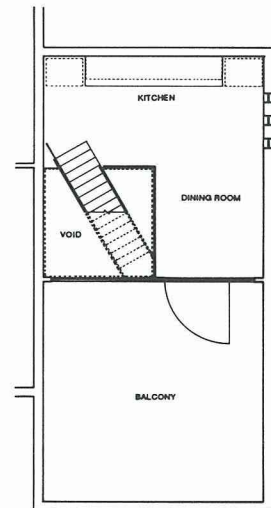
section (west elevation)



1st floor



2nd floor



3rd floor

# 1994年度設計製図第一(2年生)優秀作品より

Best Sophomore-Studio Work: Autumn Semester

## 【学生会館】 Student Hall

### 講評

教授 志水英樹

2年生の課題は集合住宅、学生会館とも傾斜地の敷地を設定している。これは設計を始めただけの学生には多少難しい部分もあるが、建築を考える際に、平面的なプランニングを単に積層していくのではなく、立体的に思考し、断面での検討を十分に行ってほしいという気持ちがあるからである。しかしながら、エスキスチェックを通して感じたのは、平面図のみのスタディがほとんどで、模型による検討も、レベル差をいかした、あるいは積極的に利用しようとする案は少なく、特にこれからの注意点として述べておきたい。

さて学生会館では、周辺の状況、要求される諸機能など学生の日常生活との関わりが深いテーマであるが、それゆえ多くの初期案には、24時間コンビニ、ホテル並の宿泊、肥大化する部室といった物質的な要望を満たすために、学外のいわゆる便利な施設を取り込み、巨大化していく安易な計画が多くみられた。これは一機能一室という発想、そして設計を単なる室のパズルとして成立させてしまうことに原因があると思う。こうした意味で、ここに紹介する4作品は、多種の機能を複合させながら空間構成と建築形態を操作する努力が伺われるものとして評価したい。

川口有子君の作品は、ボリュームの大きな食堂部分は思いきって天井を高くして敷地のもっとも低い位置に、部室などの小さな部屋は階高を抑え敷地の高い位置に積層し高さを抑えるなど、斜面における配置が実に素直に収まっており好感がもてる。こうした案は何度もスタディを繰り返してようやく落ち着いた結果と見受けられる。また内外を視覚的に一体化させながらごく自然に施設を利用できることがテーマとなっているが、スロープにそってスキップフロアとなった食堂、囲み型の中庭が閉鎖的にならないような工夫などうまくまとめられている。あえて言うならば一部独立したレストラン棟が地上と2階部分を



●第三課題：志水英樹教授、藍沢宏教授、宮本文人助教授

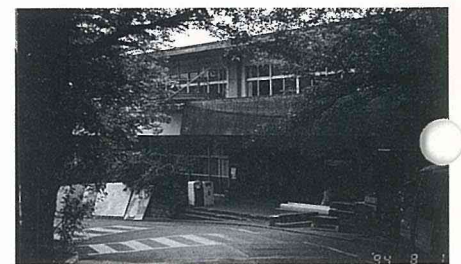
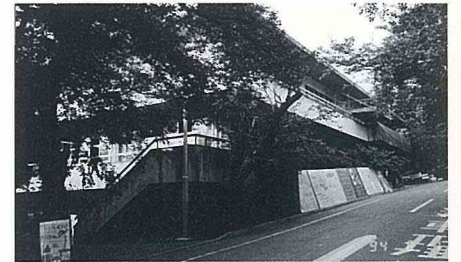
●期間：11/25~1/27

●課題主旨：現在の第一食堂を取り壊し、新しく学生生活の拠点となりうるような学生会館を計画する。学生会館は学生を中心とした全大学人の話し合いの場であり、また課外活動の場であるので常に学生に開放されていなければならない。また、学生会館はどのようなものでありたいかを考えること。そのためプログラムづくりから始める。何を入れるのも自由であるが、それらをどう維持し、継続していくかを考えること。

●想定敷地：東京工業大学大岡山キャンパス内第一食堂および周辺敷地規模は制限なし

●計設条件：施設規模約3500㎡、鉄筋コンクリート構造を主とする。食堂600人、売店、ラウンジ、機械室、その他各自のプログラムに合わせて自由。

●授業内容：現地見学/グループ作業/プログラムチェック/敷地模型製作/エスキスチェック



つないでいるが、地階との連続性があるとおよかったのではないかと。

生木仁志君の作品は、4本のポイドと巨大な列柱廊が全体の構成を決定している。諸室はこの空間を殺さずに、それぞれの場の性格に合わせてうまく収めており、非常に力強い空間である。しかしながら、建物前面の芝生とアプローチの石塊は何かを意図したのだろうか、空虚な感じのする点は、学生会館としてはどうだろうか。

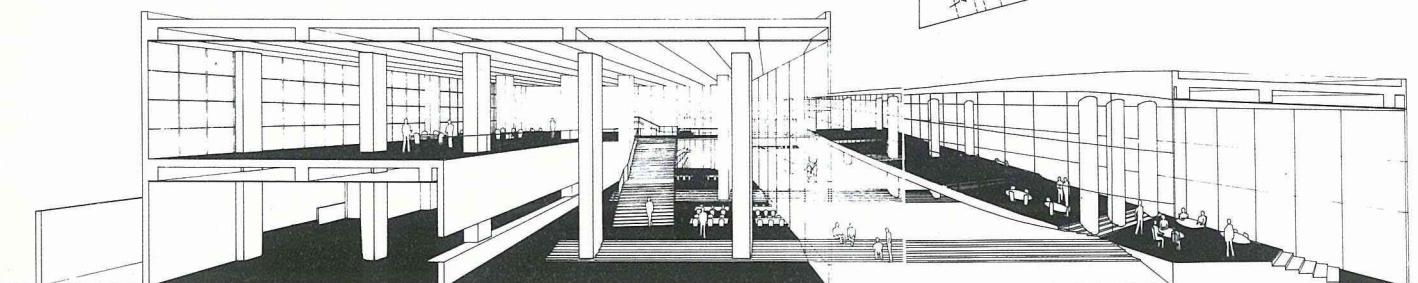
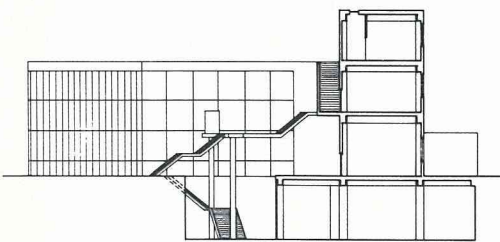
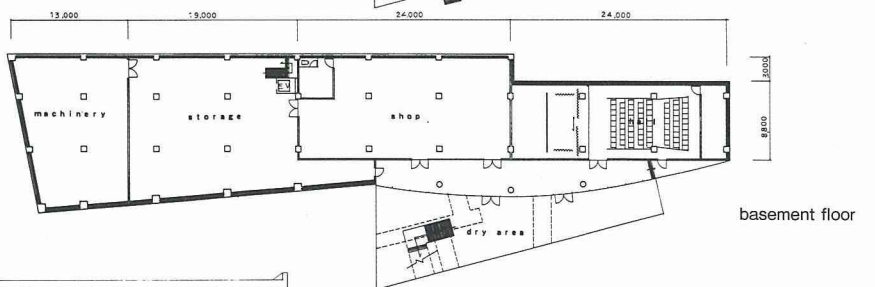
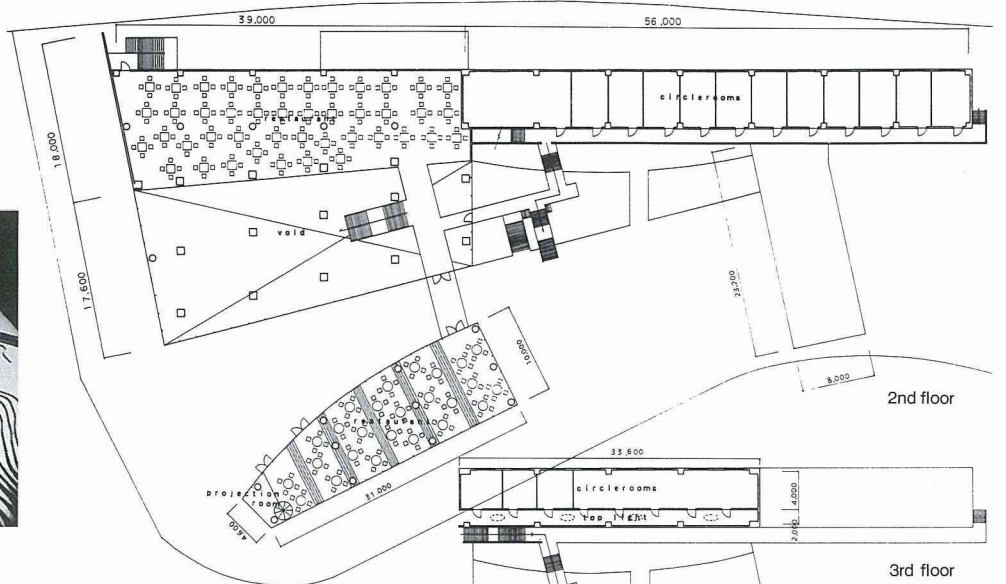
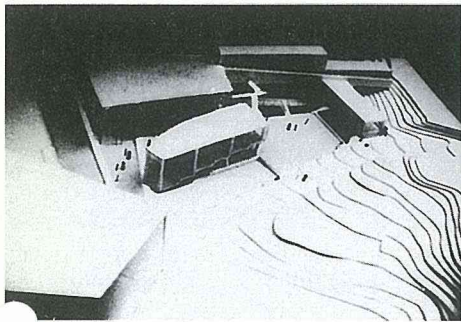
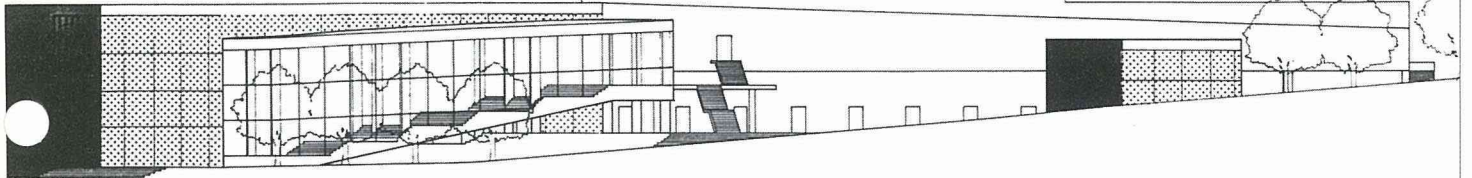
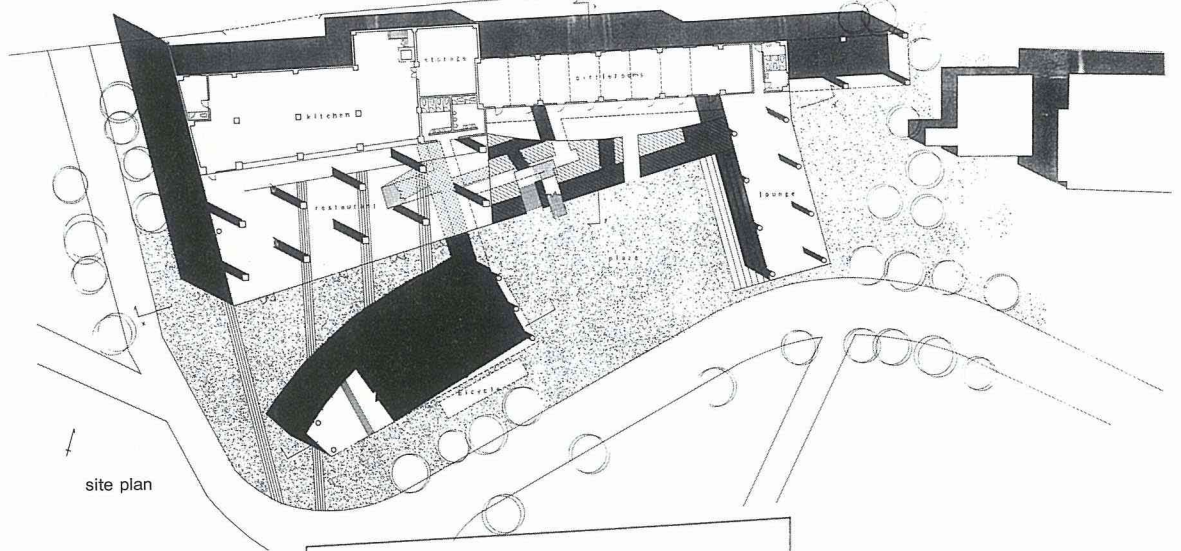
小野田環君の作品は、食堂と部室をつなぐエントランスに力を注いでいる。入口の正面にガラス越しに見える庭と空中に浮かぶラウンジ、ブリッジと階段の関係などの組み立て

は、お互いの視線の交錯や場所としての一体感が感じられ、うまくまとめている。ただし、その食堂と部室そのものはかなり退屈で、テーマが見当たらず一考の余地があると思われる。

米津正臣君の作品は、水力実験棟を意識して、平面上は同じ幅の建物を延長している点は評価するが、その形態は残念ながら並べるとふさわしいものとはなりえていない。また、列柱群のグリットとは無関係に獲得される各室はもっと自由な形態が可能なのに平凡で、室内に梁形も現われるなど、いまひとつ未熟さが残る。が、屋上・中庭・テラスなどに現われる各部のアイディアには楽しさとリアリティーが感じられる。今後期待したい。

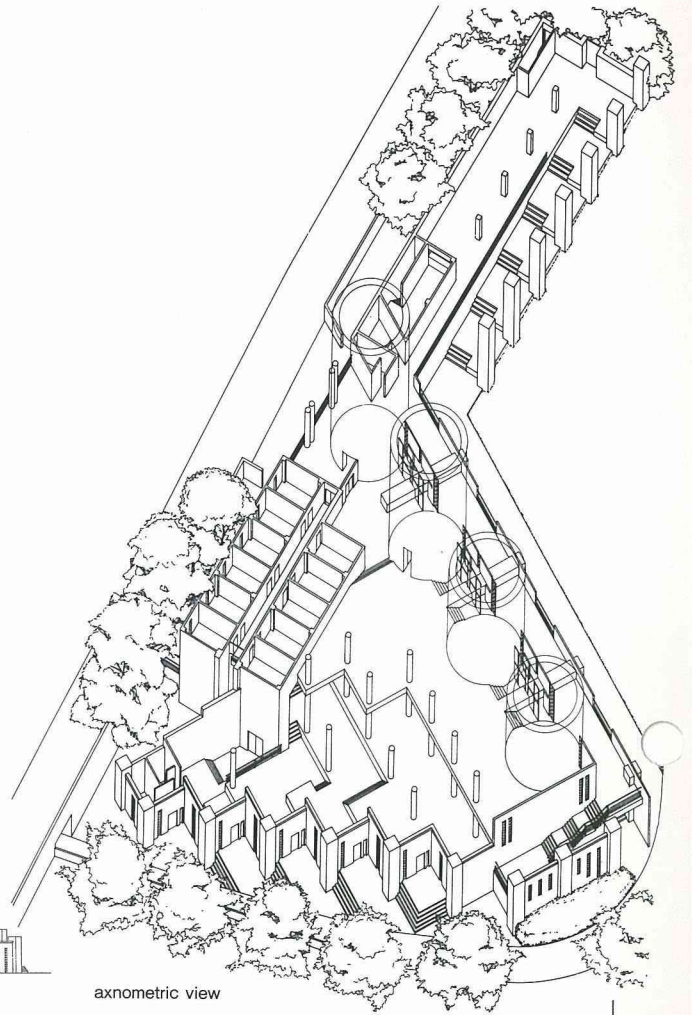
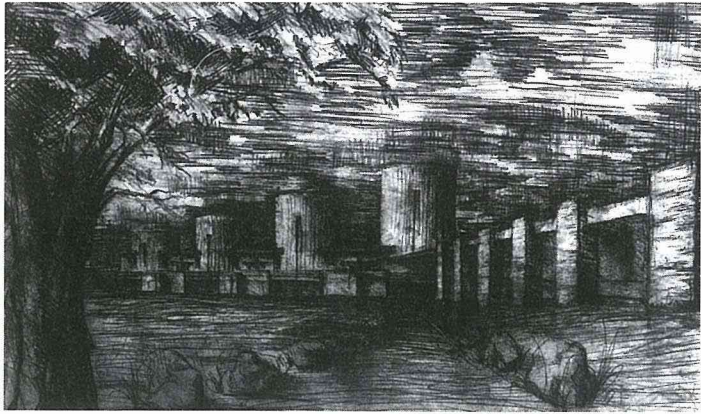
# Space for Students

川口有子  
Yuko Kawaguchi



# Students' Hall Plan

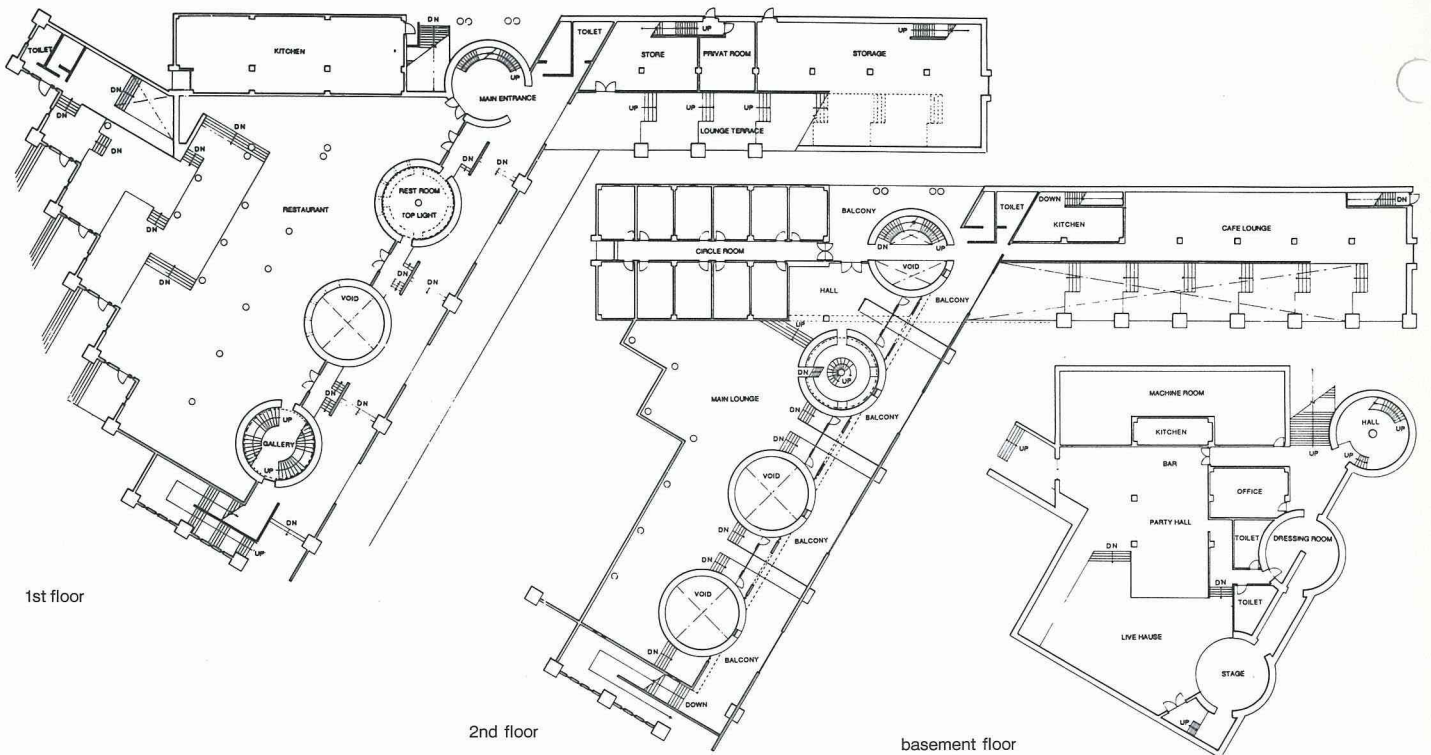
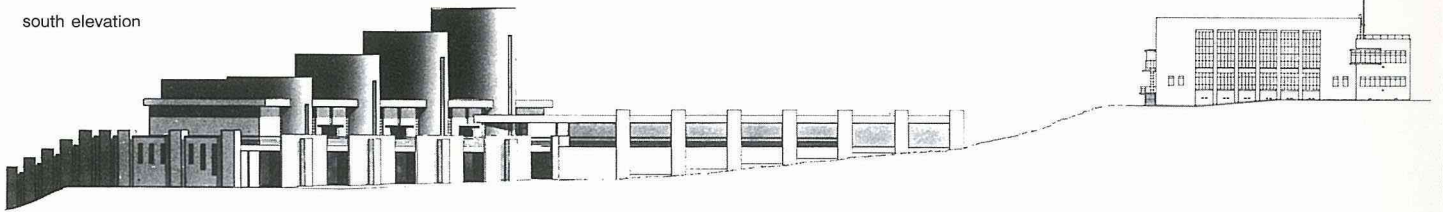
生木仁志  
Satoshi Seiki



section

axonometric view

south elevation



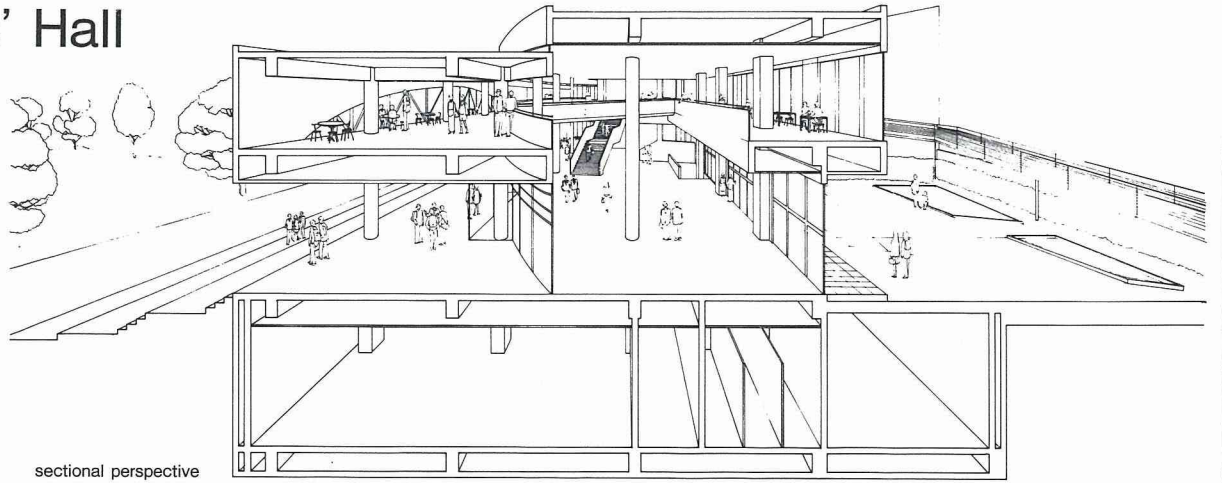
1st floor

2nd floor

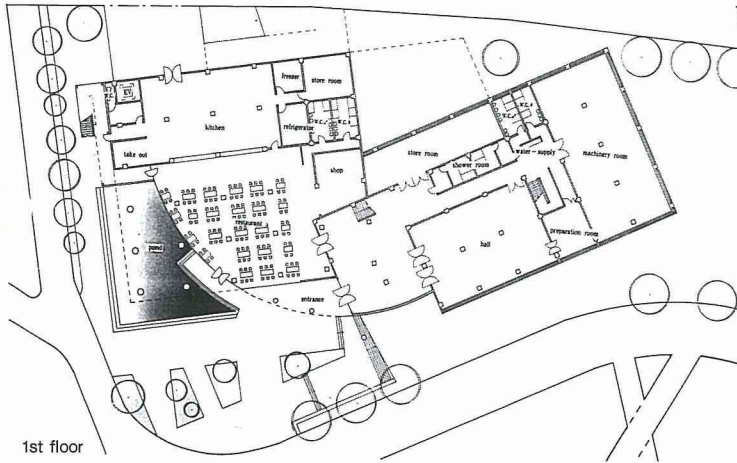
basement floor

# Students' Hall

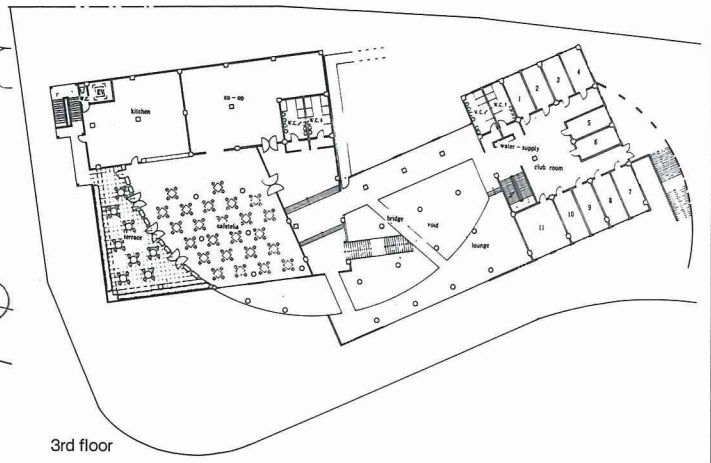
小野田 環  
Tamaki Onoda



sectional perspective



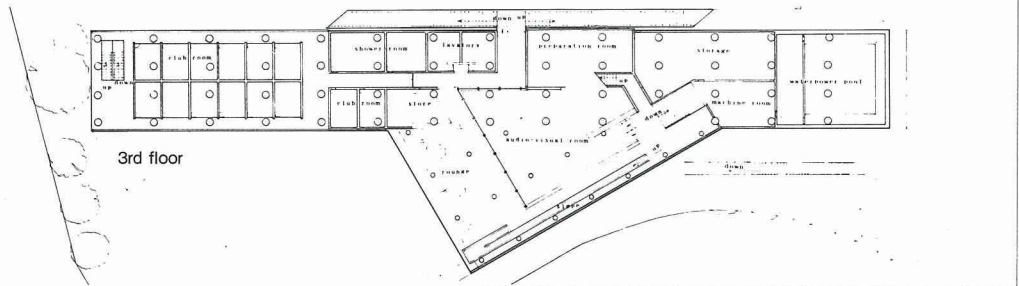
1st floor



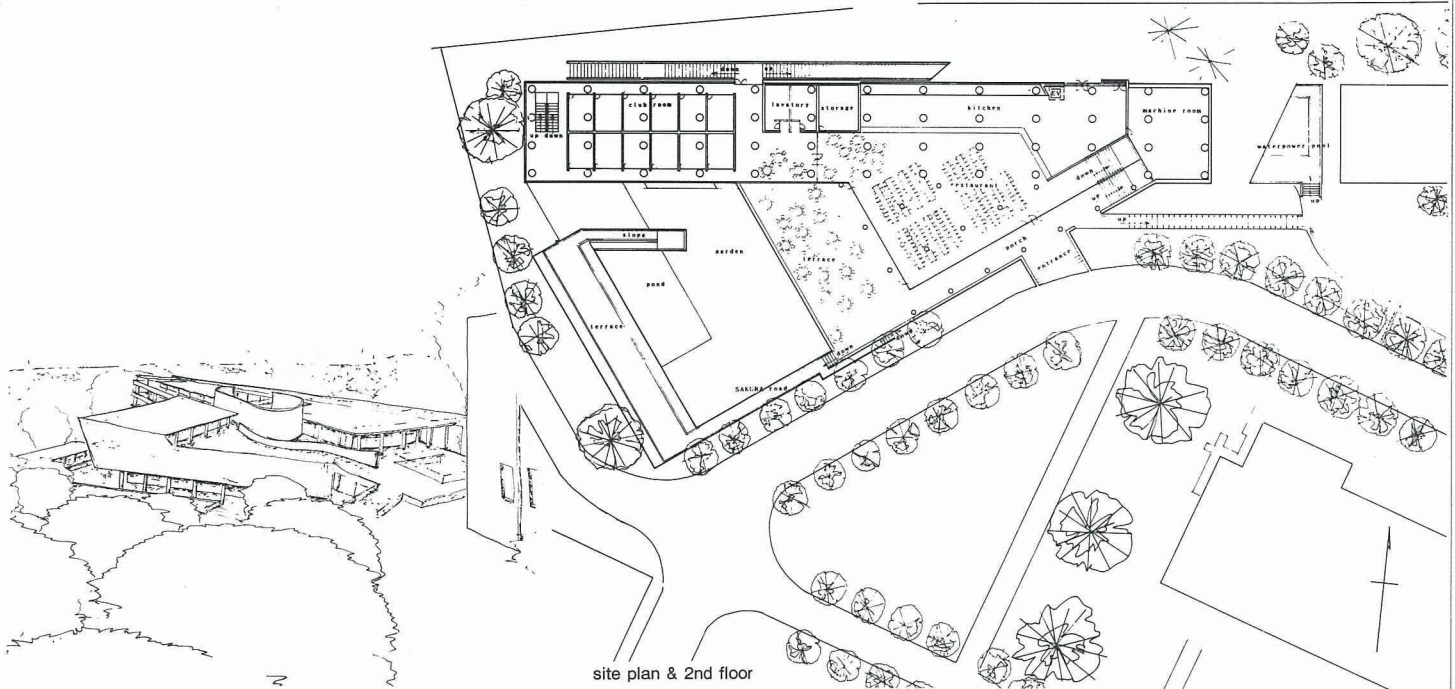
3rd floor

# Pavillion TIT

米津正臣  
isaomi Yonezu



3rd floor



site plan & 2nd floor

# 1994年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Work: Autumn Semester

## 都心の複合住居施設

Urban Complex Housing in the City Center

### 講評

非常勤講師 東 孝光

この課題は、昨年度に引き続き「都心の複合住居施設」として同じ設計条件を設定したが、昨年の例からすると、条件が複合的で解決する要素が多いため、歩道橋のデザインにまで時間が十分さげず焦点がぼやけるきらいがあり、今年これをはずして自由とした。また上層階の都市住居にも積極的な提案に取り組むよう最初に強調した。

都市の建築では、その敷地や周辺環境に蓄積された歴史的、地理的条件からくる有形無形の影響を積極的に捉え、それらを結びつけてどのような新しい創造的関係が構想できるかに、その成否がかかっている。周辺にある歴史的な背景とその反映としてのさまざまな建築形態を配慮しつつ、住居、商業の複合建築を設計することで、周辺環境の全体を新しい特徴ある都市空間のスポットにまとめることが課題の目標であった。

全体に、街路からつながる小広場や階段、スロープなどからショップ、ギャラリーそしてオフィスなどへのつながりは、学生諸君の想像力を刺激して、いろいろな展開が見られたが、それと都市住居エリアとのつながりは、現実の場合にも議論の分かれるところだが、都市空間の延長線上につなげようとする人と、

東 孝光  
Takamitsu Azuma



1933年 大阪府生れ  
1957年 大阪大学工学部構築工学科卒業  
郵政省大臣官房建築部入省・郵政技官  
1960年 坂倉準三建築研究所入所  
1967年 東孝光建築研究室開設  
1968年 東孝光建築研究所設立、代表取締役  
1985年 同上退職、大阪大学工学部環境工学科教授  
主な作品：塔の家、Kフラット  
主な著書：『都市住居の空間構成』SD選書・鹿島出版会、『塔の家白書(共著)』住まいの図書館出版局

●課題の主旨：東京中心部の指定された敷地に、住居を含む複合型建築を設計し、周辺環境との積極的な関連づけを含めてデザインする。

●課題の背景：都市の建築は、建築主の希望や構想者の意図と敷地がもつ法的制約の課題だけで決まるものではなく、その敷地や周辺環境に蓄積された歴史的、地理的条件からくる有形無形の影響をも積極的に捉え、それらを結びつけてどのような新しい創造的関係が構想できるかに、その成否がかかっている。

東京都心の渋谷区神宮前3丁目の外苑西通り一帯は、青山通りと千駄ヶ谷、新宿大木戸を結ぶ幹線道路であるが、ゆるいカーブと道路傾斜をもつ地形、1960年代の東京オリンピックの直前の整備で拡張されたために、敷地の大小や不整形の敷地割りが残されており、その影響でさまざまな建築形態がみられる地域であり、またいろいろな建築家が大小の建築を設計してユニークな地域になりつつある。

特に、新日本建築家協会のある神宮前2丁目の歩道橋を挟む4つの敷地は、それぞれ進来廉設計の建築家会館、竹山聖設計のPCIビルなどの、いろいろな世代の建築家の設計した建築がひとつの橋を挟んで接している。この敷地の一画を再構成し、住居、商業の複合建築を設計することで、橋を含めた周辺環境の全体を、新しい特徴ある都市空間のスポットにまとめることを課題とする。

●設計課題：指定の敷地に、法規に定められた容積

完全に遮断しようとする人の二つに分かれたのは興味深い反応であった。時間がもう少しあれば、これからの都心における居住の意味や、そのあり方について皆さんと議論したいところだった。

勝木祐仁君の作品は、敷地のそれぞれのコーナーの特性に添った利用で、地上からショップ、ギャラリー、オフィスなどを分割配置した上で、中央に逆円錐のポイド空間を挿入してそれを連結、交通空間にして結びつけるという手法を使っている。上部もこの逆円錐の縁に、リング状に構成された変化に富んだ何種類かの都心の住まいを組み入れており、巧みな分離と結合を実現させている。外観でも、要素を細分化して組み立てているが、隣接するテラスツアの建築要素とマッチさせながら固有性をつくりだしており、しかもバランスのとれたまとまりを見せて成功している。

久野靖広君の作品はこれとは対比的で、中央に円筒形の大きな空間を置き、下二層は多目的の展示ホール、上二層は小コンサートホールで、その外側に注意深く床を巡らしてロビーや喫茶、ショップなどをつくっている。

と高さ制限内で商業施設、オフィス、ギャラリーなどを各自で具体的に設定し、一部に都市型賃貸住居を複数戸含めて複合建築にまとめて設計すること。また歩道橋を含めた公共の道路、階段を再点検し、豊かな都市の公共空間によって、場所の意味の創出をデザインすること。

●敷地条件：別途敷地周辺図による。

敷地面積：約898㎡ 路線商業地域/準防火地域  
建ぺい率：80% 容積率：600%

●要求図面

- ・配置図 1/500 周辺状況を詳細に表現。
- ・平面図 1/100 各階、室名、家具など記入。
- ・立面図 1/100 三面以上、陰影をつける。
- ・断面図 1/100 二面以上
- ・外観の表現 彩色透視図、模型写真など自由
- ・内部透視図 二面程度、位置、彩色自由。

●設計条件

- ・階数、高さなどは自由に設定してよい。ただし道路斜線は法規による。
- ・地階に駐車場15台程度、地上からの出入りを考慮。
- ・1~3階に都市的な商業施設を計画する。
- ・最上階に住居を複数階設計する。規模、戸数、家族構成は自由に設定する。
- ・敷地周辺の公共空間および歩道橋との連続性を考慮し、必要ならデザインし直してもよい。

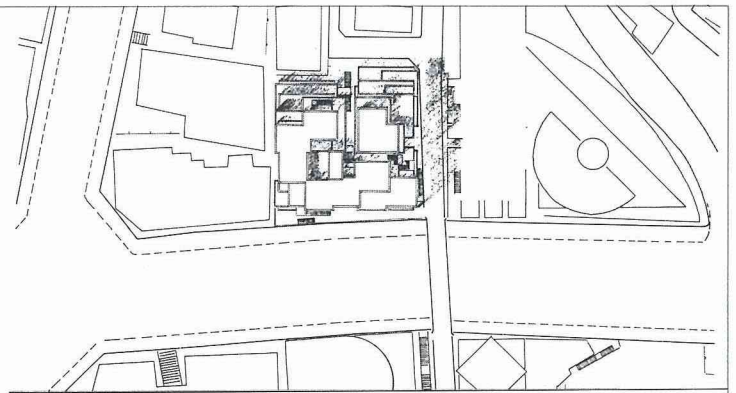
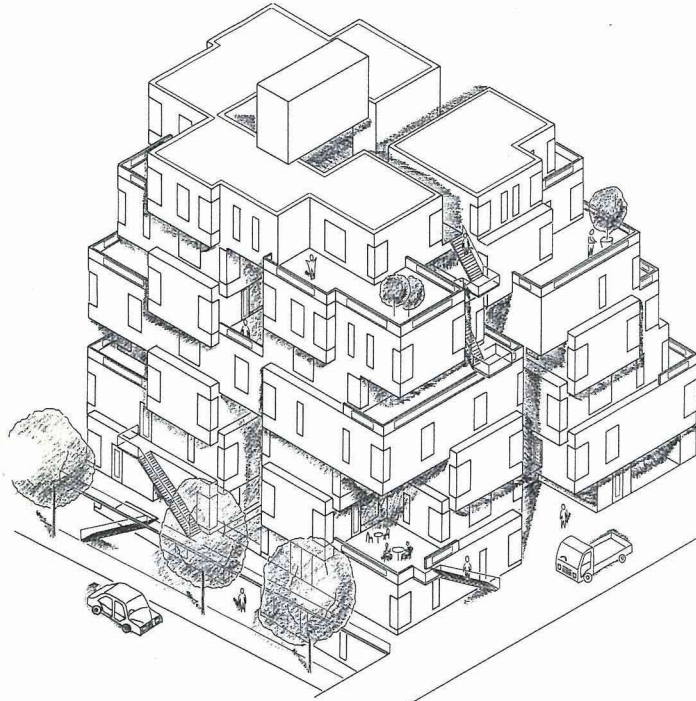
6、7階にメゾネットタイプの都市住居を完全に下とは独立させてとっている点も勝木案とは対比的である。平面での円形とその余白の空間のバランスの良さで成立しているすっきりした明快な作品である。円筒の大きな壁が巡るロビーやバルコニーの何層にもつながる高い吹き抜けも強く印象に残っている。

小倉哲君の作品は、スリット状の外部吹き抜けのまわりにEVコア、階段、廊下などを巡らし、その周囲にブロック状の都市住居、アトリエ、小オフィス、ショップなどをずらしながら上に積み上げていく方法で、ダイナミックな形態の構成の魅力は少ないが、緻密で実現性の高い提案にまとめて上げている。

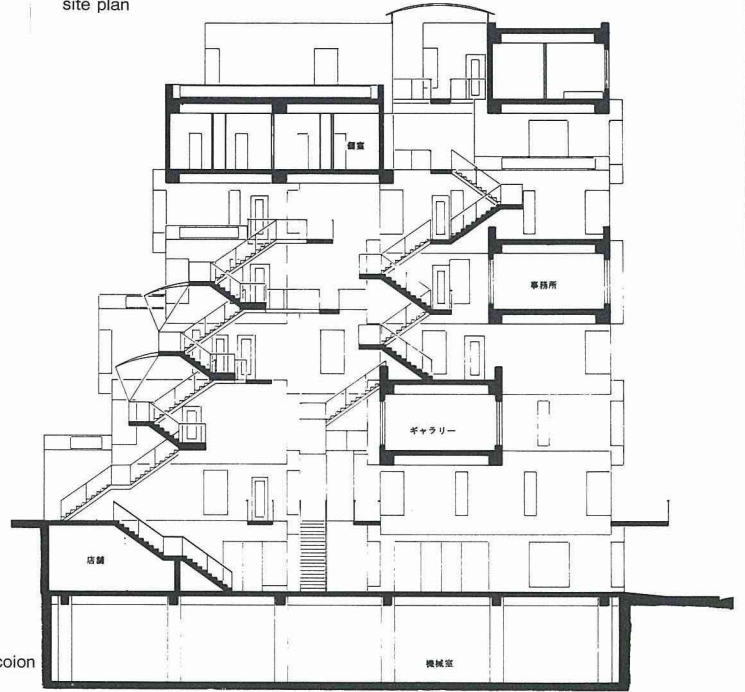
その他、海野宏樹君の空中テラスで住居と他の都市施設の間を隔てる処理、藤川明日香君の隙間の多い空間要素の群構成、高橋功次君の個室群と広く天井の高い共用施設が組み合わせられたユニークな都市居住共同体の提案、金井修君の町中の小さなオペラハウスを中心にした芸術家村の構想、そして増山絵理奈君の巨大な卵空間が浮遊する詩的な構成とその表現など、それぞれ印象に残る提案であった。

# Complex Block

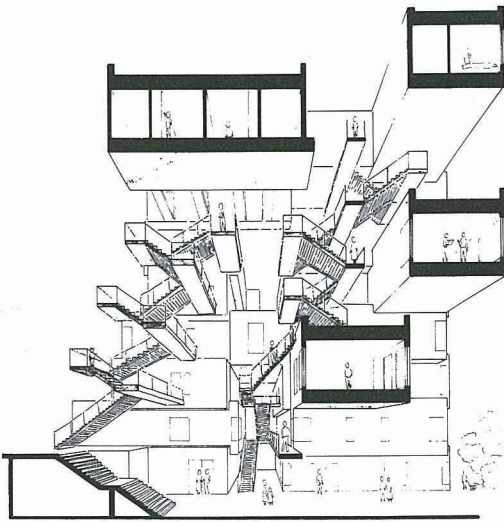
小倉 哲  
Satoshi Ogura



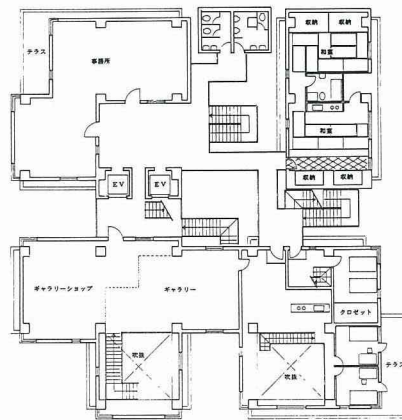
site plan



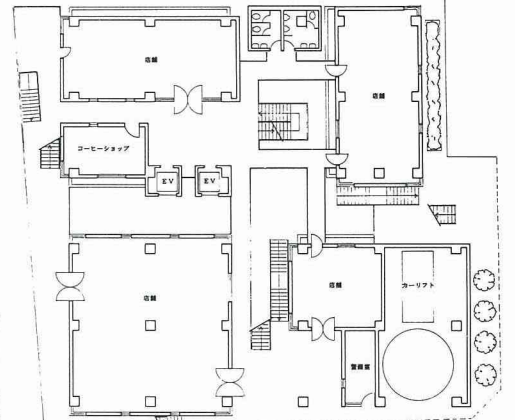
section



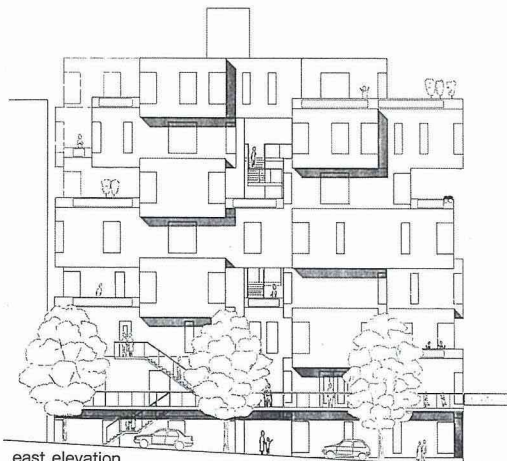
section partpective



4th floor



2nd floor



east elevation

後背住宅地への圧迫感の低減 → ブロックを積んだような形態による  
→ ヒューマンスケール感

後背住宅地との連続感 → 多様な住戸の設定  
(単身者・夫婦世帯・家族世帯・老夫婦世帯)

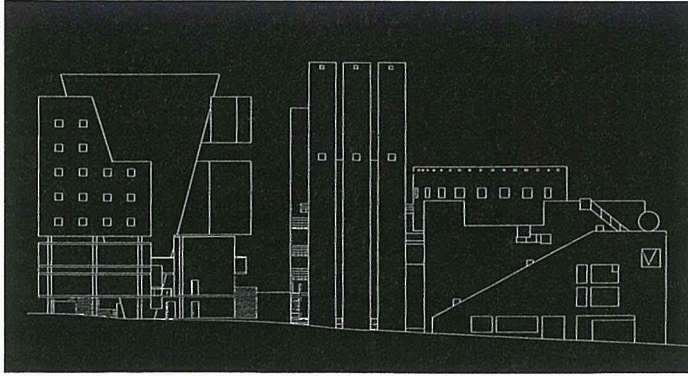
住戸と商業施設との複合 → ギャラリー付き住戸・オフィス付き住戸の  
中間階への挿入による、上層階の専用住戸と、  
→ 後背住宅地との連続的なつながり

→ 中央吹き抜けを通しての、建物内部での  
ゆるやかなつながり

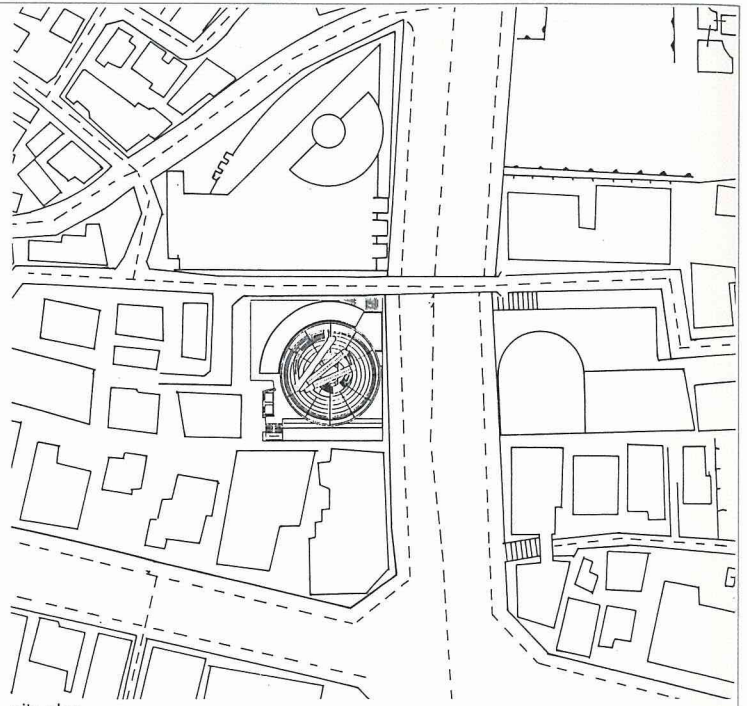
→ 通路の回遊性と多様性による、住戸と  
商業施設との分離とつながり

# Urban Complex Cone

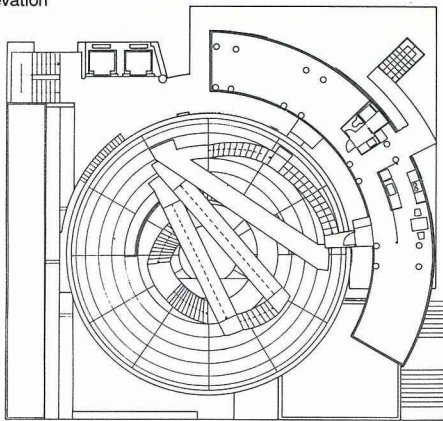
勝木祐仁  
Yuji Katsuki



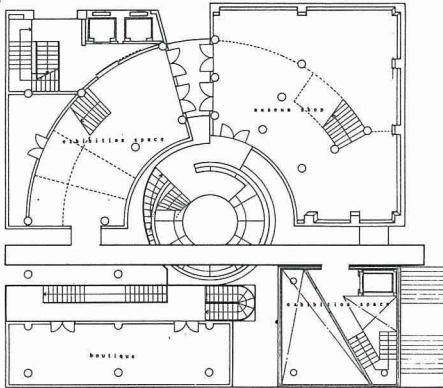
east elevation



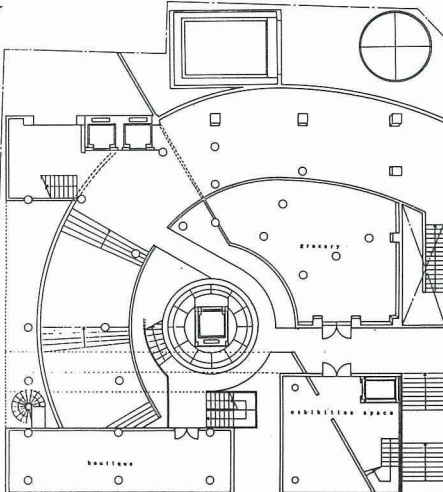
site plan



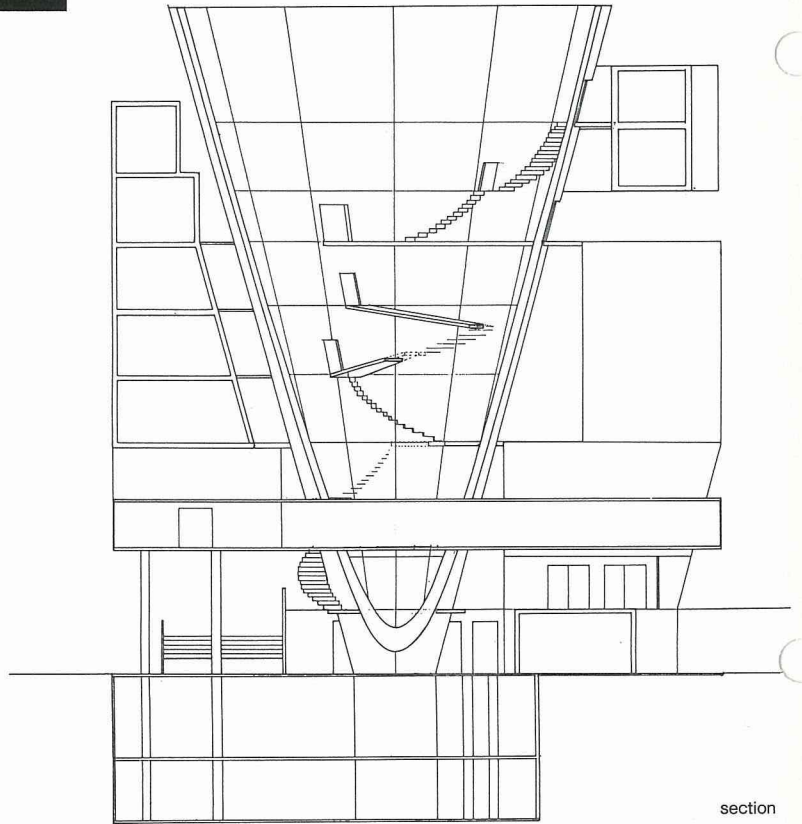
9th floor



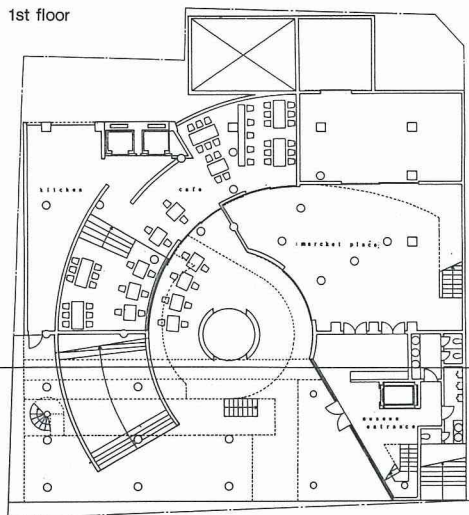
3rd floor



2nd floor



section

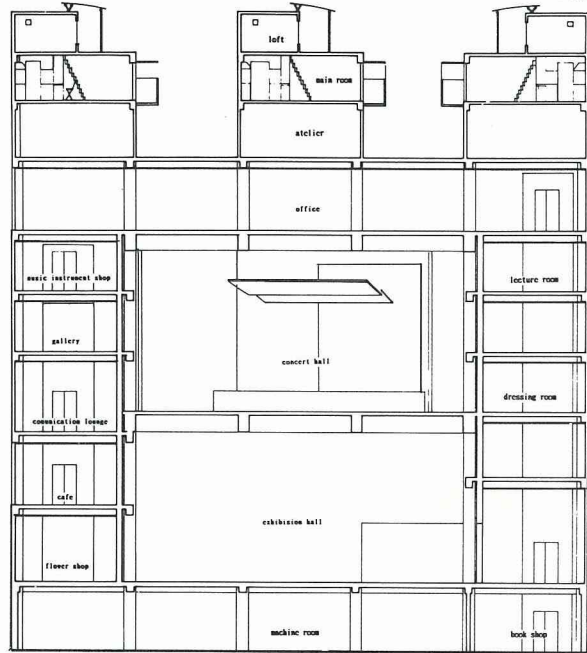
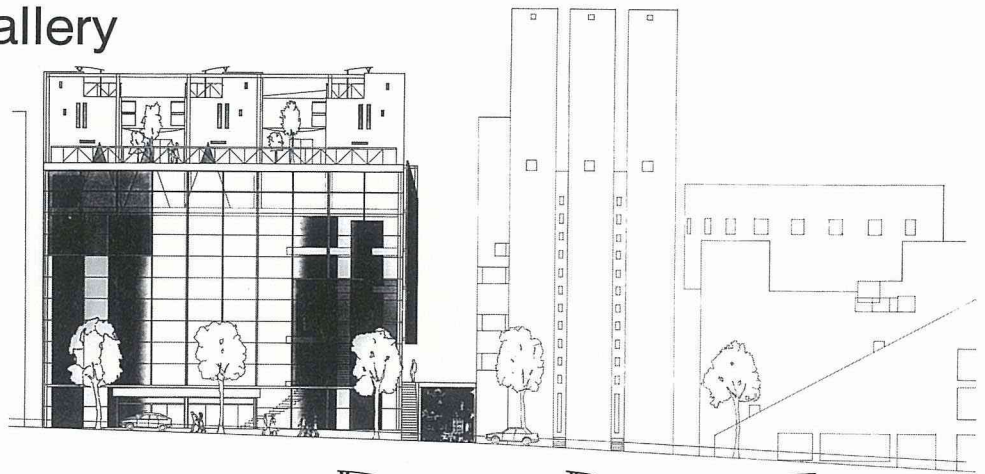
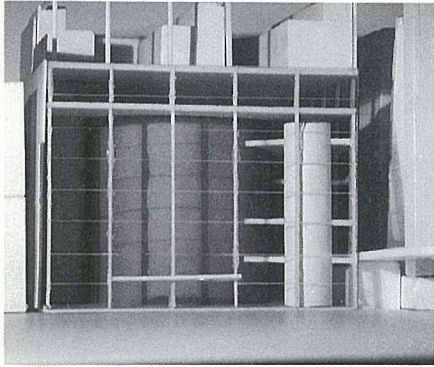


1st floor

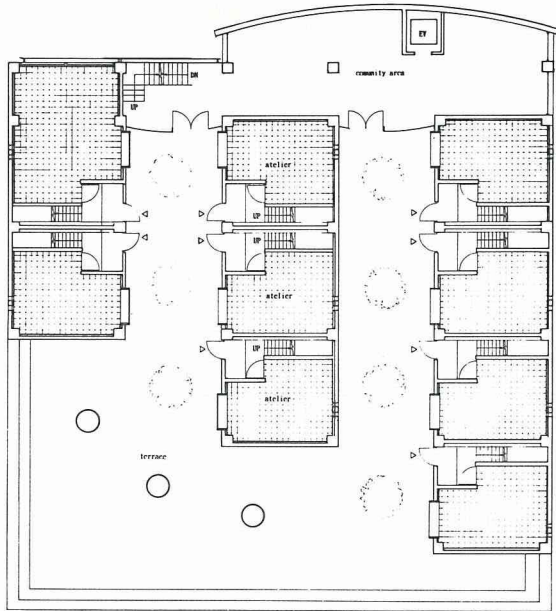
■垂直方向の系を求めて、逆円錐を採用した。逆円錐がもたらす斜めの壁は随所に独特で魅力的な空間を生みだしている。逆円錐の中は、void性を維持するように配慮しつつ、移動経路を配した。■キラリ通り沿いにガラスのcubeと、ガラスのshowcaseを並べた。そこにはartとfashionによる、非常に短いtermの表現が飾られ、通りに向かって先端的で都市的なイメージを振りまくことになる。■façadeは逆円錐、cube、showcaseを受けて、全体を幾何学的な構成で調整することでデザインした。■1, 2階は、食料市場と食料雑貨店を設け、通り側と裏手の住宅地をつなぐ流れをもたせることで、この建物が地域住宅および敷地になじむよう計画した。

# Communication Gallery

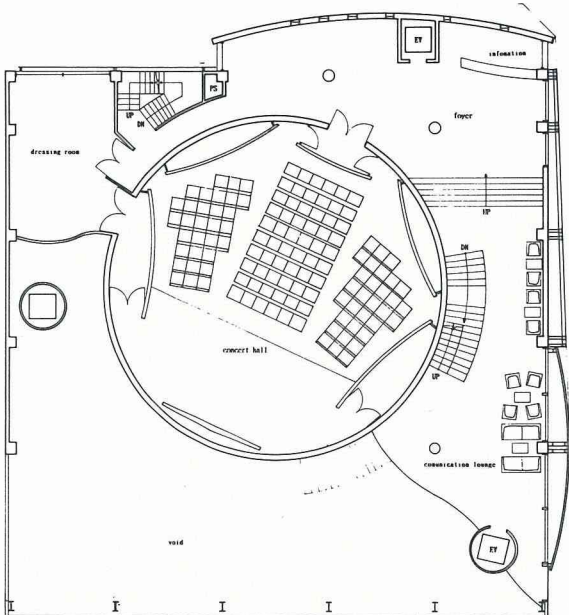
久野靖広  
Yasuhiro Kuno



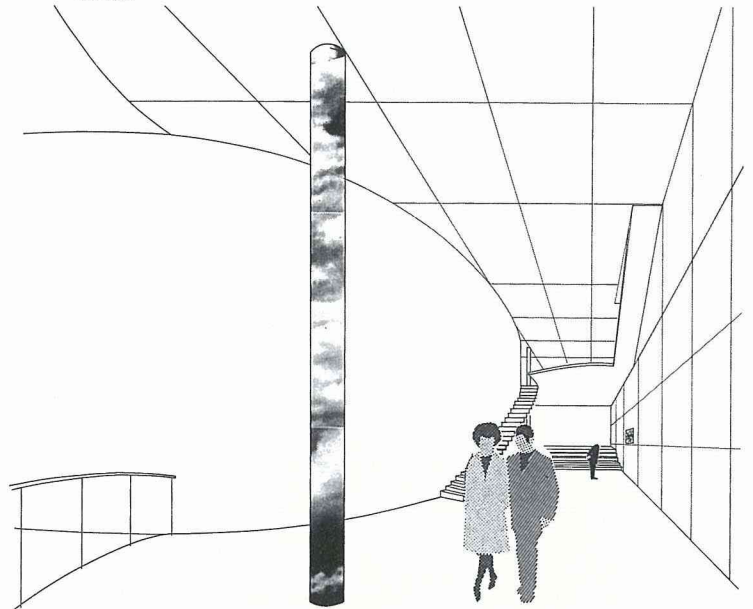
section



penthouse floor



2nd floor

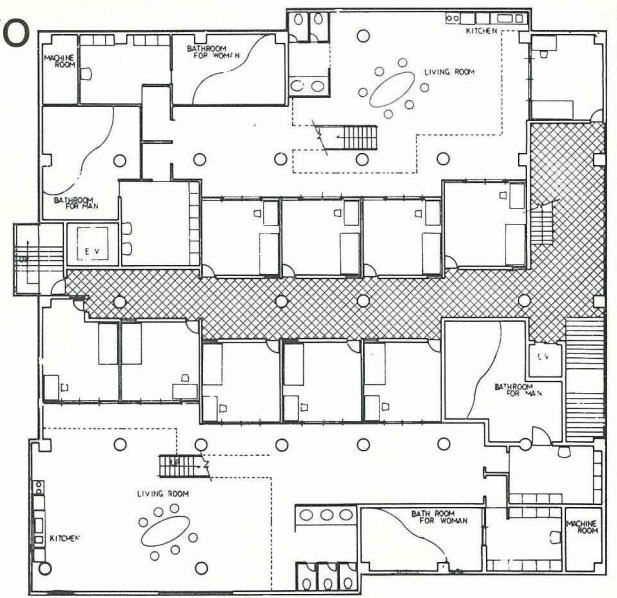
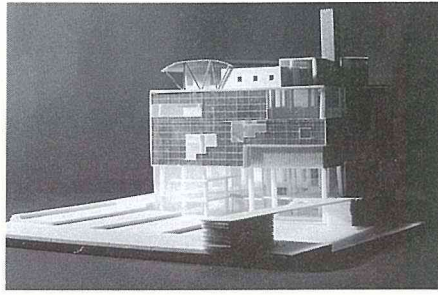


■敷地は交通量の多い外苑西通りに面し、古くからの住宅街と大通りとの境界にあたる。ここに2種類のホールをもつ文化施設を計画した。■ひとつひとつの形にエレベーターシャフト、ホールといったひとつひとつの機能を与える。これらは大通りにおけるサインとなる。また、ガラスの一部を半透明とすることで内部の人びとの姿を抽象化し、その動きをひとつのオブジェ

することを意図する。隣接する建築の斜めの壁の広場に向かってスクリーンを設け、映像を写したりすることでイベントを行えるようにした。■住居は芸術家のためのアトリエ付きであるが、その使い方は多様である。音楽家が時間を気にせず練習できる家であったり、外国から来日した芸術家の短期間の仮住まいにすることも可能である。

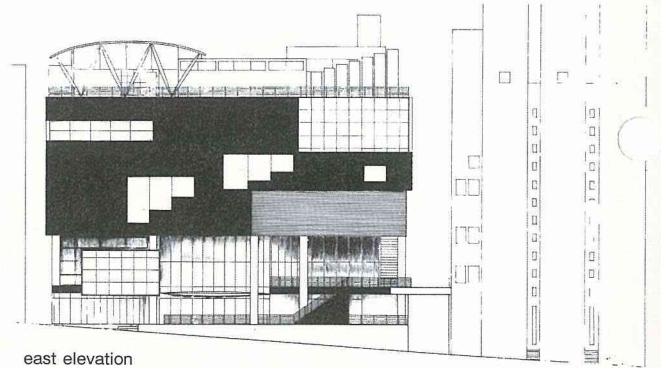
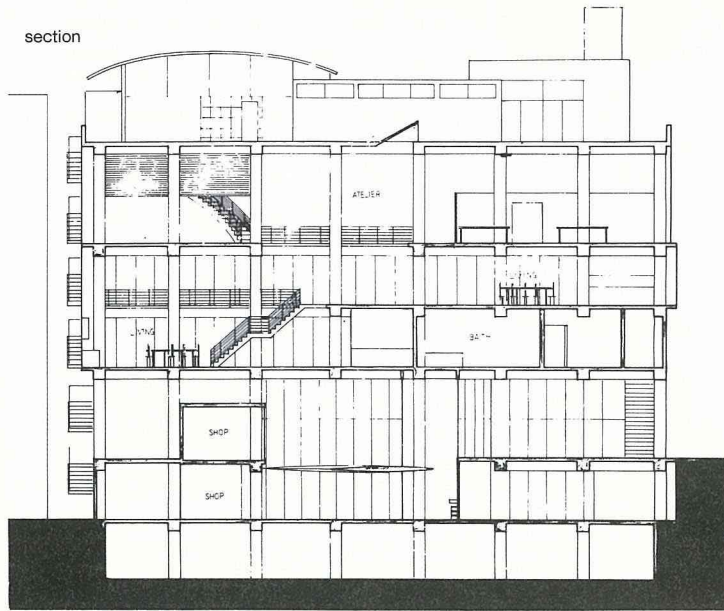
# Building-Type for Living in Tokyo

高橋功次  
Koji Takahashi



3rd floor

section



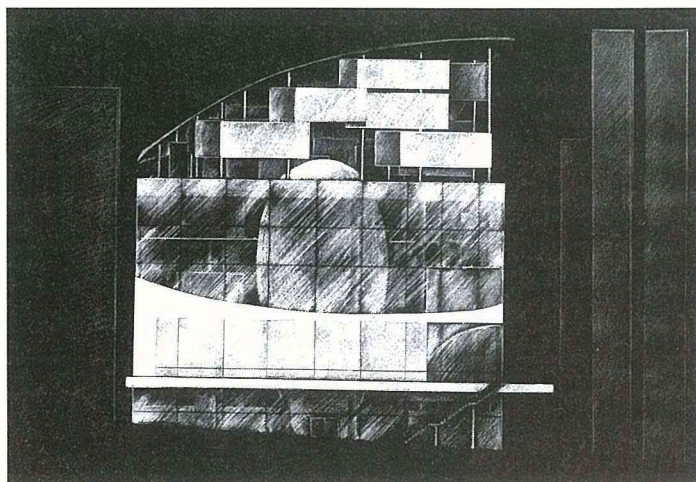
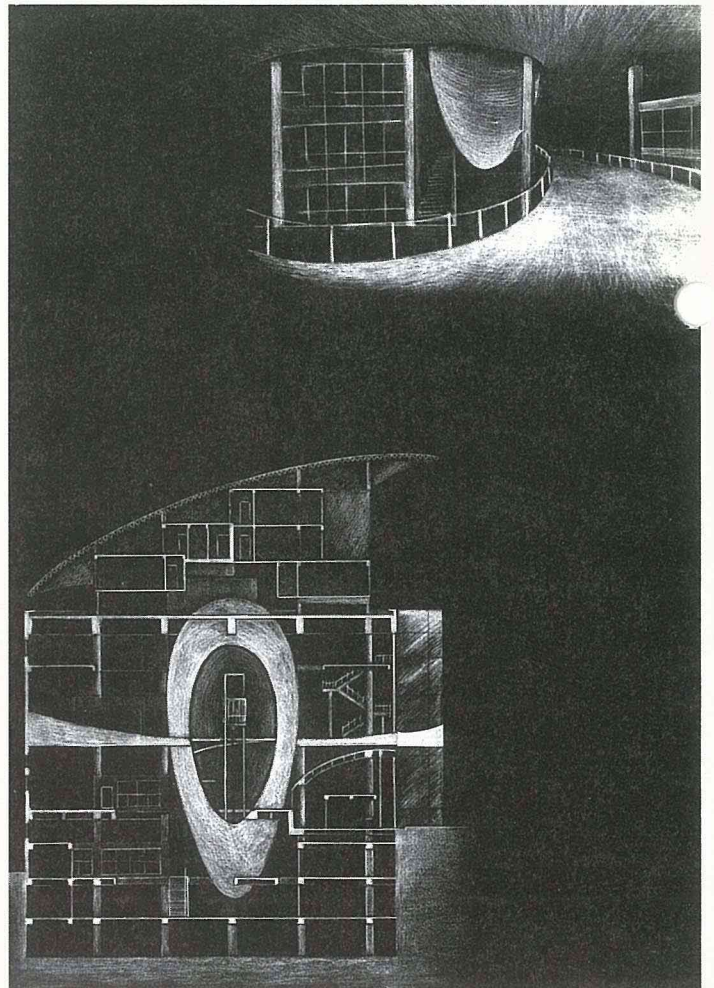
east elevation

# Audio Visual Art Center

増山絵理奈  
Erina Mashiyama

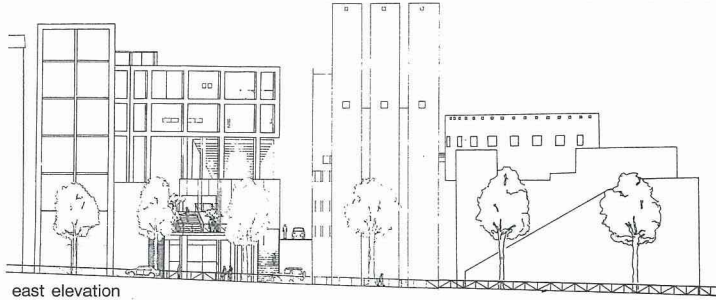
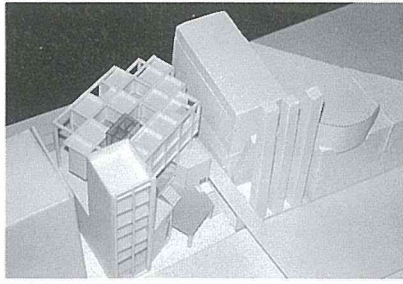


1st floor



# City Arts

海野宏樹  
Hiroki Unno

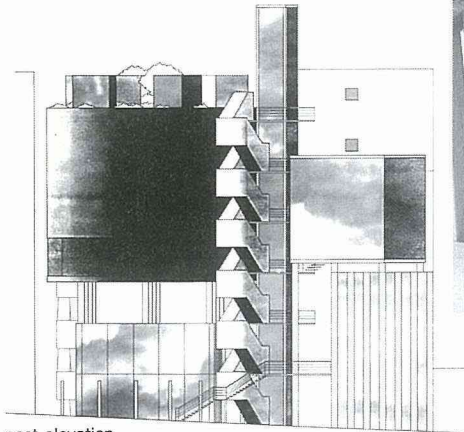
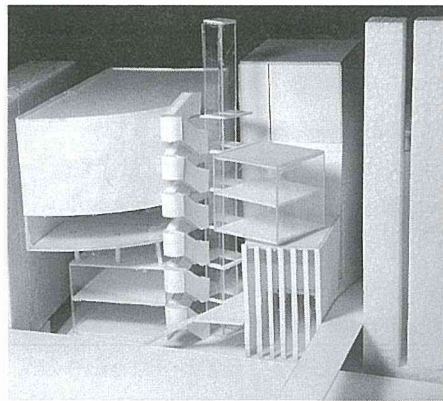


east elevation

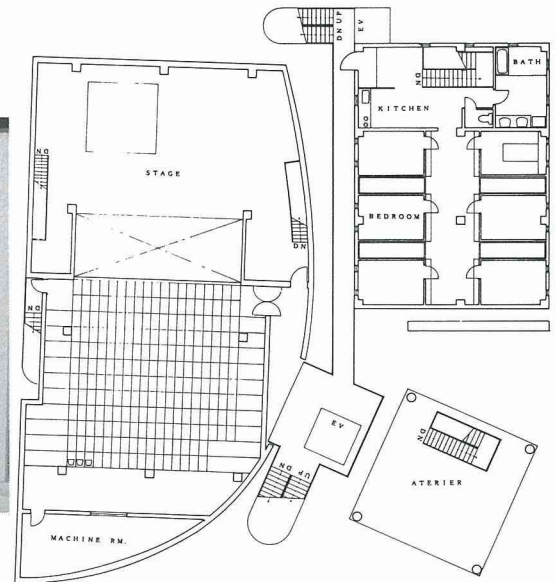
1st floor

# The Tree of Creation (Art Complex)

金井 修  
Osamu Kanai



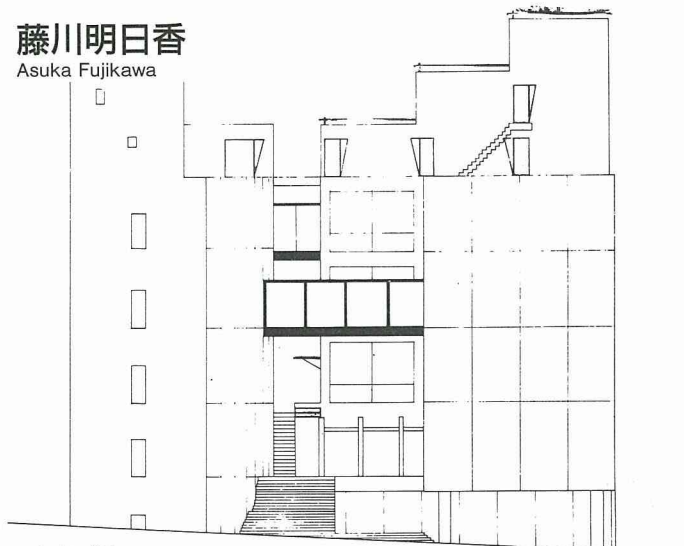
east elevation



5th floor

# Complex

藤川明日香  
Asuka Fujikawa



east elevation



2nd floor

# 1994年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Work: Autumn Semester

## 駅前地区の景観整備計画 Station Townscape

### 講評

助教授 大佛俊泰

この課題は、計画対象が単体建築にとどまらず面的な広がりをもっているという点において、他の設計課題とは若干趣を異にしている。対象地区に内在する問題点や特徴についてより深く意識してもらい、地区との関わり方や計画案の果たす役割などについて熟考してもらいたいという意識も強い。

具体的には、東急沿線の駅前(中目黒、祐天寺、学芸大学、都立大学、自由が丘、西小山)をひとつ選び、現地調査をふまえた上で駅前周辺の景観整備計画を行うというものである。

課題主旨の説明後、授業は以下のとおり進められた。まず、選定した対象駅に各自がおもむき、建物状況(建物の用途・業種・形態・構造・看板など)や駐輪場・駐車場、植栽やストリートファニチャー、歩車の動線・交通量といった景観構成要素についての調査を行う。ここでは対象地区の優れている点や問題点などを写真やスケッチ・図面などに記録し、また、必要に応じて現地でのヒアリング調査も実施することにしている。さらに、以上の現地調査の結果をより明確にするため、得られた結果をA1のケント紙に整理し各自に発表してもらうという要領である。つまり、景観整備を行う上で留意すべき要点や課題について整理し、優良点をどうかし、問題点をどう改善してゆくかについての調査・発表・ディスカッションを繰り返し行っているところに本課題の特徴がある。

まず、全体的な講評について反省的視点から概説したい。多くの問題点を発見し、地区内の特徴を拾い集めるまでの積極性は評価されてよいだろう。しかし、それらを構造化し、整理するまでには残念ながらいたらなかった感がある。ことばをかえれば、あまりにも大きな問題点に取り組み、お手上げ状態になってしまった学生も多かった。日頃から問題点の捉え方や整理の仕方について、意識的にトレーニングしていることが必要だろう。ただ

●内容：現地調査に基づき、中目黒/祐天寺/学芸大学/都立大学/自由が丘/西小山の各駅周辺の景観整備計画を行う。

①現地調査：景観を考慮した場合にみられる問題点、優れている点など、さまざまな視点からの特徴を、写真・スケッチ・図面等に記録する。

②ディスカッション1：現地調査でえられた写真・スケッチ・図面等をパネルに整理し、どういう視点から分析するかについての発表・議論を行う。

③ディスカッション2：各駅周辺の景観整備を行ううえで、良いところをどうかし、問題のあるところをどう改善してゆくかについての発表・議論を行う。

④ディスカッション3：整理した優良点や問題点に対しての基本的な整備方法をパネルにまとめ発表し、議論を行う。

⑤計画案作成：以上の現地調査・ディスカッションなどをもとに、駅前地区の景観整備計画を作成する。

⑥講評会：提出された景観整備計画案の講評を行う。

し、短期間に十分な指導が行えたかどうかは疑わしく、出題者側にも反省点は残る。

また、課題設定の曖昧さも手伝ってか、当初意図した「地区との関わり」や「景観整備」という目標からは、かなり距離のある結果となってしまった。その地区に住まう人びとや、その地区を訪れる人にとって、自分の計画案がどのような役割を演じる可能性があるのかについてももう少し考えてほしかったというのが本音である。たとえ地味であっても、また、ささいなアイデアであっても、地区計画的視点からの検討がもう少しなされてもよかった。

東條案は、中目黒駅の狭隘な駅前空間に注目している。現在の改札口の位置を北側に移動させることにより駅前空間を確保し、同時に目黒川との一体的な景観構成を試みるという計画である。都市内河川の物理的制約に対する技術的解決案の提示も必要となるであろうが、川沿いに残されたデッドスペースを活用しながら、河川を景観要素のひとつに組み込むというアイデアは評価できる。ひとつ難点を指摘すれば、駅前空間と商業集積との空間的關係が疎遠になってしまい、駅から人びとを誘導する装置としての歩道橋はいく分貧弱な印象を与える。もう少し大胆な「仕掛け」を試みても良かったのではないだろうか。

中野案は、大通りと鉄道路線が地区内移動の障害となっている点に注目している。四つに分断された地区をリング状の歩道橋で連結

すると同時に、障害の要素であった大通りの自動車交通をひとつの都市的景観要素として取り込もうと試みている。若干アクロバティックではあるが、実現の可能性を感じさせる案であり評価に値するといえよう。ただし、景観整備計画を主題とした課題設定である以上、この計画案が景観構成上どのような役割を果たすかといった視点からの考察や図面表現もそえられてもよいだろう。

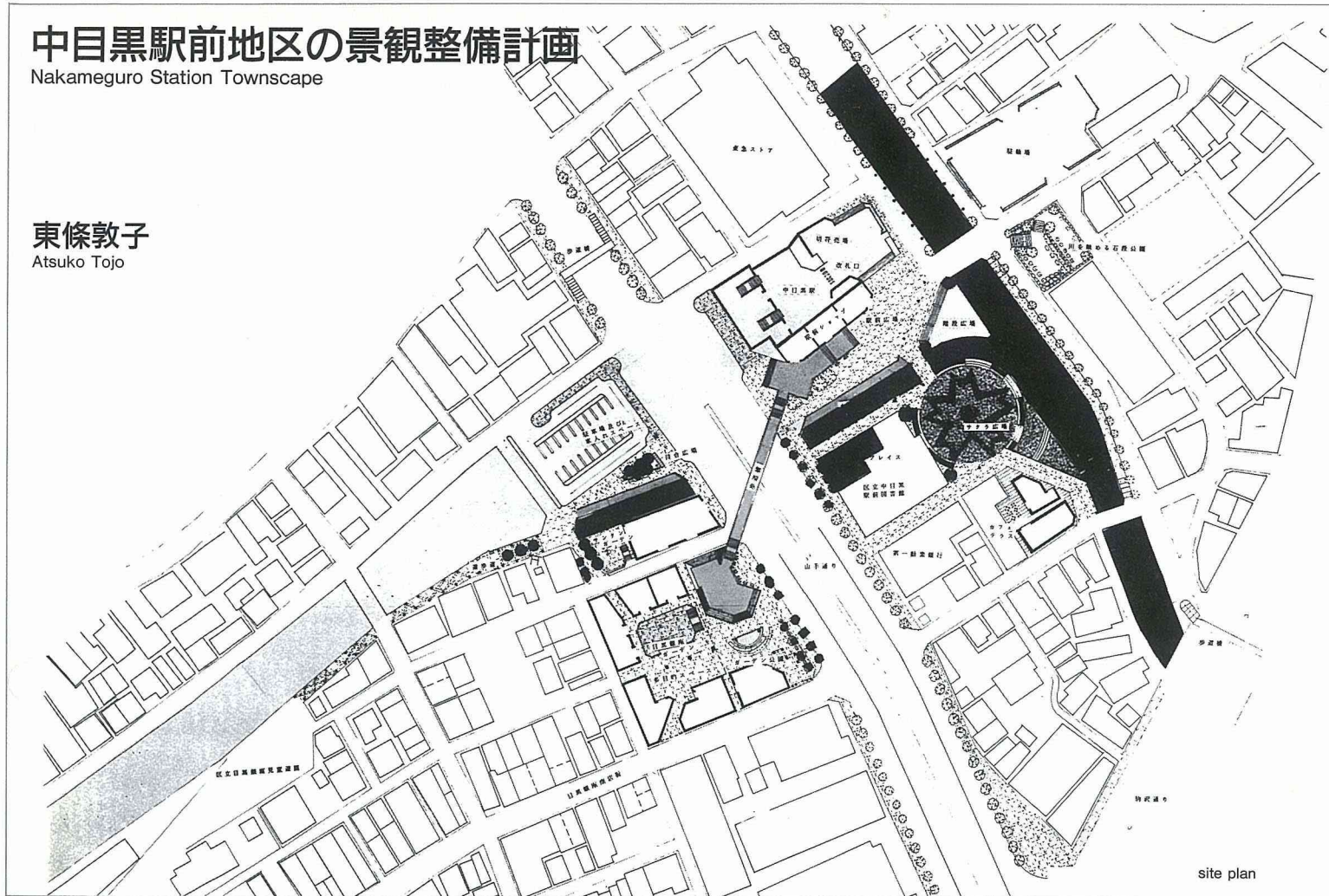
学部4年間の「集大成」と称して卒業設計に取り組む時期がやがてくる。それを意識してか、今まで扱ったことのないような大規模なプロジェクトに挑戦する学生も多い。門限の多さや大きさ、その整理の方法などについて経験の浅い彼らは、自分かいったい何をやりたかったのか表現できないままアウトプットし、自己嫌悪に陥る。こうした現象は毎年必ず見受けられる。意匠デザイン能力の向上は言うまでもなく、それまでに行うべきトレーニングも多いようである。

# 中目黒駅前地区の景観整備計画

Nakameguro Station Townscape

東條敦子

Atsuko Tojo



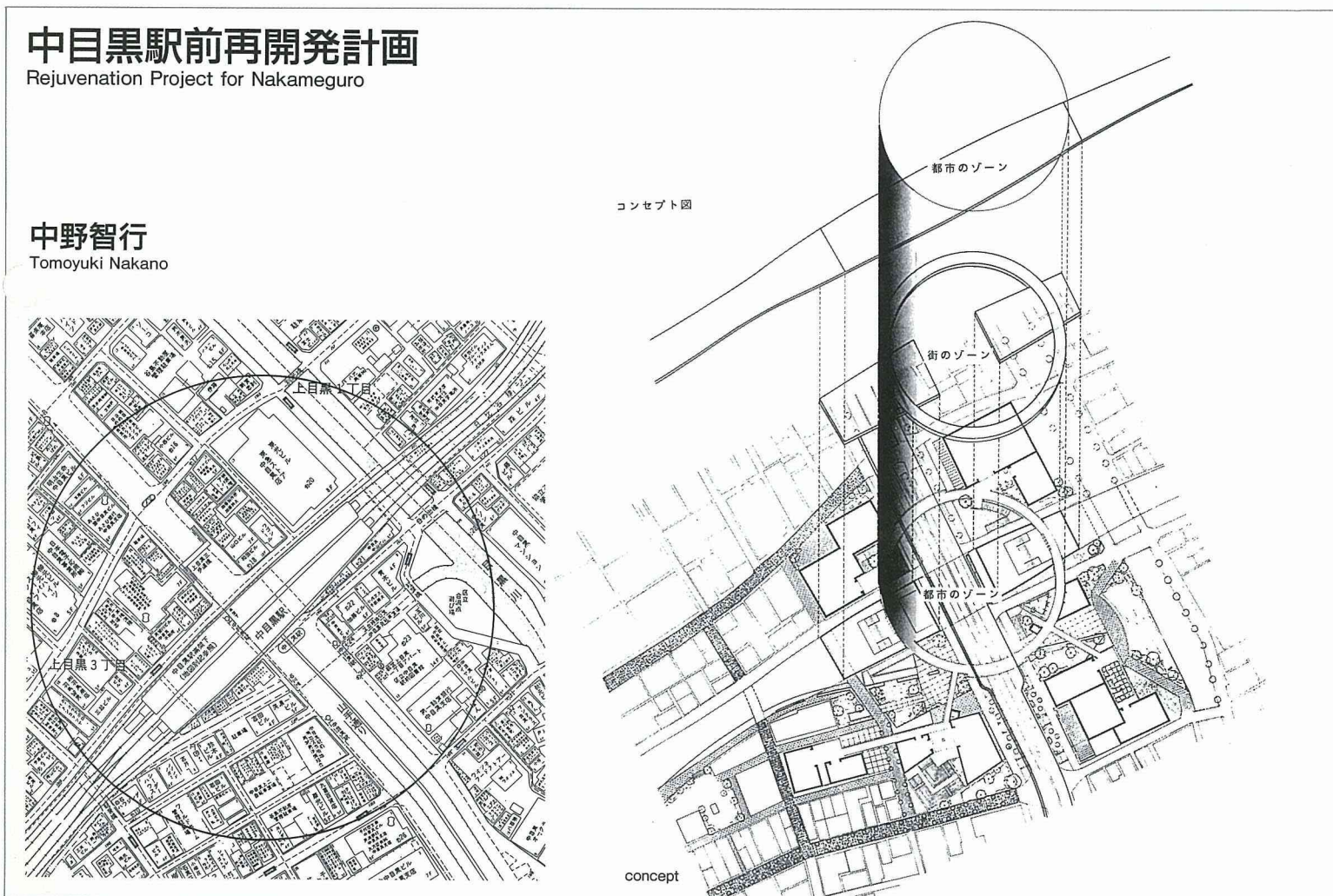
site plan

# 中目黒駅前再開発計画

Rejuvenation Project for Nakameguro

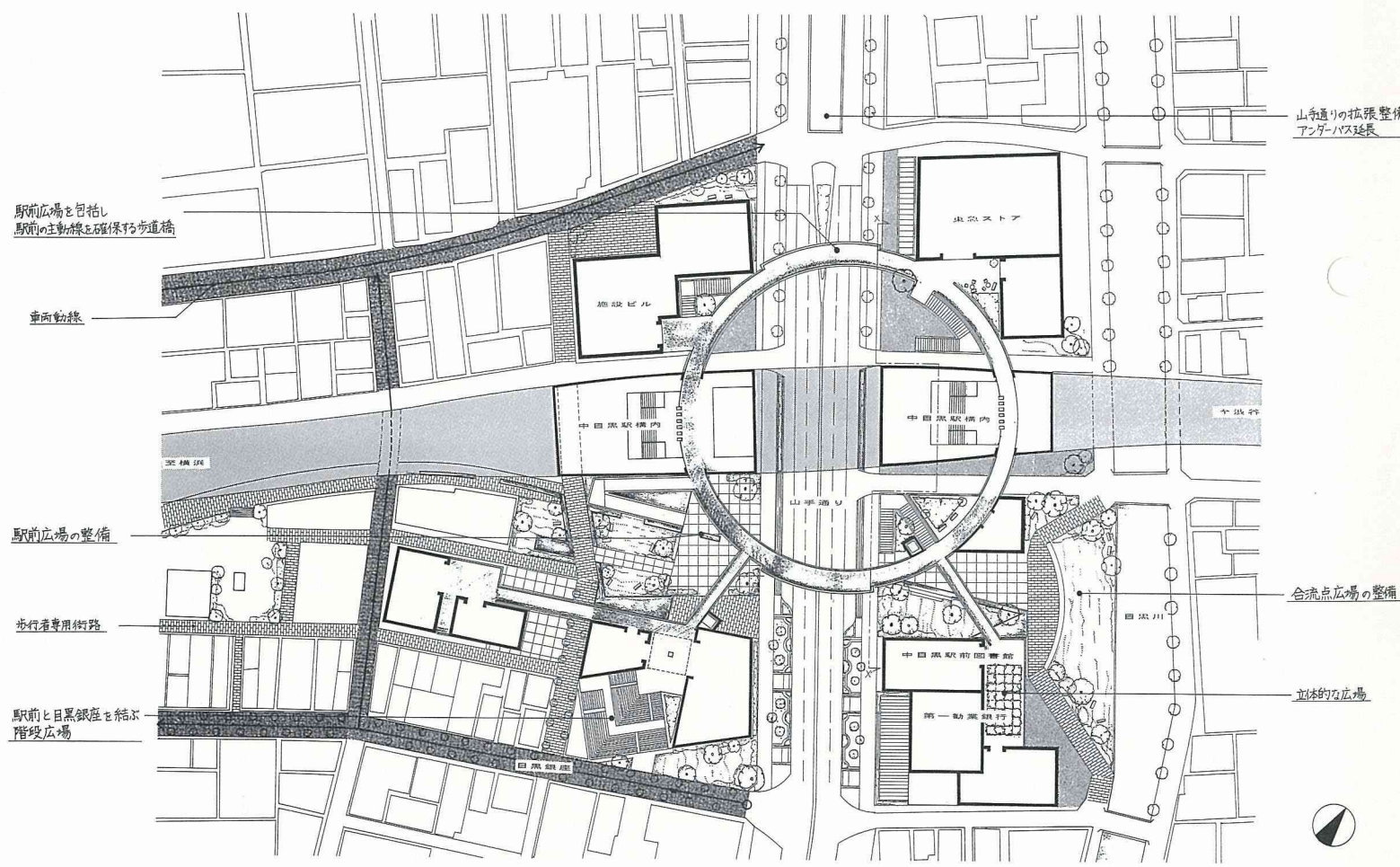
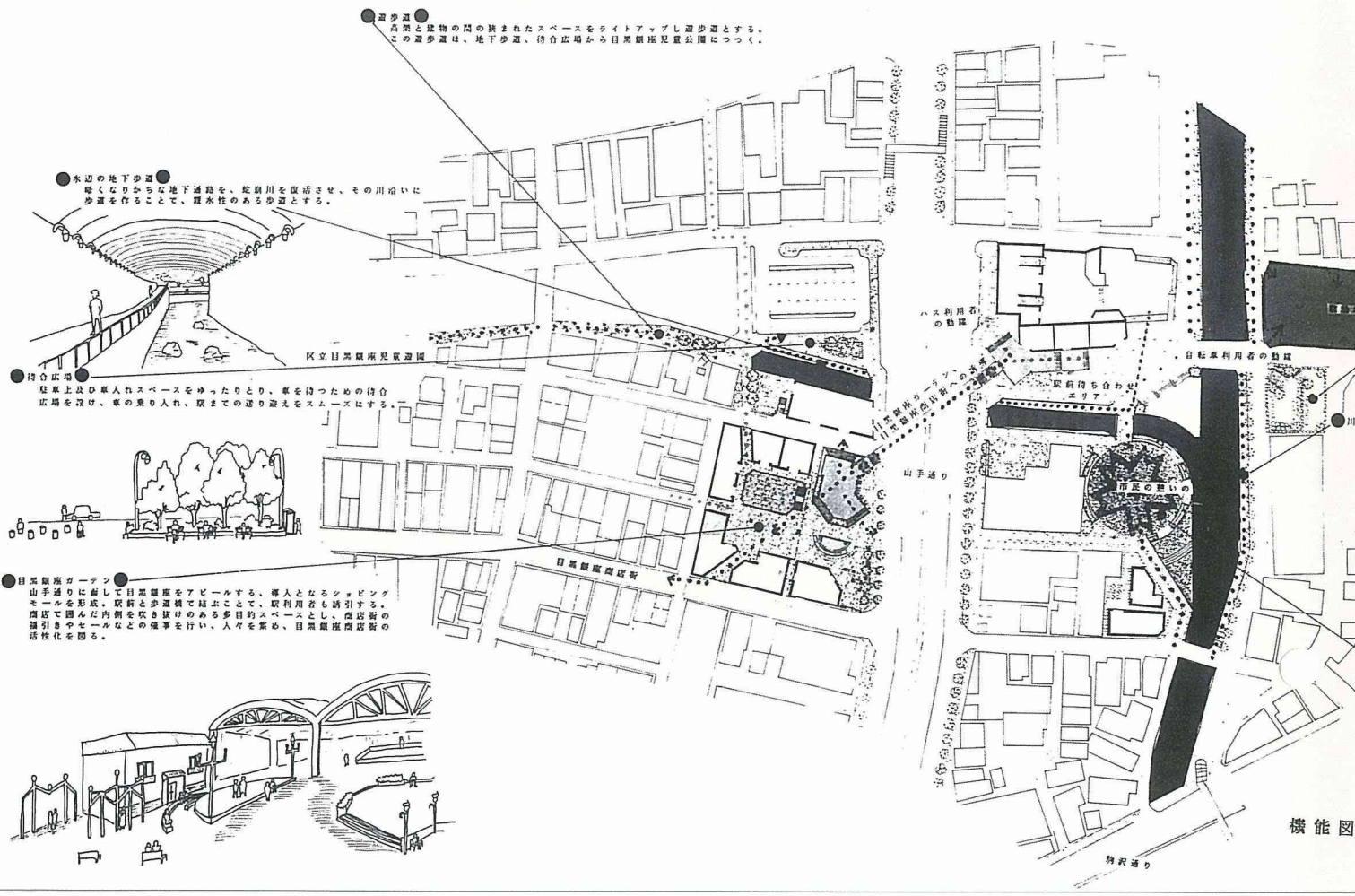
中野智行

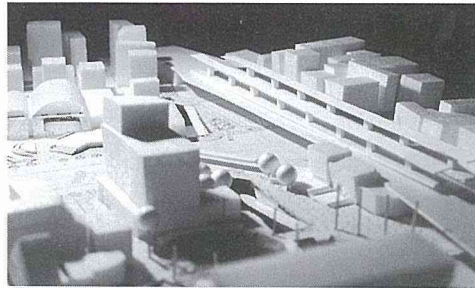
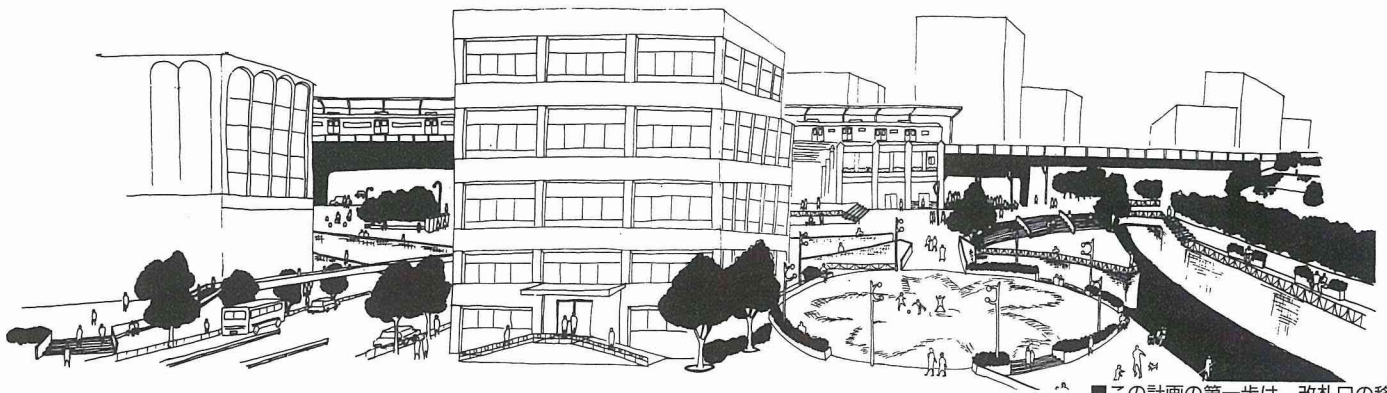
Tomoyuki Nakano



コンセプト図

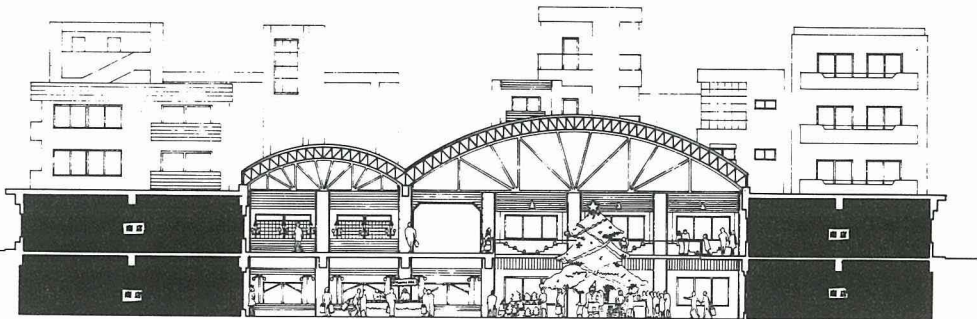
concept



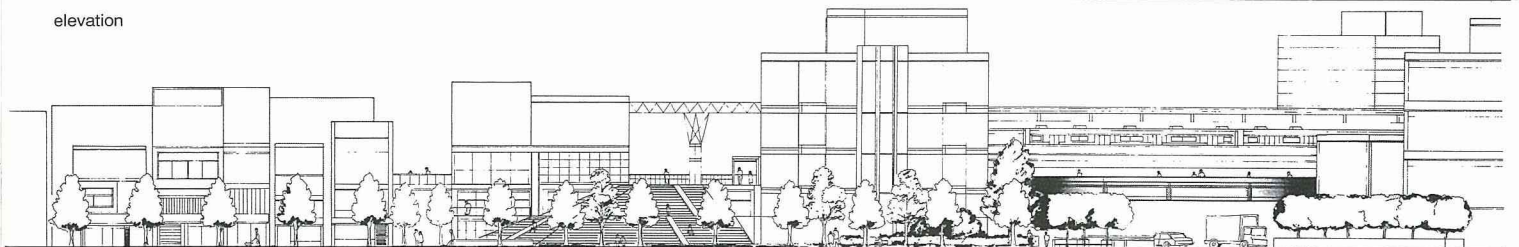


■この計画の第一歩は、改札口の移動である。高架下の山手通りに面した空間的広がりをもたない現在の改札口を、この地域の特徴でありながら、うまくいかされていなかった目黒川の近くに移動させた。それにより駅前広場が確保され、水という景観的要素をいかすことが可能となった。川を中心とした駅前広場を形成することで、現在ほとんど利用されず空き地のようであった合流点の遊び場に活気が生まれ、川沿いの遊歩道の利用も促進される。■また、山手通りにより二分された反対側の土地へのアクセスとして、既存のもの以外に歩道橋と地下通路を新たに設けた。■歩道橋は、今まで山手通りの裏にかくれていた目黒銀座商店街の導入部として形成したショッピングモールの広場と駅前を結び、商店街の活性化を目指している。地下通路は蛇崩川を復活させ、親水性のあるものとし、タクシー乗り場や遊歩道へと導く。

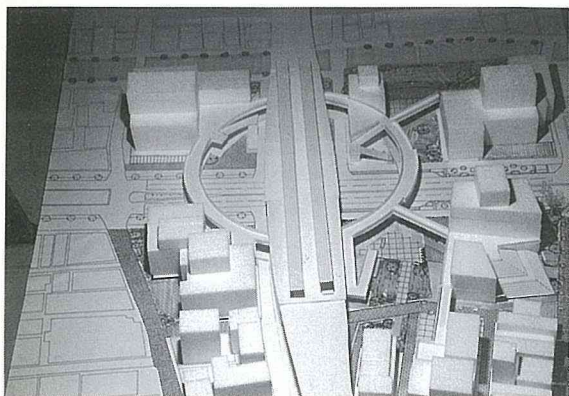
section



elevation



section



■中目黒駅前は鉄道と大通りが交差する交通の要所であり、一見非常に都市的な景観をみせている。しかし実際その背後には地域的な商店街、歴史的な遺産、目黒川などの自然がある。都市の中心としてふさわしい駅前景観の形成とともに、その背後にかくれた地域性を再生させることを考えた。■駅改札へ直接アプローチできるループ状の歩道橋をつくる。これにより駅前における歩行者動線の自由度が増し鉄道と山手通りで大きく分断されてしまっている地区につながりが生まれる。さらに歩車分離が完全になされることで中目黒駅前の特徴のひとつである山手通りのピスタを景観として見せることが

できる。■ループは隣接する建物をめぐりとり、そこに小さな広場をつくる。ここは買物の合い間、バスを待つ間のちょっとした「たまり」の空間となる。■駅前には大きい広場がふたつある。ひとつは「目黒銀座」とよばれる地域密着の商店街にむけて、もうひとつは駅と交差して流れる目黒川にむかって開いている。これらは中目黒の地域性を色濃く反映しているにも関わらず都市的なもの（大通りや大規模なオフィスビル・商業施設など）の背後にかくれてその魅力を十分に発揮していない。ふたつの駅前広場はいわば都市と地域の接点に立ち、相互の自然な交流を促すためのものである。

# 1994年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Work: Autumn Semester

## Studies in Architectural Composition

### 講評

講師 團 紀彦

この課題は、建築の特定のプログラムとそのビルディングタイプのアプリオリな結びつきをいったん排除した上で、構成論的なアプローチを通じて、再び建築のタイプとプログラムの発見的な結合をスタディするために設けられている。第一段階では、ゼミナールの形式の中で、ふたつの空間領域のオーバーラップの問題と、いくつかの建築の基本的タイプロジーとその変形に関わる短期のスケッチプログラムを設定し、それについて討議を行う。第二段階として、Figure・Groundに基づくふたつの課題として、ひとつは、ふたつの街路に面する変形した都市型の敷地 (Hotel de Bauvais) に最初に設定された容積から30%のボリュームをボイド化する操作(負の構成)を行い、もうひとつは、平原の中にその30%のボリュームをソリッド化する操作(正の構成)を行って各自それらに対応する適切なプログラムを設定しながら建築のエスキスを同時併行して進めることが求められている。

ここで紹介する5人の作品は、いずれも優れたものをもっており、建築としての洗練度と可能性が評価されたものである。安森君の提案は、課題I・IIともに、明快な構成理念をふまえた上で建築と正面から取り組んでいる点でバランスのとれた優れた作品であるといえる。強い難点をいえば、造形の多様な展開に比べて構造のとり方がモノラルで、そのことが全体の空間性を若干弱めているように思われた。佐々木君の作品もまた、水平方向に引き抜かれた円筒形のフォルムにショッピングモールとしての現実的なプログラムを与えようと試みている秀逸な作品である。しかし、建築にリアリティーをもたせるスタディが進むにつれて、その造形的な必然性にもうひとつ説得力が欠けている点が気になった。日端さんの作品からは、その造形性と空間性の可能性を感じさせる点を評価したが、構造のとり方やプログラムの与え方に強引さが目

### I Composition

- symmetry
- asymmetry
- figure/ground

J U X T A P O S I T I O N

### II Program

- typology
- function
- use

### III Environment

- urban
- suburban
- natural

e1, e2, e3.....e1

### Elements

●Site 1

- 都市の中の一画(どこの都市かは各自で想定)
- 右図に示す75m×75mの範囲
- 幅員10mと7mの2つの街路に面している。
- 隣接する建物は敷地いっぱい建っており、高さは20mでほぼそろっている。計画する建物もこの高さにはほぼ合わせる。
- 建物の外形輪郭は変えられない。中身はまったく新しく提案する。
- 建物は道路境界いっぱい建てる。ファサードは変えてよい。

●Site 2

- なめらかに連続した広大な広場の中。
- 広場の中に75m×75mの範囲を想定し、その範囲内で5mの高低差をつける(各自想定する)
- ランドスケープの方向性や特徴(近くに海や森があったり、敷地の中を小川が流れていたり……)は各自

自由に想定する(必ず想定する)

- 建物はいかなる方向からも見られるものとする
- それくらい広々としたところにある。

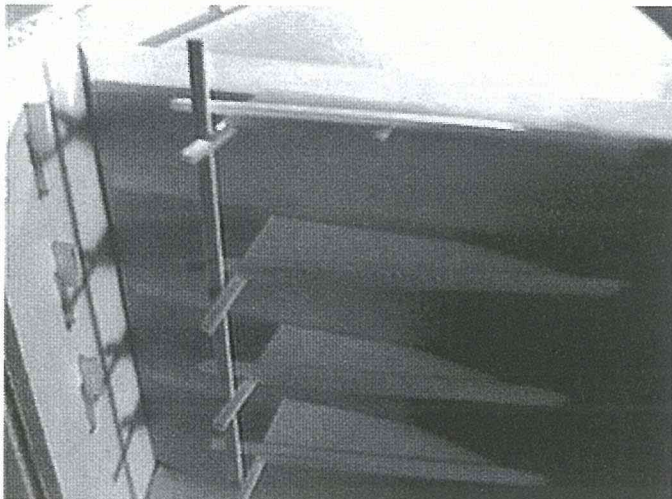
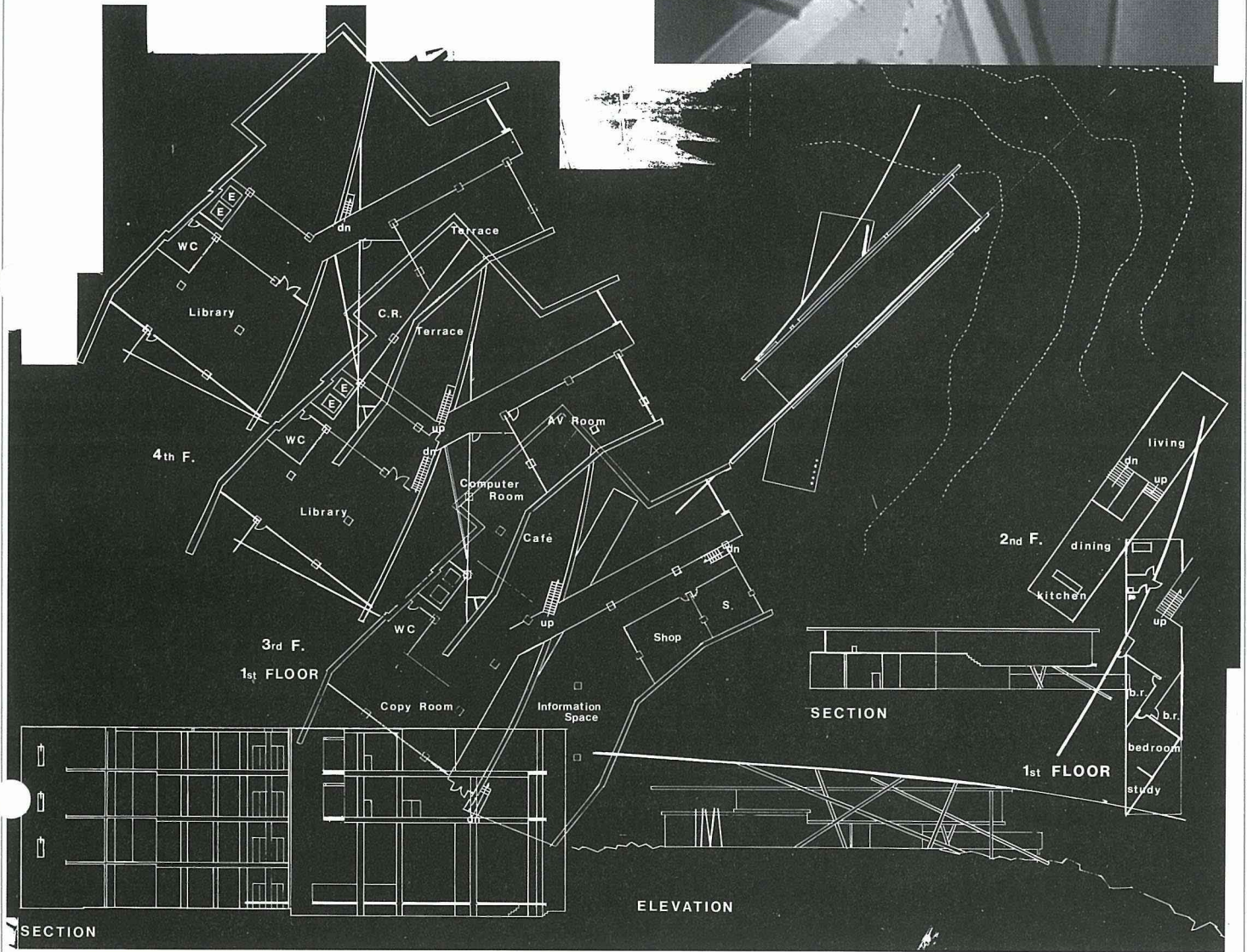
Site 1 敷地図

立ち、その点をクリアすれば、さらに密度の高い作品に展開できたように思う。宮口君と吉田君の作品に対しては、高度に洗練された造形理念と、形態処理能力を評価することができるが、いずれも建築としてのつめの甘さが目立っているのが残念である。建築のプロ

グラムとタイプの関連性に一層のリアリティーを加える努力をすれば、もっとも高い評価を与えることのできる作品となったはずである。結果的には、それぞれに一長一短はあるものの、優れた将来性を示す作品が多く提出されたことを大変うれしく思っている。

# Treasure of Ideas/ In between Blue and Blue

日端美帆  
Miho Hibata

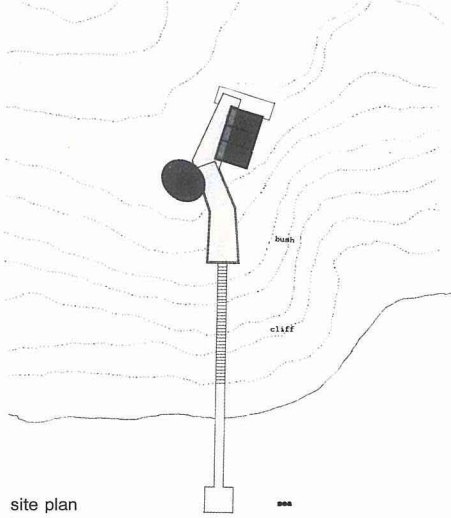
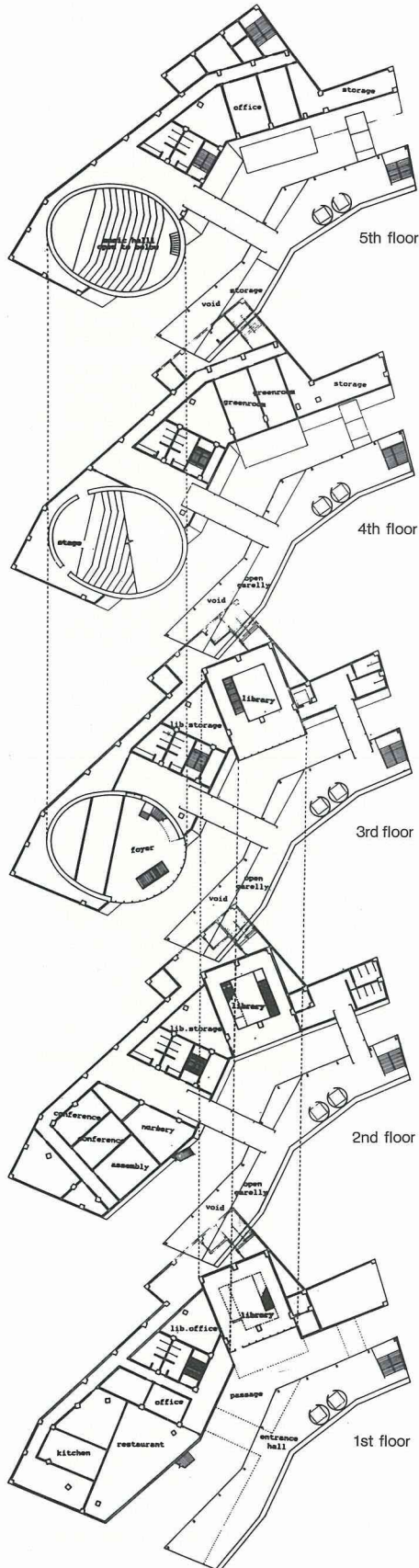


■いびつな空白。その輪郭の複雑さと、  
道との関係性、そして場所性（都市）  
を考慮していくなかで、共通要素とし  
ての形態を模索していった。■都市に  
対するイメージとして、あらゆる情報、  
精神的な衝突、屈折、速度……が自ら  
の中に潜在意識として存在することを  
知り、初めて曲線、直線の絡み合う構  
図に到達した。まるで、分子が周囲の  
抑圧の中を衝突を繰り返しながら屈折

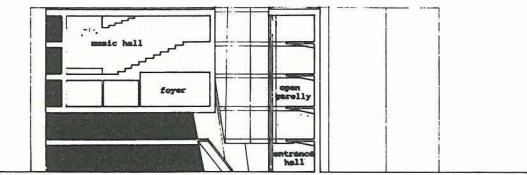
し、突き進んでいくような様相。複雑  
な輪郭をもつからこそ、その意図は一  
層はっきりと全面に表われるのではな  
いだろうか、■いっぽう平原のほうは、  
共通要素をそのまま持ち込み、かつボ  
リュームにかなりの変化をもたせた。  
空の青と、海の青の間に溶けていき  
ような透明感、そして地平線の彼方にま  
で届きそうな伸びやかな動きを感じと  
ってほしい。

# Studies in Architectural Composition

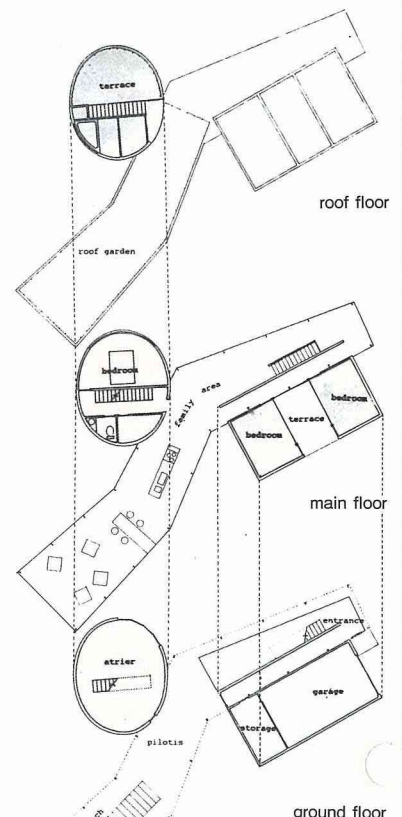
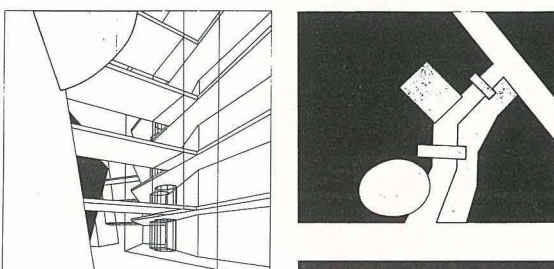
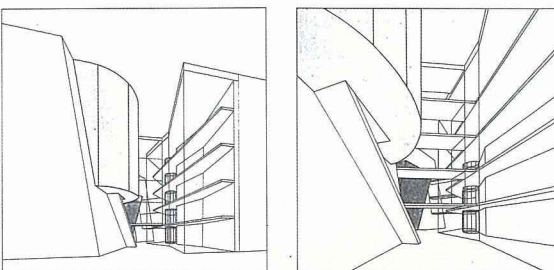
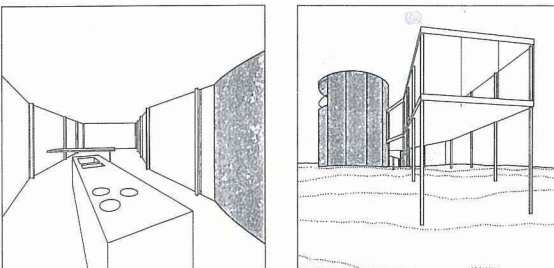
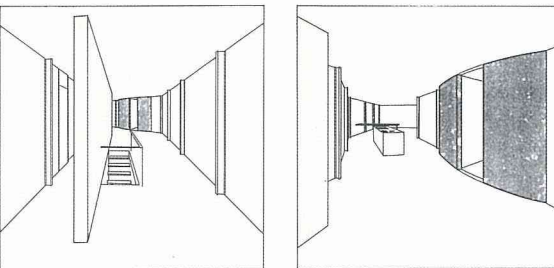
安森亮雄  
Akio Yasumori



site plan



section

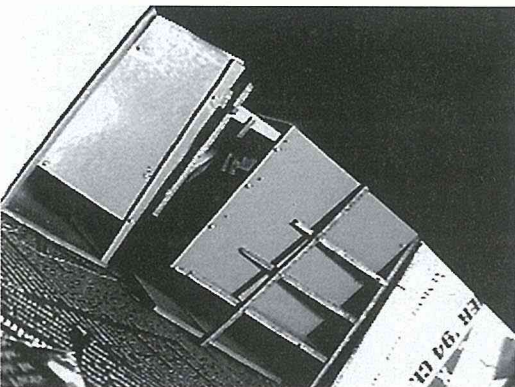
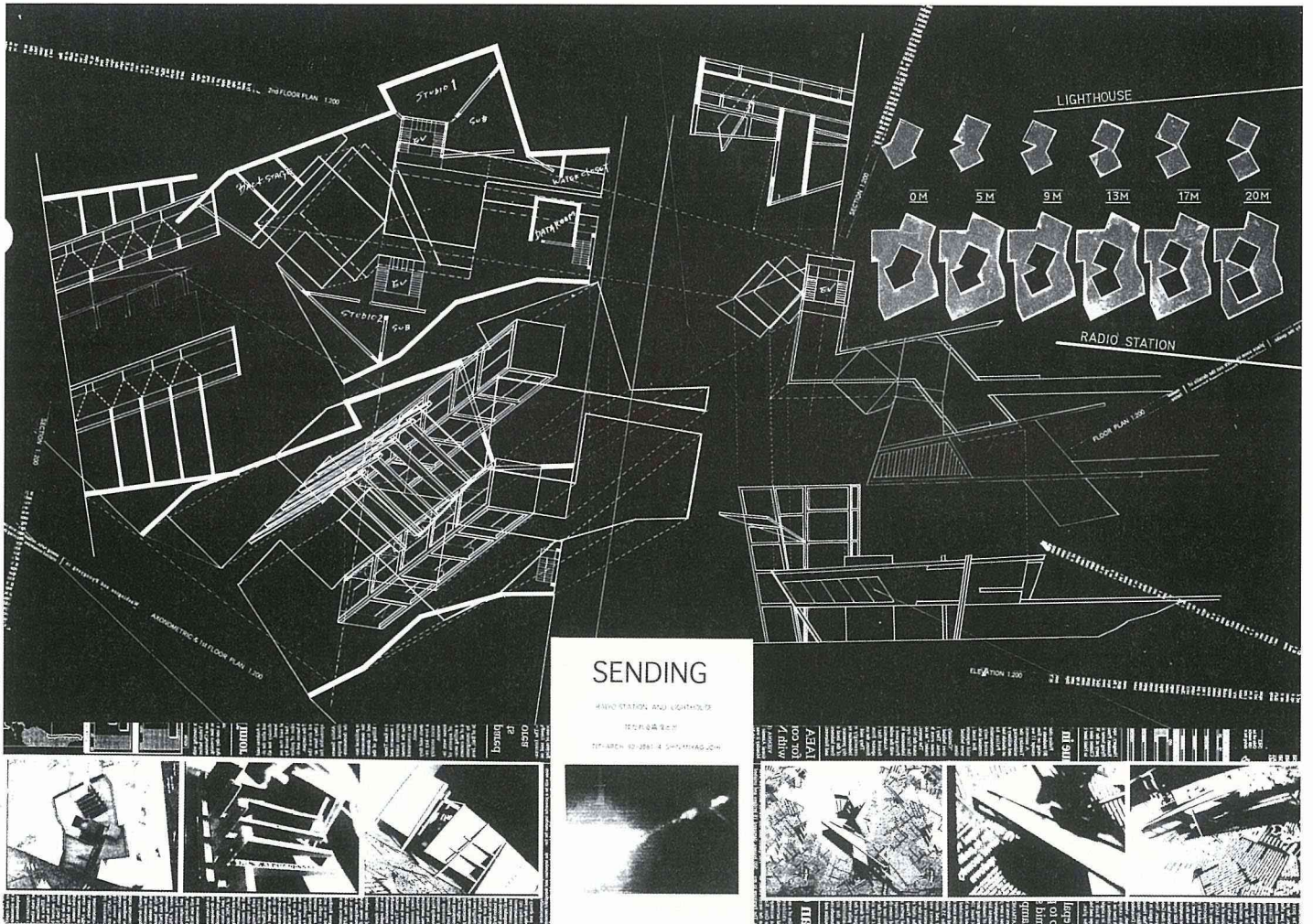
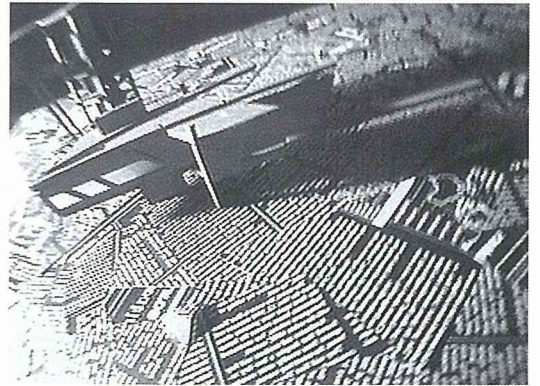


■敷地1：都市の中の一隅。敷地外形と高さ制限により、敷地は3次元の「地」と認識できる。接道を結ぶパブリックなpassageをつくる。「図」としてのひとつのポイドと、欠きとられた「地」としてのふたつのマッセが出現する。プログラムは、都市のコミュニティーセンターである。いっぽうのマッセはRCラーメン造であり、音楽ホールと図書館が浮かぶ、他方のマッセは鉄骨造+ガラスカーテンウォールであり、エントランスロビーとオープンギャラリーとして機能する。■敷地2：広大な自然の中。敷地は形態をもたず、マッセはすなわち「図」となる。プログラムは、海辺に建つピラである。ガラスチューブのファミリースペースにRC壁構造のプライベートスペースがとりつく。■ふたつの敷地において、都市/自然、図/地、パブリック/プライベート、ポイド/マッセという関係を考えたい。

# 放たれる電波と光

Sending: Radio Station and Lighthouse

宮口 真  
Shin Miyaguchi

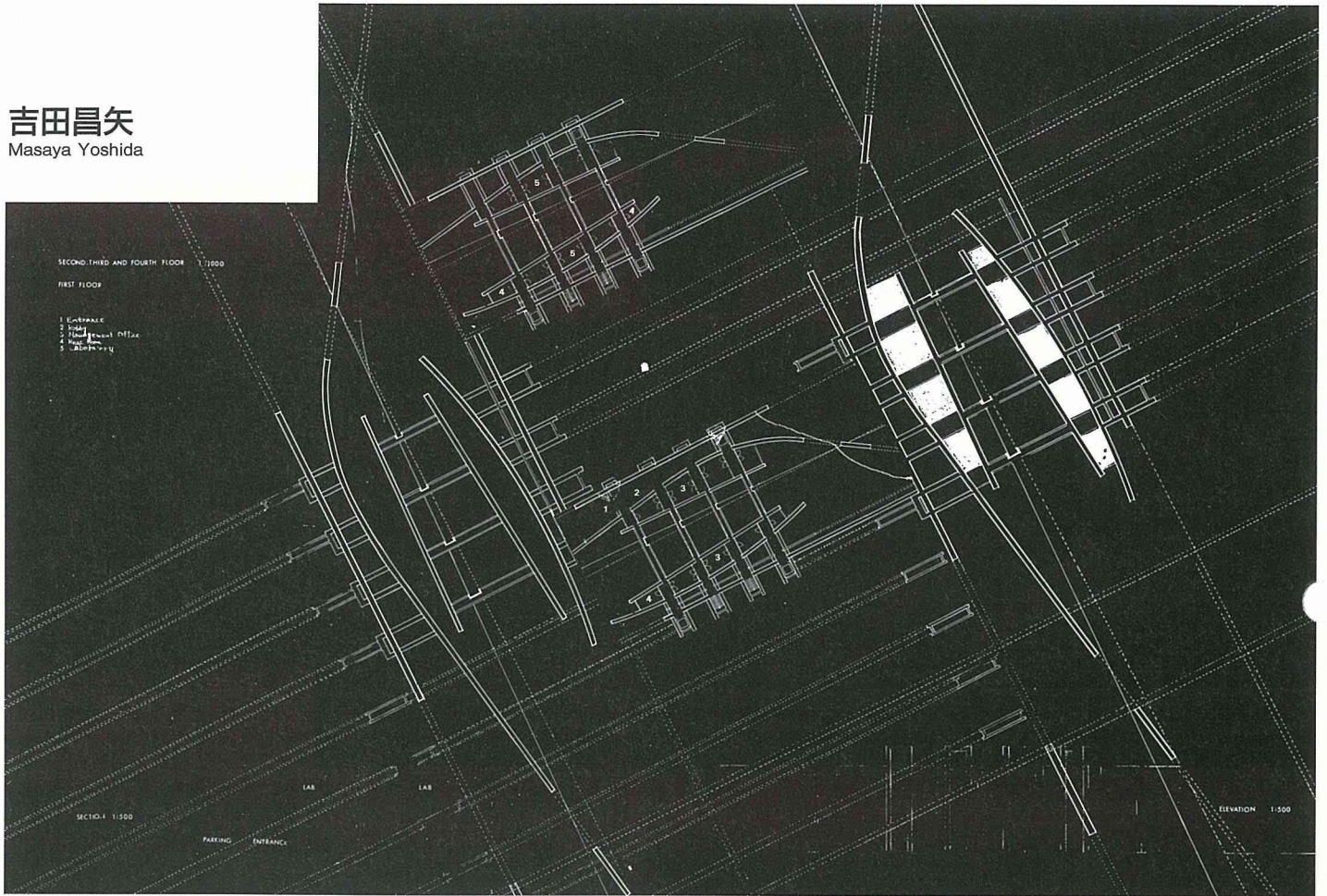


■ゲシュタルト心理学の「図」と「地」の反転をテーマとしたこの課題は、現代都市の建築について、私にさまざまなヒントを与えてくれました。多様で複雑な都市のコンテクストを解釈しようとするとき、このような手法がたいへん有効で重要なんだと、今は実感しています。■また奥が深く面白いテーマである反面、非常に難しい課題であり、自分の未熟さを思い知らされました。空間構成の発想はC.コフカの『ゲシュタルト心理学の原理』を媒介にただけであり、ラジオ局と灯台というプログラムの内部に手をつけることができませんでした。建築にならなかったことを反省しています。

# 国立蛋白工学研究所:研究棟・管理棟

National Protein Research Institute: Research bldg. & Administration bldg.

吉田昌矢  
Masaya Yoshida



## PROCESS I : 管理棟

そこでは、都市の中を猛スピードで駆ける時間が進化の流れと衝突する。  
エネルギーと自由度が生まれる空間、  
軸同士の融解と情報の融合。

## PROCESS II : 研究棟

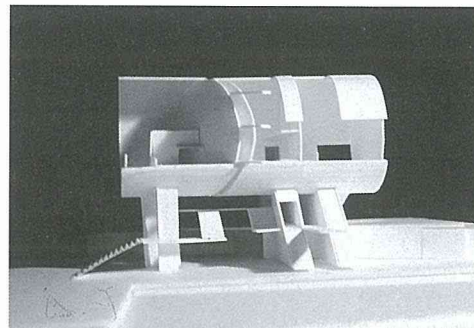
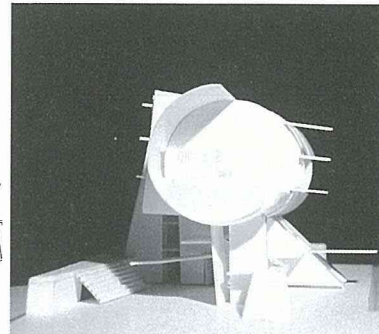
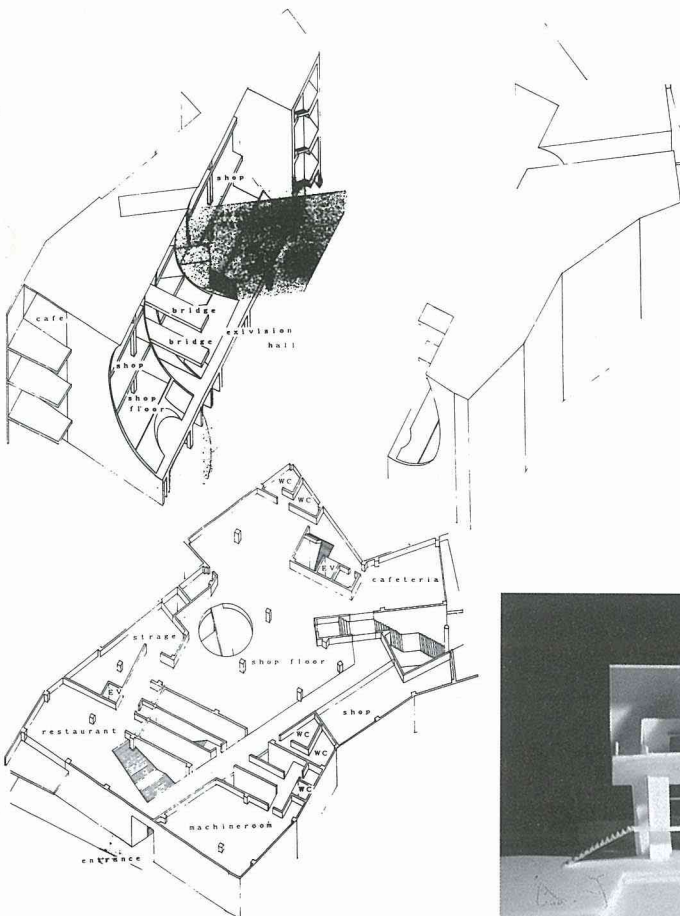
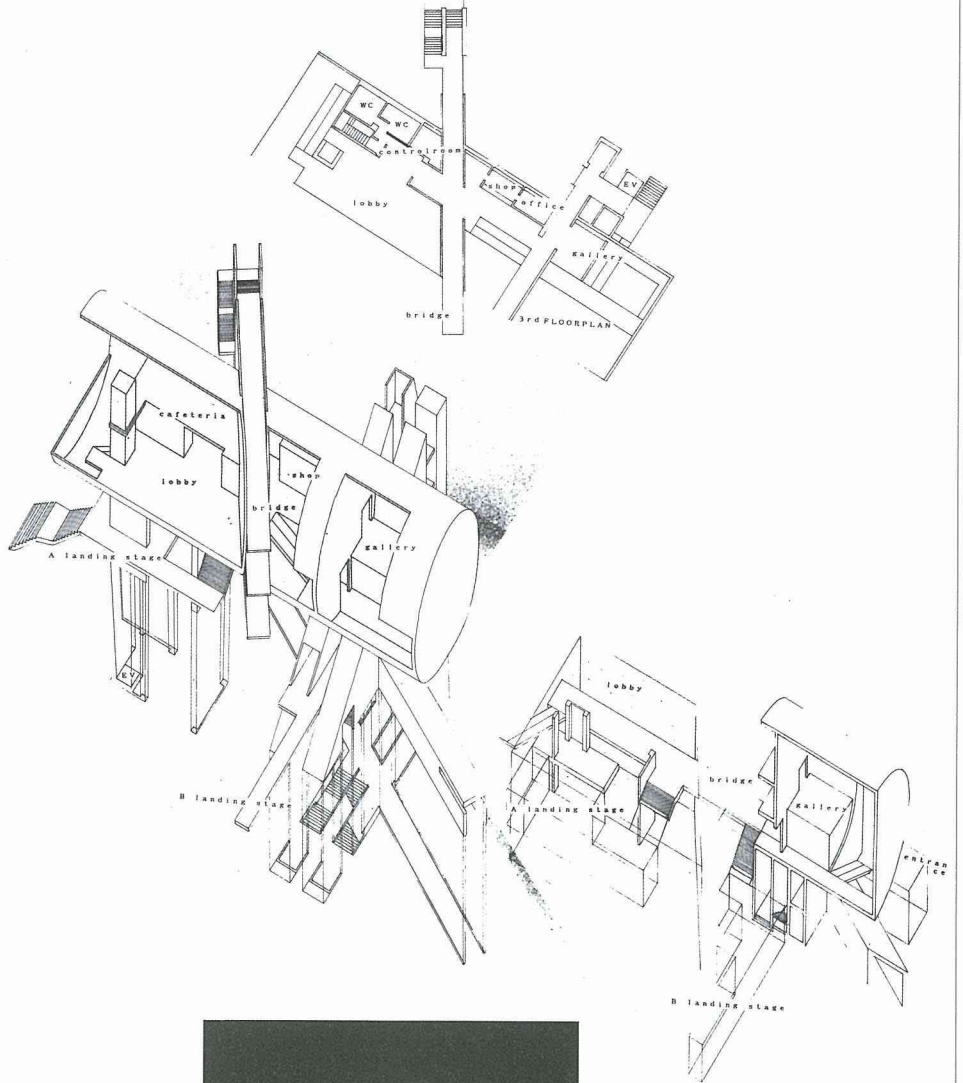
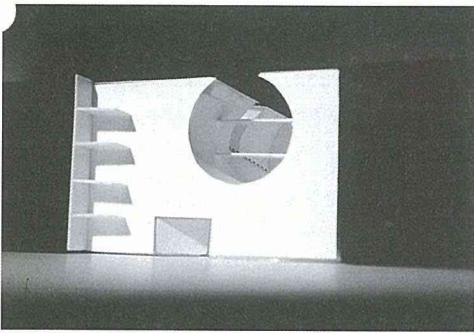
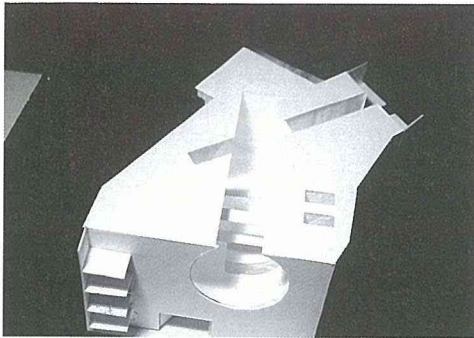
冷静さを維持するため、時間も進化も統制され、  
同情や偏見などを一切排除し、真実を生みだしていく空間。  
揺るぎない秩序が核心で生まれてゆく。

形態の崩壊とともに記憶の生成が始まる。



# Shopping Mall / Ferryboat Landing Stage

佐々木省悟  
Shogo Sasaki



■ 2本の道路に挟まれた市街地の塊から、水平方向にシリンダー状のソリッドを取り出し、その後に残されたボイドを中心とするShopping mallを計画した。そのボイドには、建物中部の採光と展示ホールとしての役割をもたせた。他の構成要素は通路、エレベーターホール、階段といったようにいずれも建物中心部へのアプローチおよびエントランスとしての機能を有している。多目的な利用が想定されるため、具体的なプログラムを決定することは難しい。しかし、フリーマーケットを提供することにより、個人に対し比較的自由な商業活動を行える機能をもたせた。■さらにもういっぽうの建物は、Shopping mallの構成要素となるフィギュアをソリッドとして取り出し、小規模な港の一角に建つ乗船ターミナルとしての機能をあてはめた。海に向かって開いた円筒形の建物を中心とし、他の構成要素を通して、ロビーおよびカフェテリアへとアプローチする。また船に乗る人びとは、ブリッジを通り2つの栈橋へと誘導される。■ボイドとソリッドというふうデザインされた相互の空間は、どちらも人びとが行き交うことによって、空間同士のつながりを意識されることを目的とした。

# 1994年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Work: Autumn Semester

## 丸の内地区ジオフロント計画

Planning for Geofront: Marunouchi District

### 講評

非常勤講師 柳澤孝彦

設計とは、建築が実在することによってはじめて建築たりうとする見方からいえば、それは実在化へのプロセスといえる。実在をある種の普遍的姿であるとするならば、設計は普遍化への過程だといえる。すなわち、設計とは個人に宿る限りなく内なるものを実在へと普遍化することとなる。

内なるものの発達はすなわち想像力として発揮され、それが展開力によって発展する。貧弱な構想からでは発展的な展開が不可能なことはいうまでもないが、たとえ発酵した構想も確かな展開力による発展なくしては、頭でっかちでひ弱な実しか結ばないものだ。

かくいう構想力、展開力は、現実実に実を結ぶ建築を分母にしてみれば、現実的に立脚して発生し育ったものだ。私の出題は、したがって現状認識にベースを置くものとして地区を特定した地下空間を選び、現況サーベイから始めることとした。これはまた、空気のごとく無意識のうちにあるふだんの体験空間を、別な切り口から見つめ直すことになるものでもあった。すなわち普遍化した地上の空間構築の要素や手法では解きにくい地下に着目、地下空間の特性をデザインテーマとするもの

柳澤孝彦  
Takahiko Yanagisawa

1935年 長野県に生まれる  
1958年 東京芸術大学美術学部建築科卒業  
1958年 竹中工務店設計部入社  
1968年 渡米、タケナカ&アソシエイツ・S、F事務所  
~69年 およびコンクリン&ロサント・N、Y事務所  
1981年 竹中工務店東京本店設計部長  
1985年 竹中工務店プリンシパル・アーキテクト  
1986年 「第二国立劇場」国際設計競技で、最優秀賞を受賞  
MOA美術館、有楽町マリオン、大手センタービル、

#### ■STEP: 1

地上空間をおおうコンテキストとは別に、地下街をはじめとして地下道や地下鉄・駐車場などの機能に応じた縦横無尽にはいる地下空間。それは都市の重要なインフラストラクチャーで、人を媒体とした情報ネットワークでもある。そのもっとも発達している例【情報都市】として大手町から銀座にかけての地区をサーベイしビジュアルにプレゼンテーションをする。そこから現況を把握し問題点を「発掘」する。

#### ■STEP: 2

STEP: 1の成果をふまえ、既存利用のみならず21世紀情報化社会のための新しい地下空間の可能性を

創造する。それは土地の記憶のひとつである東京駅を都市空間の「核」と位置づけて、地下空間との関係においてより積極的に再構築し地上のネットワークを織り上げる。そしてそのような人びとが行き交う結節点としてのジオフロントにふさわしいソフトウェアを想定する。  
(ex. コンコースあるいは、地下道を多様化したようなあり方。たとえばオープンギャラリー、都市の中の美術館等)

である。したがって私の期待は、地下空間の特性をコンテキストにした解答にあったが、ほとんどのものが地下空間の地上化をデザインしたもので、十分なる満足はおあずけとなった。その中でも渡辺猛案は地層を文化の時間軸として捉えて各時代の文化を橋のデザインとして表現し、橋の重層とする地下空間とした構想は新鮮で魅力あるものであった。しかし展開力のひ弱さが構想を発展的にふくらませきっていない点が残念。大きな可能性に期待したい。

菅菜々子案は構想力、展開力ともに確かなものが発揮されて、魅力ある空間を明確に表現している。展開力にも力があって、表現しにくい計画を的確なレンダリングに表現できている。高い評価をしてなお欲をいえば、

やはり地下空間の地上化がテーマだったのが残念な気もする。むしろエスキス段階に一時取り組んだテーマで、倉庫など地下系のいわゆる支持的空間を地下にリシフトすることで生みだす地上空間を、住居などの目的空間化しようとする構想に未練が残る。

また、皇居を巡る豊かな環境の影響を地下空間へ導入しようとの構想も複数の提案にみいだされたが、中でもブルース案がそれを明快に展開している。すなわち丸の内のオフィス街と皇居内堀の自然を際立てながら結び合う地下道空間は場所のポテンシャルを増長している。

構想力とは現状に魅力を欠けば欠くほど、それを反力としてますます豊かなイメージに成長するものだし、その展開に立ちほだかる現実が厳しいほどに、展開力はタフネスを備えるものだ。このような感触を学生諸君が少しでも実感してもらえればと願っての短い時間の共同作業であった。学生諸君の実に熱心な取り組みもあって、なにがしかの意味を残したかもしれないと思っている。

#### ■STEP: 3

STEP: 2で想定したソフトウェアを具体的に建築化する。



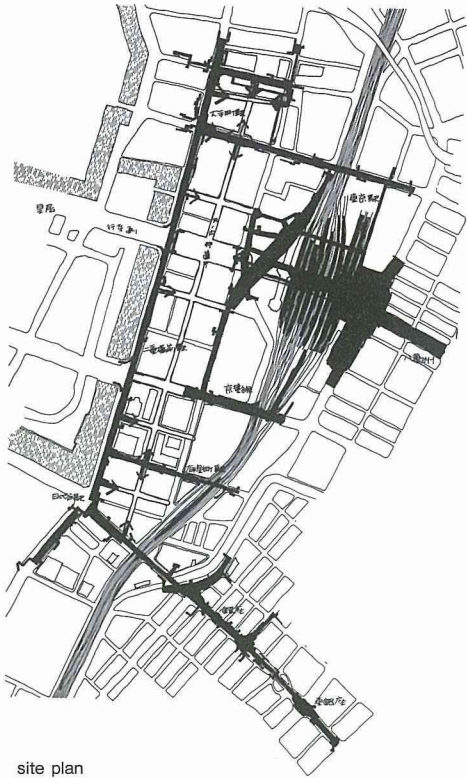
日蓮宗総本山身延山久遠寺大本堂（いずれもBCS賞受賞）など  
1986年 TAK建築都市計画研究所設立  
1990年 真鶴町立中川一政美術館で「吉田五十八賞」「BCS賞（92年）」受賞  
1994年 郡山市立美術館で第55回「BCS賞」を受賞  
第二国立劇場（仮称）、東京オペラシティ、三鷹市芸術文化センター（仮称）、富山市立美術館・福沢一郎記念美術館を建設中  
現在、建築美術工芸協会理事、東京建築士会理事

# 東京ジオフロント計画

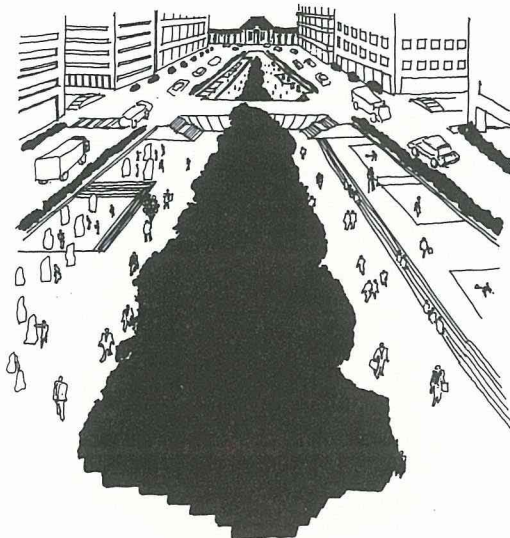
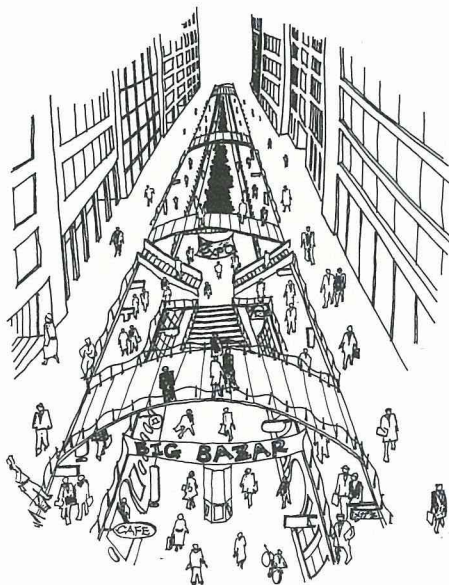
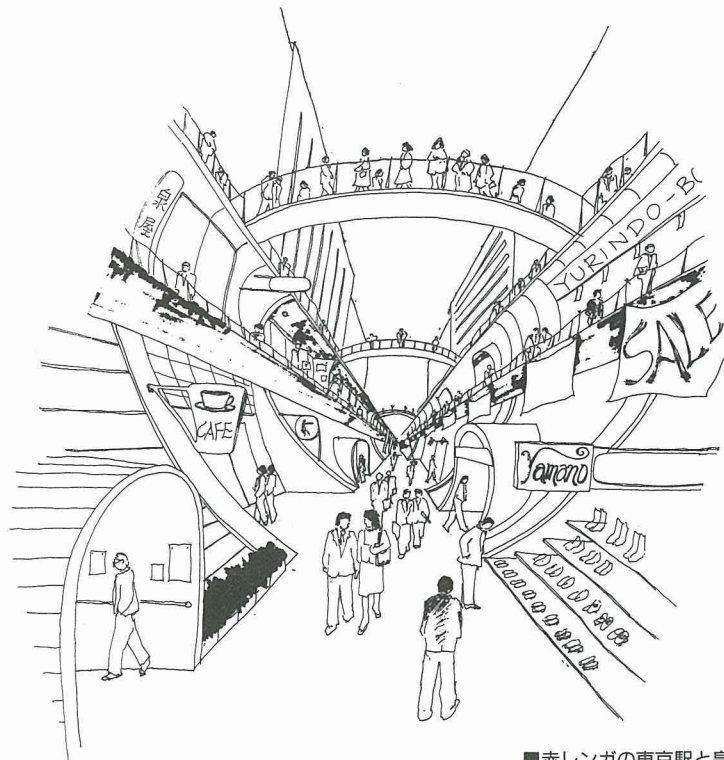
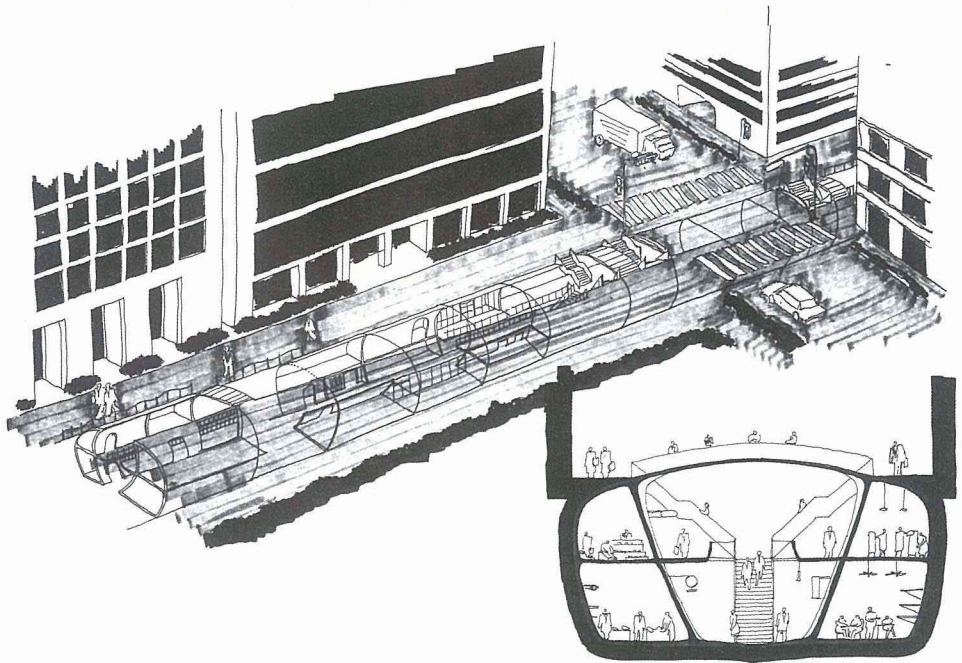
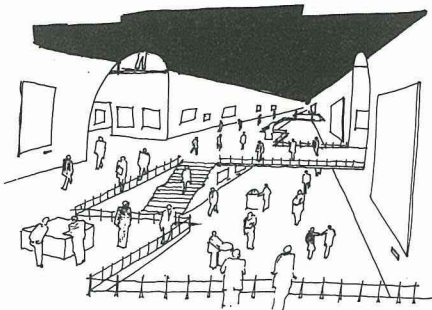
Planning for Tokyo Geofront

菅 菜々子

Nanako Suge



site plan

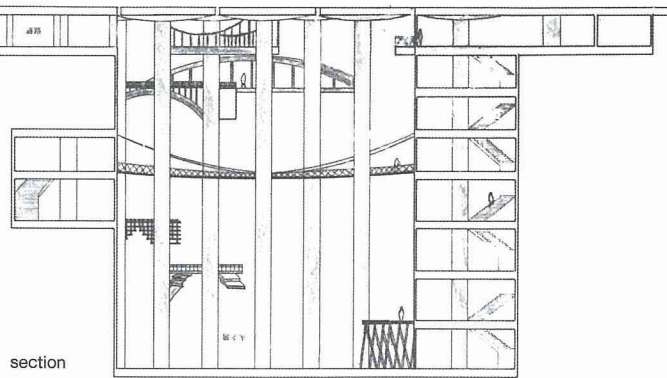


■赤レンガの東京駅と皇居にはさまれた丸の内地区は、都庁が移転した現在、完全なるビジネス街、オフィス街である。その整然としたビル群のなかの丸の内仲通りは、ビルとビルにはさまれた、屋でも車の少ない静かな通りだ。この地下に、仕事場としては完璧に秩序だった丸の内日々暮らすサラリーマン（現代情報化社会を担う企業戦士たち）のための空間をつくった。大手町から丸の内、日比谷へと結ぶ仲通りを軸に、それに直交する道路下も掘ることで、この地区の各鉄道駅の連絡がより便利な動線計画となった。■地下には、スポーツゾーン（プール、体育館、武道館など）、芸術ゾーン（ギャラリー）、情報ゾーン（LL室、図書館）、公園、商店が入り、サラリーマンが仕事の合間や終わってから、それらに触れることで、心身ともにリフレッシュできる。地上の歩道を歩くと、オフィスビルとは対照的な、楽しいなチューブ状の街が見下ろせる。

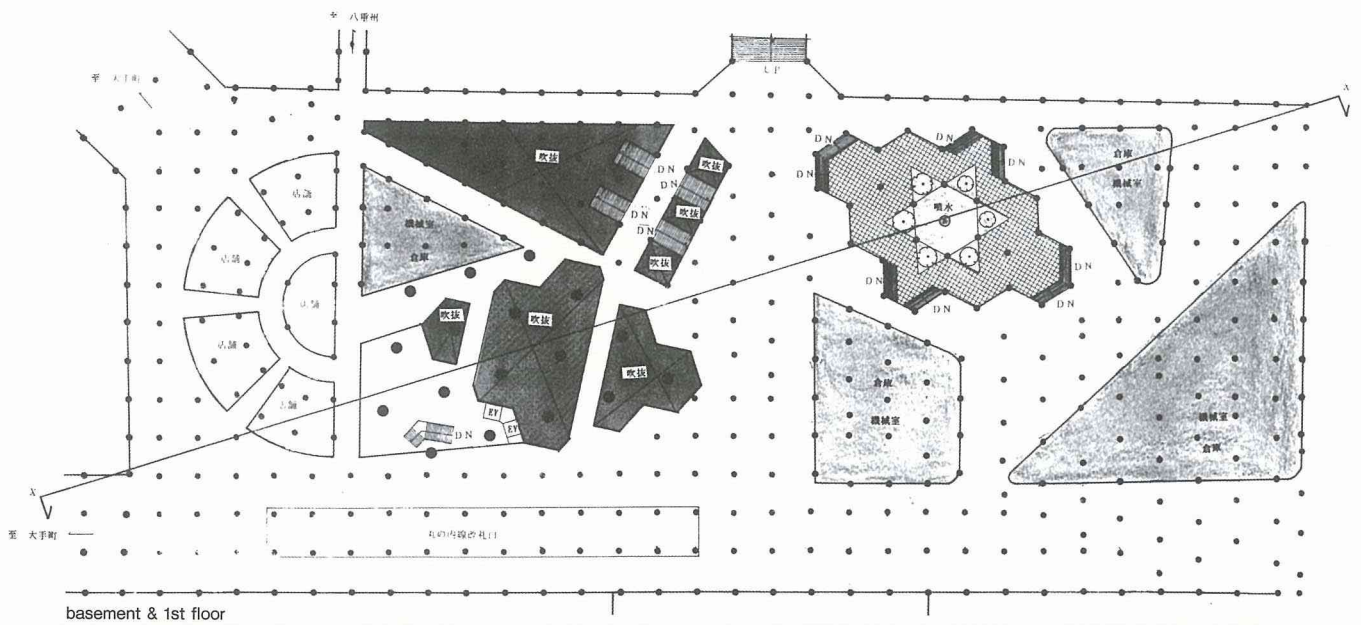
# 丸の内ジオフロント再開発計画

Redevelopment of Marunouchi Geofront

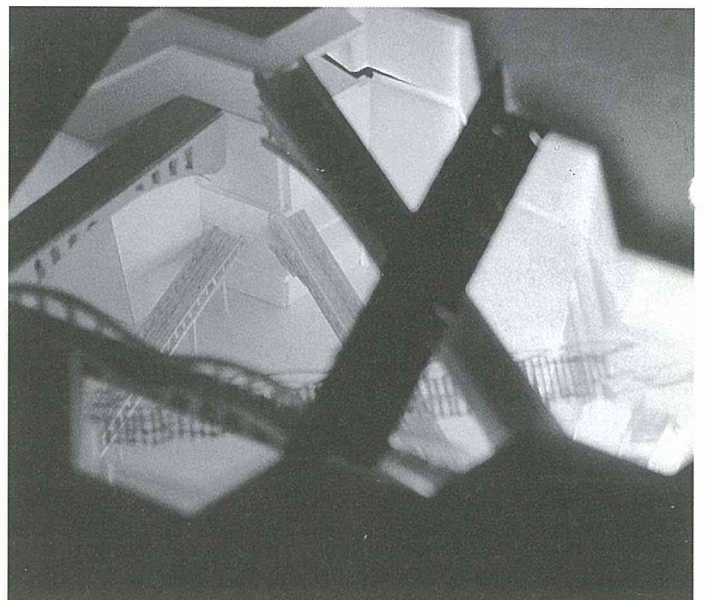
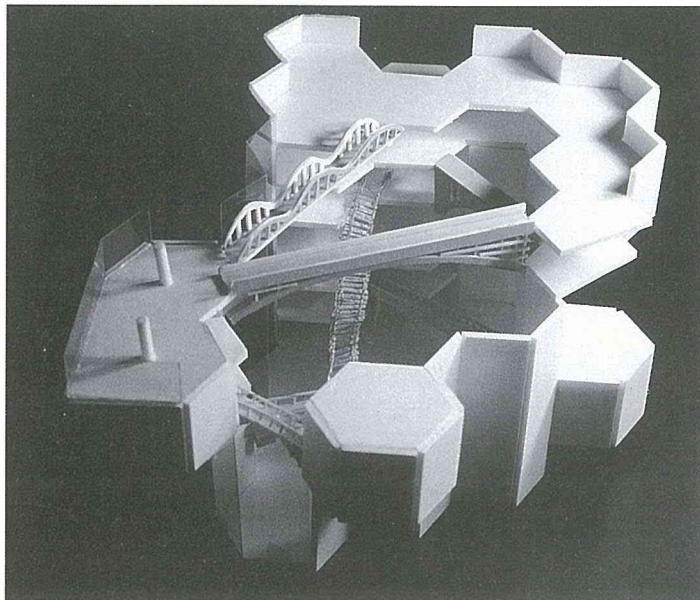
渡辺 猛  
Takeru Watanabe



section



basement & 1st floor



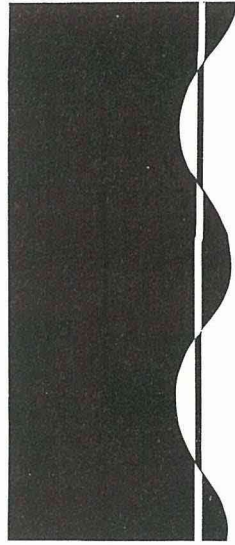
■地下を眺める…。すると地層が表れる。地層というのは地球の歴史の記録であり、そしてそれは深くなればなるほど、古くなる。■次に都市で歴史を反映しているものを探してみる。すると、都市のアーバンデザインを反映し、できた当時の歴史を伝えている「橋」が浮かびあがってくる。この「橋」の歴史を地層の時の流れに連動するかの

ように、深い吹抜け空間にその「橋」を架け渡すことにした。また地底部には、歴史、特に土木史の博物館を設置した。■大きな吹抜けは地下の空間的なシンボルになると考え、その暗さと対照的になるように浅い地下に明るい待合室をつくった。■吹抜け・待合室の両空間は、その性質上多方面からのアクセスを考え、六角形をグリッドとした。

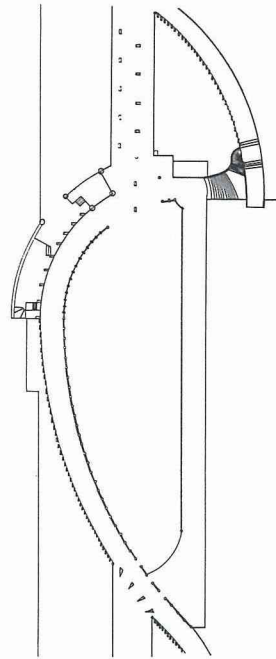
# 地下空間

Underground Space

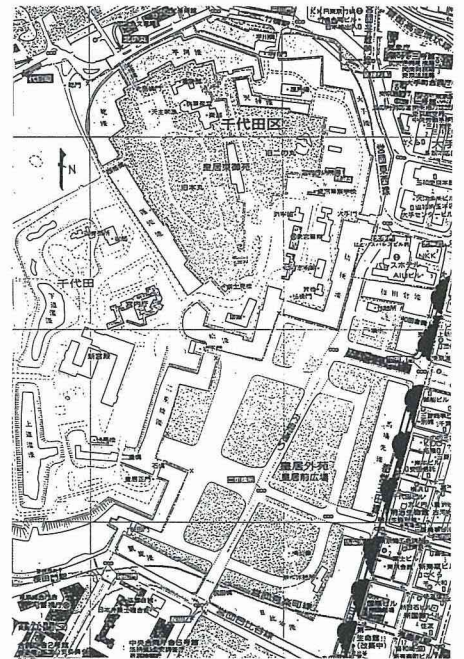
ヤオ・ブルース  
Yao Bruce Yu



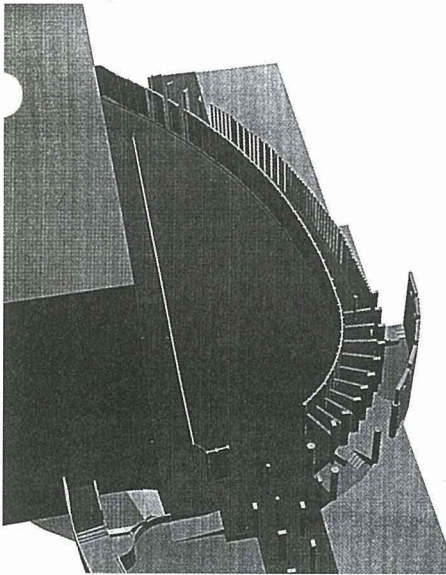
concept



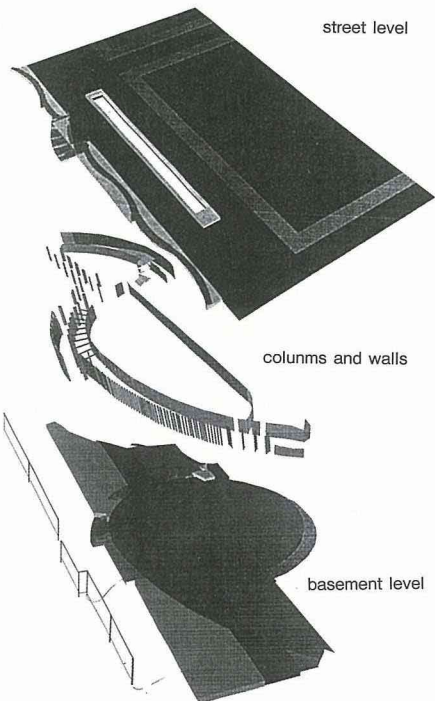
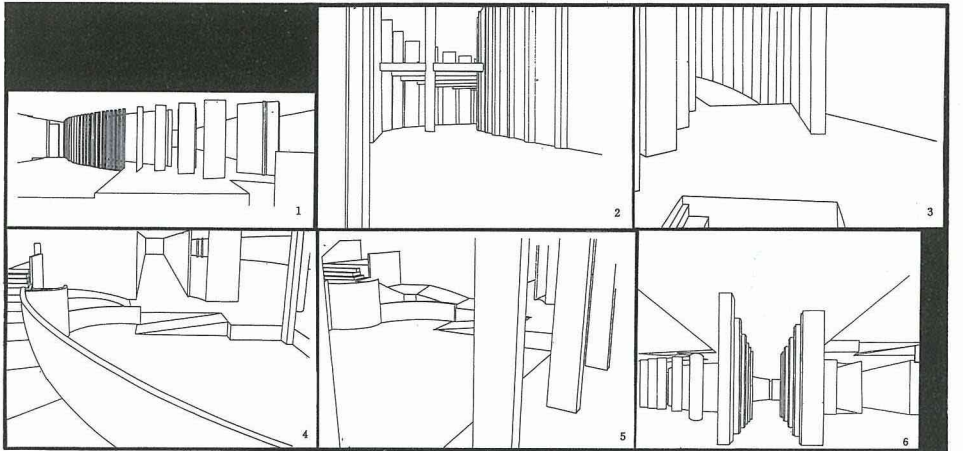
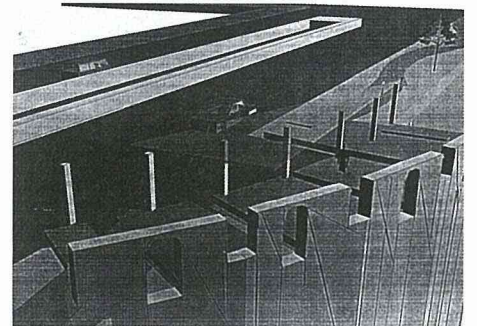
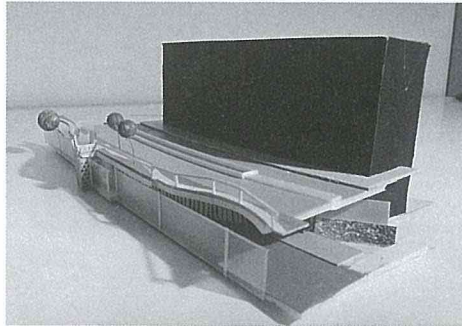
basement plan view



site plan



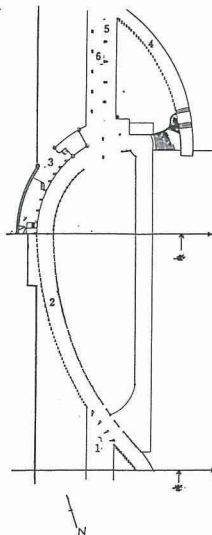
perspective on basement



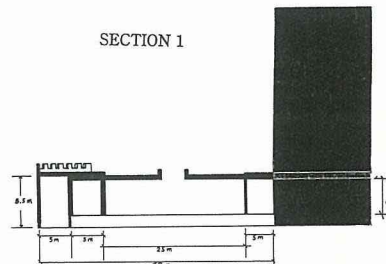
street level

columns and walls

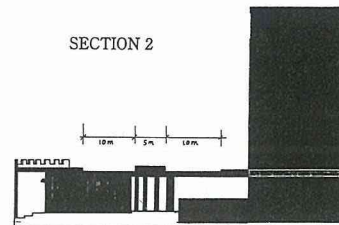
basement level



SECTION 1



SECTION 2



■元来の地下通路はまったくストレートであり、途中目標、あるいは、変化はなし、利用者に対してこの通路はあまり魅力はない。ただ、長すぎるトンネルである。視覚上に訴えるものがないし、無意識的に早く通ろうという心理上の圧迫がある。だから私はこの通路を短く分断し、通過する時に人の焦点を移動させることができる通路を提案する。

# 1994年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Work: Autumn Semester

## 扉のある「……」 There is a door……

### 講評

非常勤講師 北川原 温

この課題は学生たちの想像力の冒険を目的としたものである。したがって与えられた小さな糸口からどこまで建築や都市を構想してゆることができるか、そのプロセスに重点を置いた。ゴールや着地点を設定せず学生たちの想像力を離陸させ、できるだけ空高く飛ぶことができるように既成概念を一つひとつ解体し、自由に考え、手を動かすこととした。私は建築や都市に結果というものはなくプロセスしかありえないと考えており、その思考過程を検証することによって、ただ課題の結果だけを評価するのではなく、思考と作業の全体を評価するという試みなのである。

またそのプロセスにおいて、建築や都市の分野だけではなく、さまざまな分野を横断的に学習し、各自の個性が同調できる視野を発見してゆくことによって独創的な作品が生まれる。建築や都市は、ある段階では論理を超えた構想力によってしかつくりだせないとい頃感じているが、この課題でそうした構想力を養うひとつの訓練をするという意味をもたせた。「ひとつの扉」という与件から建築や都市を構想してゆくためには、思考を組み立ててゆく能力が必要だが、マニュアルのないその試行錯誤の過程で自らのダイレクション、

北川原 温  
Atsushi Kitagawara



1951年 長野県生まれ  
1977年 東京芸術大学美術学部建築科大学院修了  
1982年 株式会社北川原温建築都市研究所設立  
1991~94年 東京芸術大学非常勤講師  
主な作品：メトロサ（地下空間を活用した都市型小規模集合住宅：'91JIA新人賞）、柏原タウンセンター、昭和記念公園霧の森、スカラ、東日本橋派出所、いわきニュータウンセンター、ARIA  
主な著書：JA Vol.8『北川原温特集』新建築社、『北川原 温×稲越功一』TOTOP出版

#### ●課題：扉のある「……」

扉とその手前に、あるいはその背後にある空間を設計する。

扉に付随する空間の用途規模、および敷地の設定は任意とする。

#### ●作業

##### 1：扉の記述

以下より選択し、各自の着眼点を表現する

a) デュシャン作「与えられたとせよ、

1. 滝 2. 照明用ガス」の扉

b) フェラーリのコクピットのドア

c) 飛行船格納庫のハンガードア

d) ストロンボロウ邸の扉

e) 待庵の戸

※スケールの変更、形状の若干の変更は認める。複数使用可。

##### 2：使用者の記述

扉の使用される場所、条件などの設定を表現する

eX.個人/集団・行動様式など

##### 3：扉の空間の記述

各自が設定した1・2の条件に従い、扉のある空間を設計する

#### ●表現

1~3に関する作業を次の指針に基づき、総合的に表現する

※着色、インキング、CGなど表現手段は自由

1・2の表現：説明図

3の表現：計画概要（規模と構造について明記）

#### 配置図

主要階平面図 断面図（2面以上）

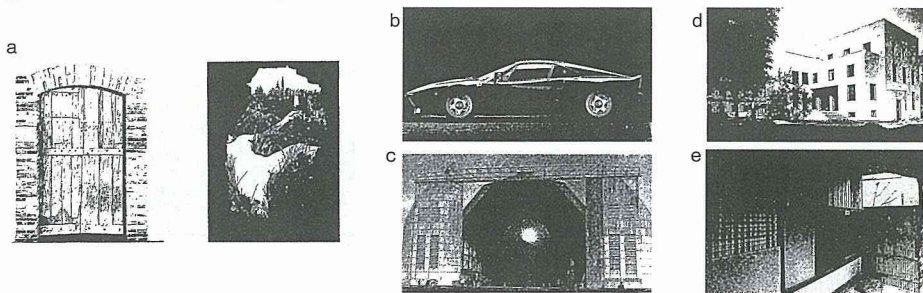
立面図（2面以上） 模型

その他、アクソメ、パースなど扉と関わる空間の説明に必要な表現

#### ●提出物

1. 以上をA1版1枚に限りなく美しく表現する

2. 模型



つまり個性が表出してくる。実際今回の課題でふだんは均質化してしまったかにみえる学生たちに、実は驚くべき豊かな個性があるということが再確認できたことは、何よりうれしいことであった。ここに掲載する作品は紙面の都合上、一部に限られているが、他にもおもしろい案がいくつもあった。

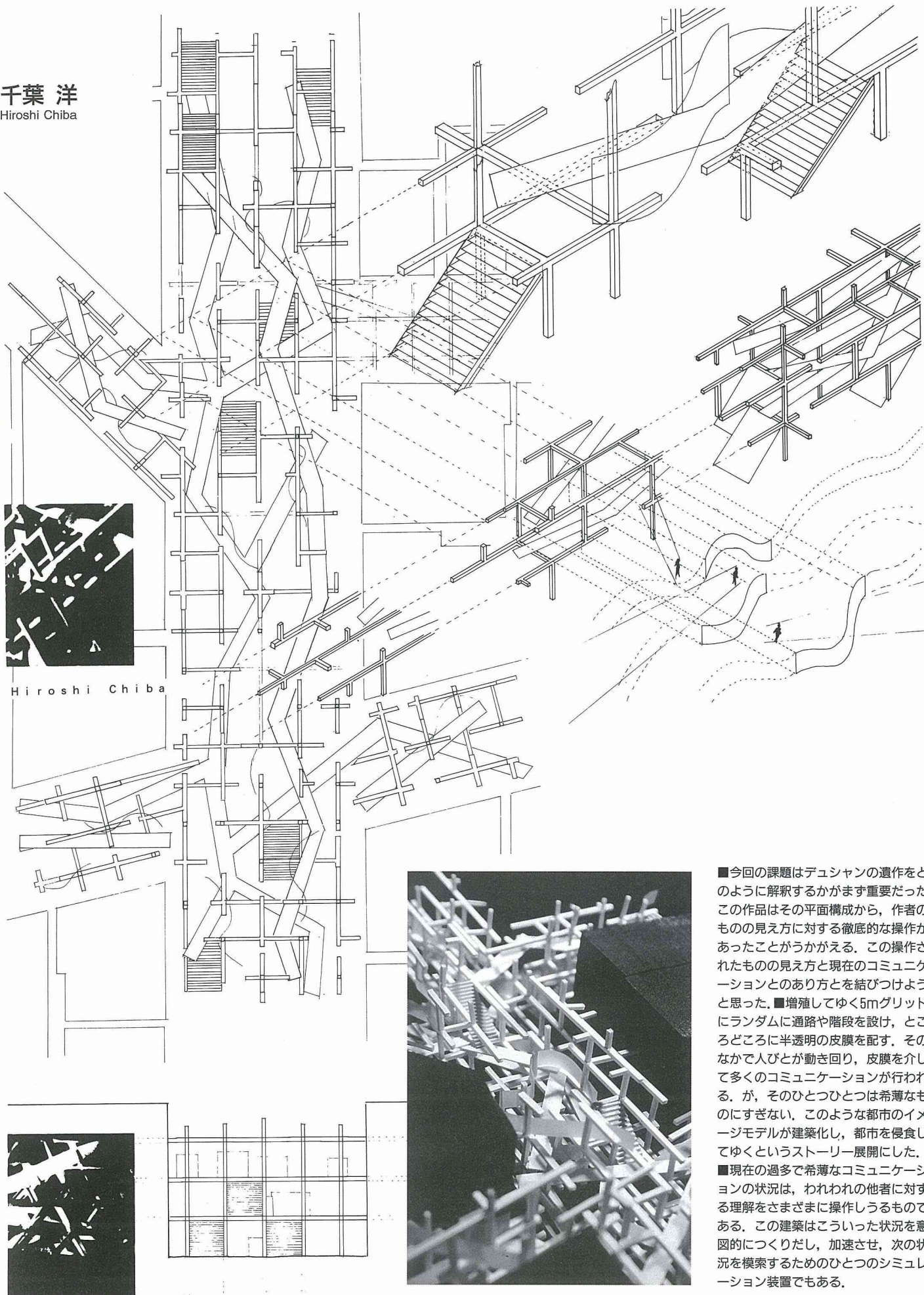
千葉案はデュシャンの扉の内部構造に、時間の差異の概念を発見することに始まって、その建築化したイメージはどんどん成長して、ついに都市全体をカバーする壮大なシステムに発展していった。長谷川案は茶室の躡口にいたる前の露地空間に着想をえて、きわめて詩的なランドスケープデザインを展開した。日端案はデュシャンの扉の向こうにタダの芸術を透視し、美の既成概念を解体する錯綜した空間構造モデルを立ちあげている。宮口案はさまざまな哲学者の系統的相関関係そのものを立体的に表現することによって、機能や空間の関係性そのものである建築をメタフォリカルに描いてみせた。勝木案は扉というヒ

ューマンスケールに着目し官能的な身体空間を自らの個性と同調させて表現している。高橋案はウィトゲンシュタインの厳格な言評的プロポーシヨンの空間を分解し、そこにストーリー性をもたせたナラティブアーキテクチャーを指向した。増山案は課題を進める思考過程においてもっとも大きな変化をみせたひとつだが、ミヒャエル・エンデの小説の着想から始まり、一貫して人間性の問題を追求するなかで建築を構想した。吉田案は飛行船格納庫の巨大な扉の背景に、近代のテクノロジーの暴走性を発見し、アイロニカルではあるけれども人と空間と都市の深層に横たわる問題を提起した。金田案も非常に個性的な思考プロセスを展開し、思考の原点とでもいべきある意味での「ゼロ地点」を発見した。

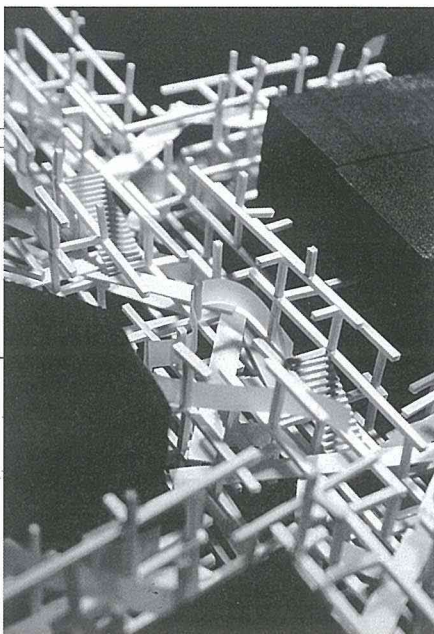
学生たちの案はその制作過程もふくめてたいへん興味深いものであった。高度情報化社会が人間の想像力を弱体化しているといわれるが、今回指導した学生たちをみる限り潜在的な想像力や構想力、そして思考力は健在だ。

# Mass & Dis-communicated City

千葉 洋  
Hiroshi Chiba

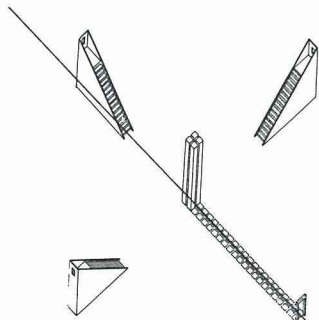
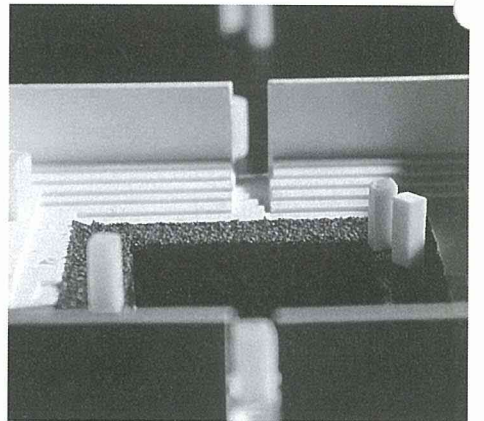
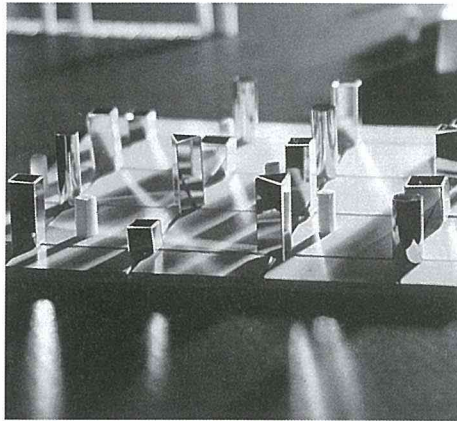
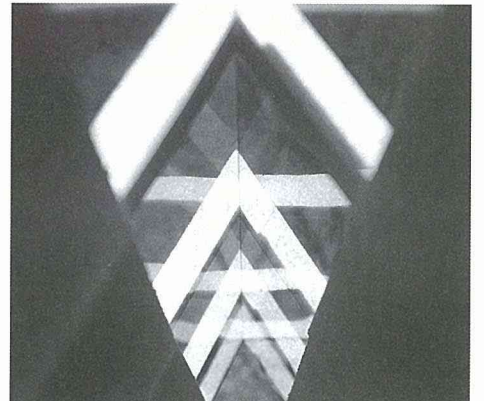
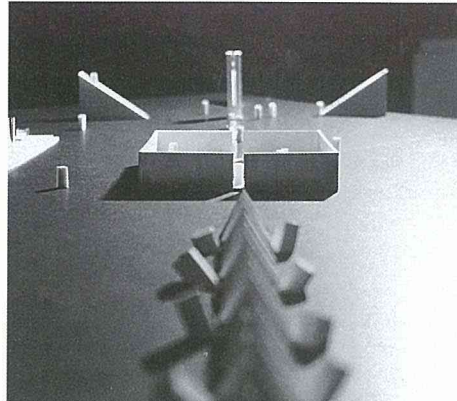
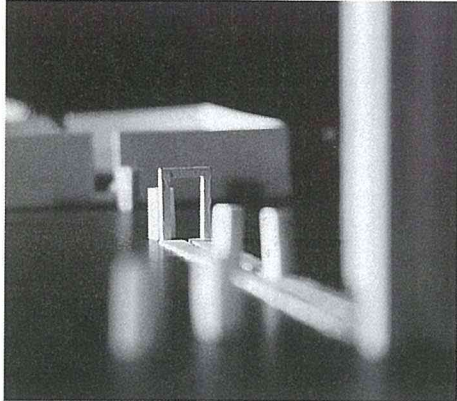
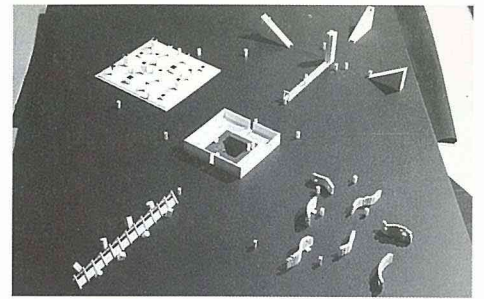


Hiroshi Chiba



■今回の課題はデュシャンの遺作をどのように解釈するかがまず重要だった。この作品はその平面構成から、作者のものの見え方に対する徹底的な操作があったことがうかがえる。この操作されたものの見え方と現在のコミュニケーションとのあり方とを結びつけようと思った。■増殖してゆく5mグリッドにランダムに通路や階段を設け、ところどころに半透明の皮膜を配す。そのなかで人びとが動き回り、皮膜を介して多くのコミュニケーションが行われる。が、そのひとつひとつは希薄なものにすぎない。このような都市のイメージモデルが建築化し、都市を侵食してゆくというストーリー展開にした。■現在の過多で希薄なコミュニケーションの状況は、われわれの他者に対する理解をさまざまに操作しうるものである。この建築はこういった状況を意図的につくりだし、加速させ、次の状況を模索するためのひとつのシミュレーション装置でもある。

長谷川 諭  
Satoshi Hasegawa

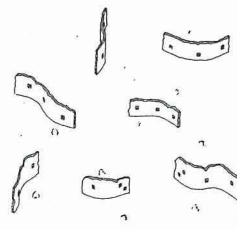


HITORIJIME  
KAIJANGO HOROTTE IKUTO TSUKIATA  
RINWA MADOGA TSUITE IRU SON  
O KESHIKIWA HITORIDE TAROSHINO  
U

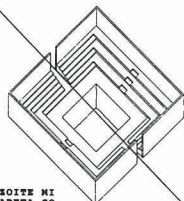
SENKISYUSYI  
KONO KADAIWA TAIJANGO "HIJIRIGU  
CHI" NAJIMARI SORRO TORIKAK  
OMU "ROJIKUKAN"GA "SENRYAKUTE  
KI" DE ARUKOTONI CHUUNOKU SHITA



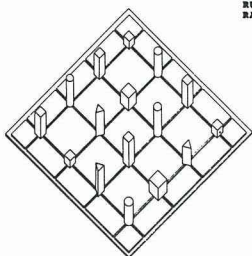
KOHKAINO YEAJAWA HITOGA FUDAN  
NANIGENARU NITEIRU KOTONO "SEN  
YAKUTEKI" NI NISSEU KOTOKE WABU  
BETEITA KOTOYA ATARASHII KOTO  
WO SAIBAKKEN SHITEMORAU MONODA



HOSOKI MADO  
ITSUMO NITEIRU MONO NAWONIKONO  
KABEKARA HIRUTO FUSHIGITO CHIG  
ATTE NITTEKURU



SEIBAPU YO AMA  
SEIBAPUNE AITA ANAO HOROTTE NI  
RUTO--SOROHINA KIRITORARETA SO  
RAGA ATTA SORAGA UTSUTTE ITA



CHIKATSUMI  
KONO SUIROBOMA DEO MIRUYORI NO  
KAWANAI YOKOBI ARUNOWA ORINA  
BOUSEKYOUDA

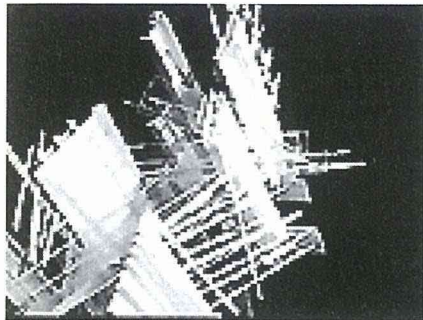
■「最終的にはできたものが1本の柱であっても本人のコンセプトがしっかりしていれば、それは立派な建築である。」エスキス中に聞いたこのことばが今でも耳に残っている……。自分がどう考えるか、いかに悩むかがこの課題のすべてであった。■私が選んだ扉は待庵のにじり口である。客人はこの茶室の入り口を目指して露地を歩いてくる。俗なる場所からきた客人は聖なる世界にわが身を置くために変身することが必要であり、露地はその精神的な変身のための空間なのだ。言い換えれば、空間や人の意識を変化させるということになる。■そこでふだん何となく生活をしていて何の発見もない私たちに、物事に対する「新しい見方」をさせる装置の提案をした。この空間を体験することで忘れていたこと、気づかなかったことを再認識することができたら幸いである。

# The Moment

日端美帆  
Miho Hibata

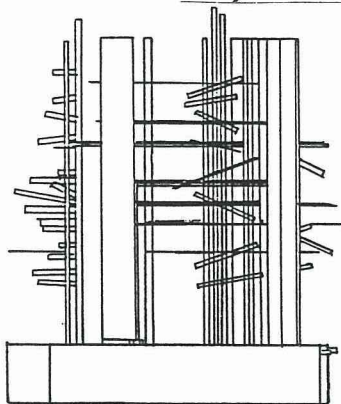
Look how Tzara suggested a poem should be written.

*To make a Dadaist poem  
Take a newspaper  
Take a pair of scissors.  
Choose an article as long as you are  
planning to make your poem.  
Cut out the article.  
Then cut out each of the words that make  
up the article and put them in a bag.  
Shake it gently.  
Then take out the words one after the other.  
Copy conscientiously  
in the order in which they left the bag.  
The poem will be like you.  
And here you are a writer, infinitely original.*

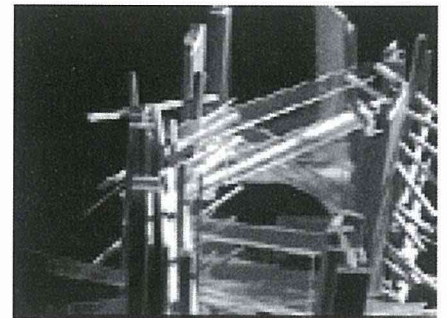
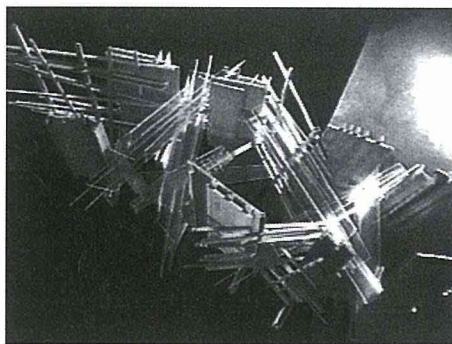


site plan

FUTUR



elevation

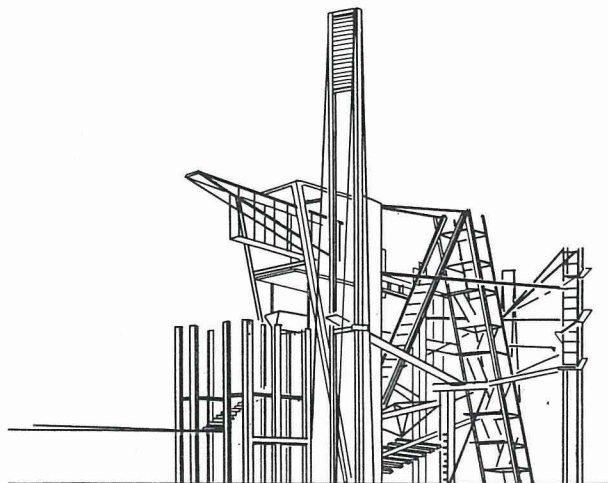
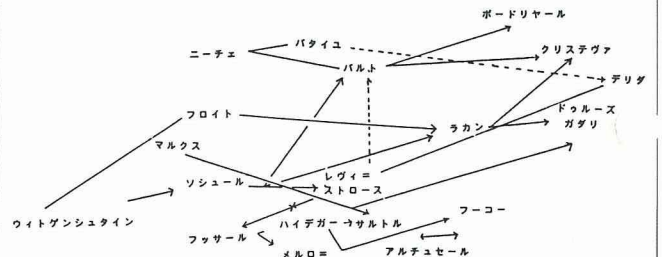
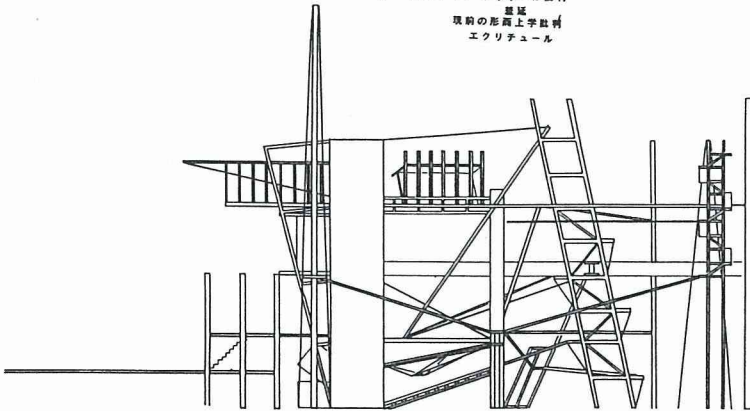
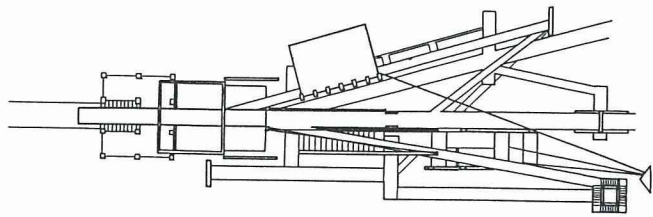
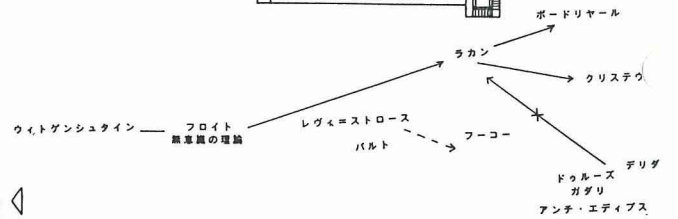
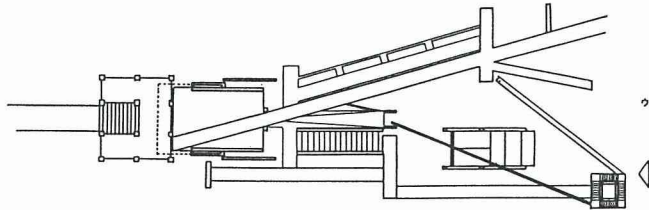
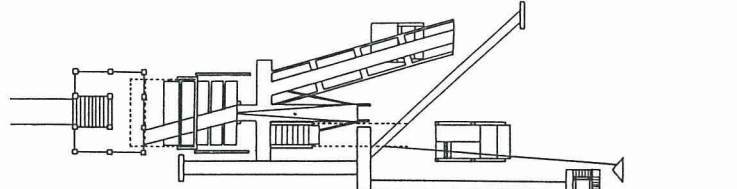
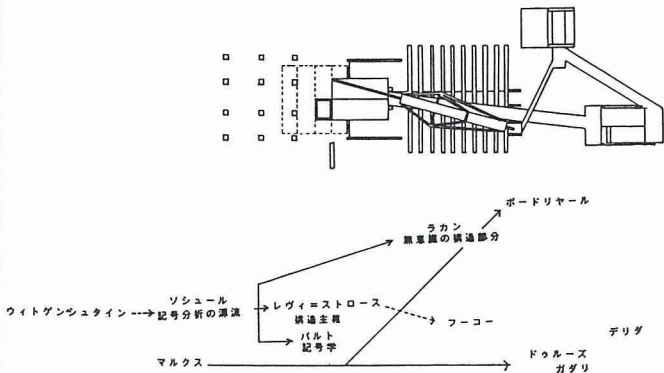
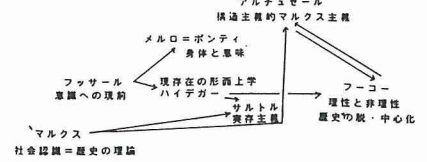
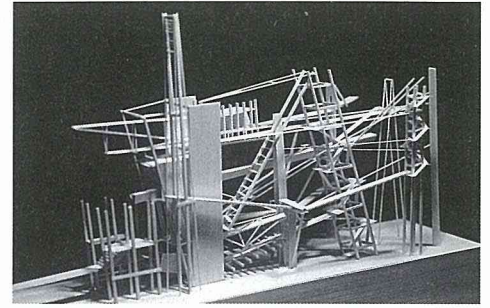


■湿っぽい陰気な背景と、明るく輝く裸体との鮮やかな対照が著しい。3次元の外観が、さらなる次元の連続を通過する横断面となりえる。→幻滅感というもの、DADAが表現したあらゆるものの根源であった。→ツアラ(DADA運動の中心人物)は、美に対する価値観をすべて否定することで、いかなるものでも美となりうると述べた。

■芸術、音楽、思想、道徳……、これらはすべて、ある一定の形態を必要としない。瞬時、姿を変え、そしてそれらにおける実行と志向は、現存している時点に関わっていることである。何か生まれた次の瞬間、背景と共生することにより、過去はかき消されていく。かつて形成されていたものを解体することによって、まったく別の価値をもつものへと変換される。すなわち、現象学的改造のための装置といえる。時空との共鳴を繰り返すなか、刻一刻と新たな地平線へと伸びていく。あらゆる偏在の場に突如として現われ、価値観念が場の空間を形づくる。時代を創造していく時間芸術としての建築。

# A Priori

宮口 真  
Shin Miyaguchi



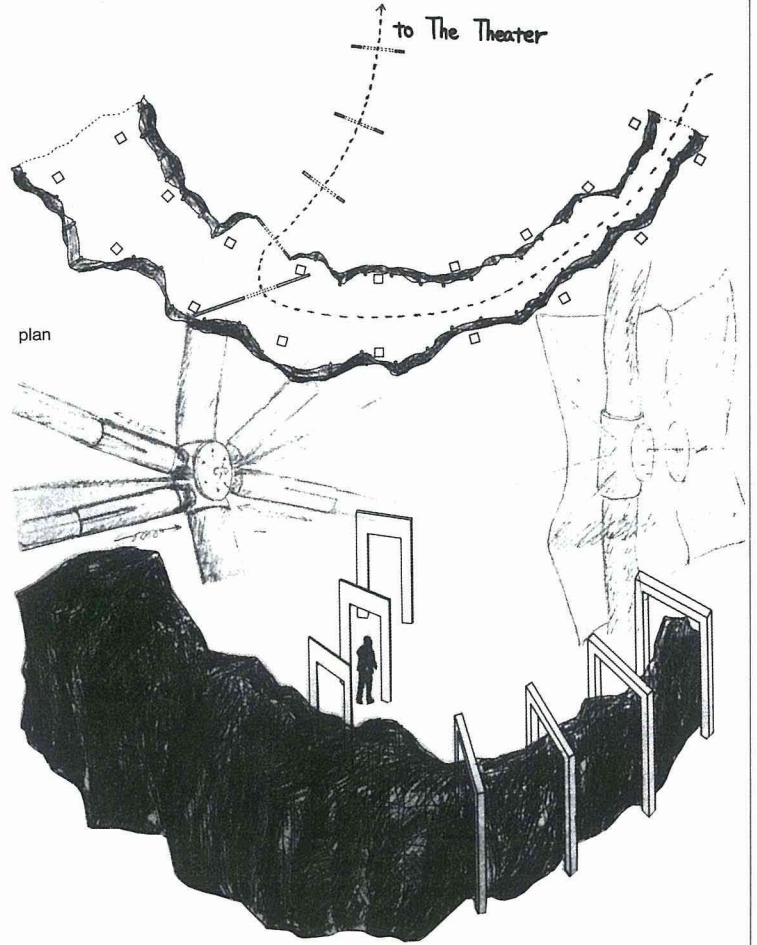
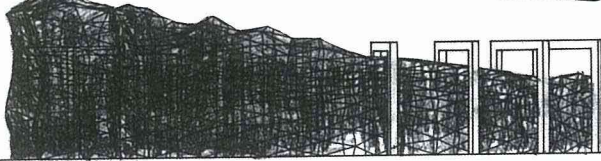
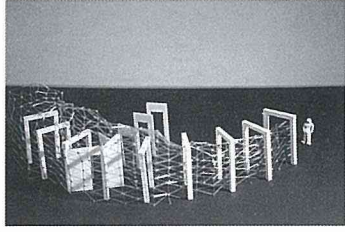
## PROCESS

- 0. ストロンボロウ邸
- 01. ウイトゲンシュタイン
- 02. 扉の形態
  - 1. ウイトゲンシュタイン
  - 11. 同性愛者
  - 12. 建築と哲学 (C. アレクサンダー)
  - 13. 言語論 (バルト/スピノザ/ソシュール)
  - 14. 哲学者と哲学/思想
  - 141. 様々な哲学者
  - 142. 様々な哲学/思想
  - 143. ウイトゲンシュタインの哲学
  - 144. 哲学/思想の系譜
- 2. 哲学/思想の系譜の空間的表現
  - 21. 様々な哲学の記号化
  - 22. 三次元的表現
    - 自分の思想の中で彷徨った思想の世界を系譜という流れに沿って空間に変換
  - 3. 様々な系譜の空間的表現
  - 31. 建築の系譜
    - 4. 系譜の接点の重要性
    - 41. 異なる分野の接点
    - 111. 接点=人間が様々な分野をつなぐ
    - 112. 時間が人間のつながり=系譜をつくる
  - 5. 時間

# 欲望するための装置

Facility for Desire

勝木祐仁  
Yuji Katsuki

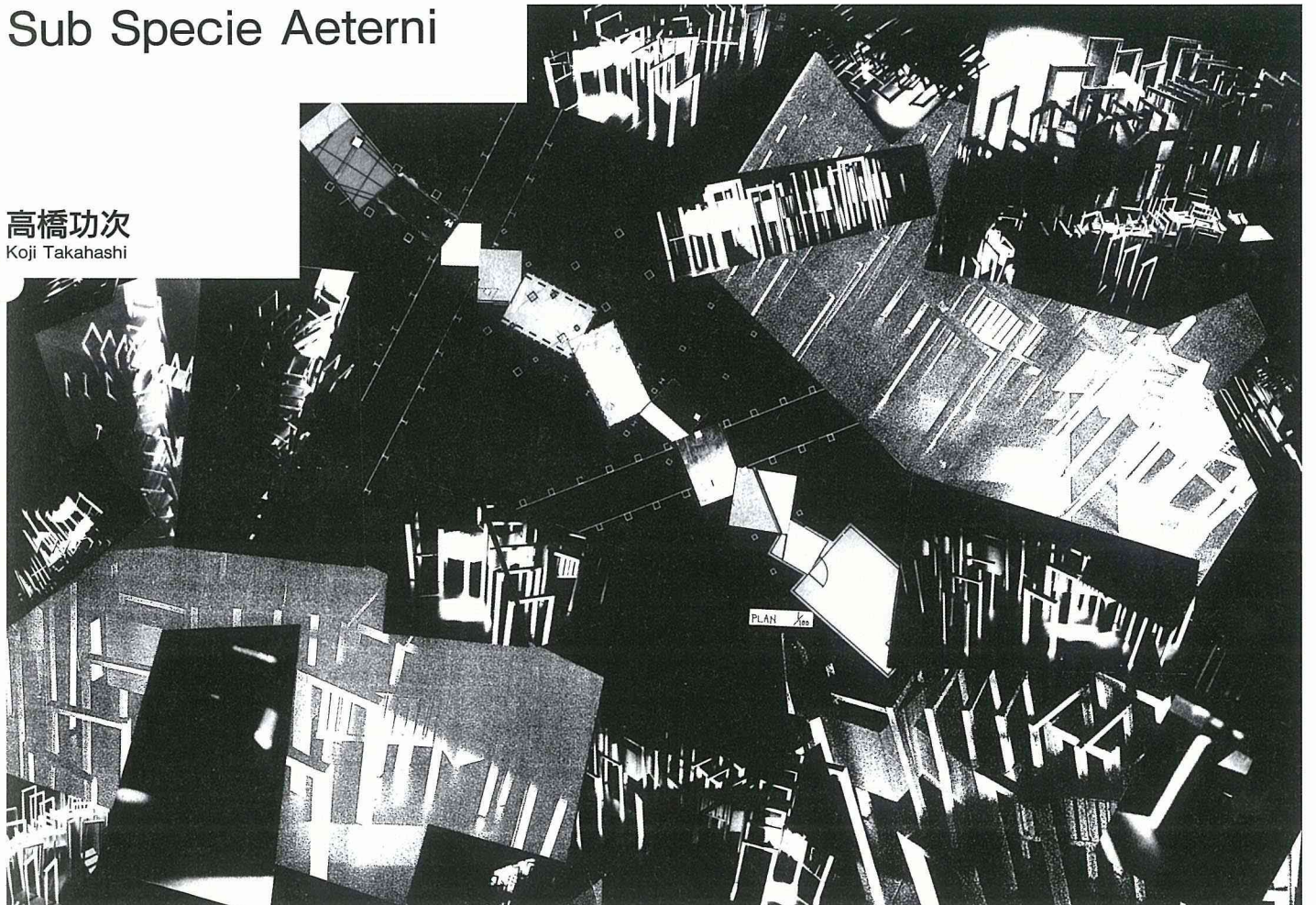


plan

isometric perspective

# Sub Specie Aeterni

高橋功次  
Koji Takahashi



# Less Communication in Multi Communication

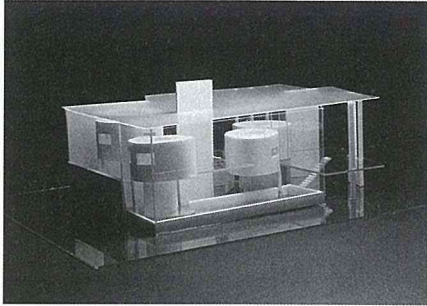
relationship life 他者の

on in multi communication

body 情報

Less communicati

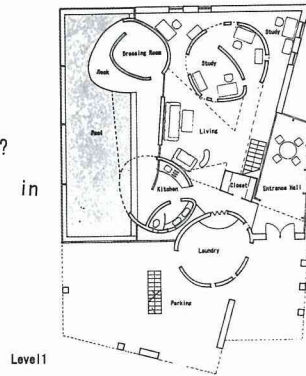
増山絵里奈  
Erina Mashiyama



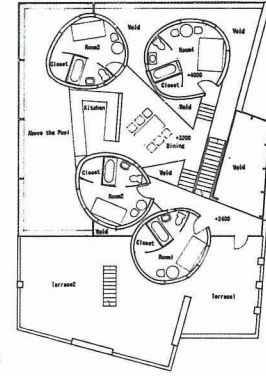
Here, There, Where ... ?

Less communication in multi communication

... ?  
in



Less  
multi



... ?

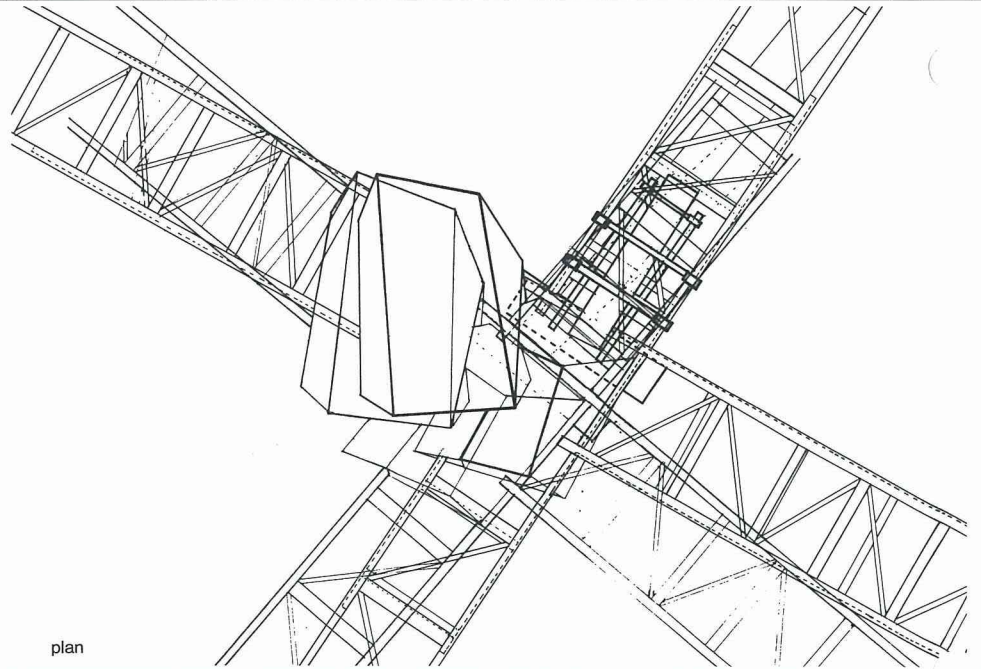
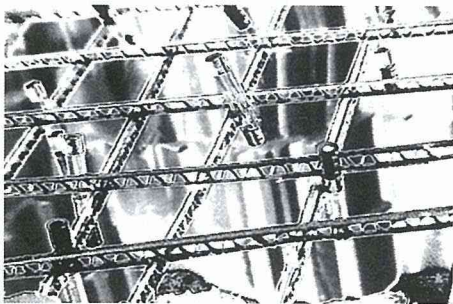
life

Here, There, Where ... ?

body 情報

# Stay in the Mutation

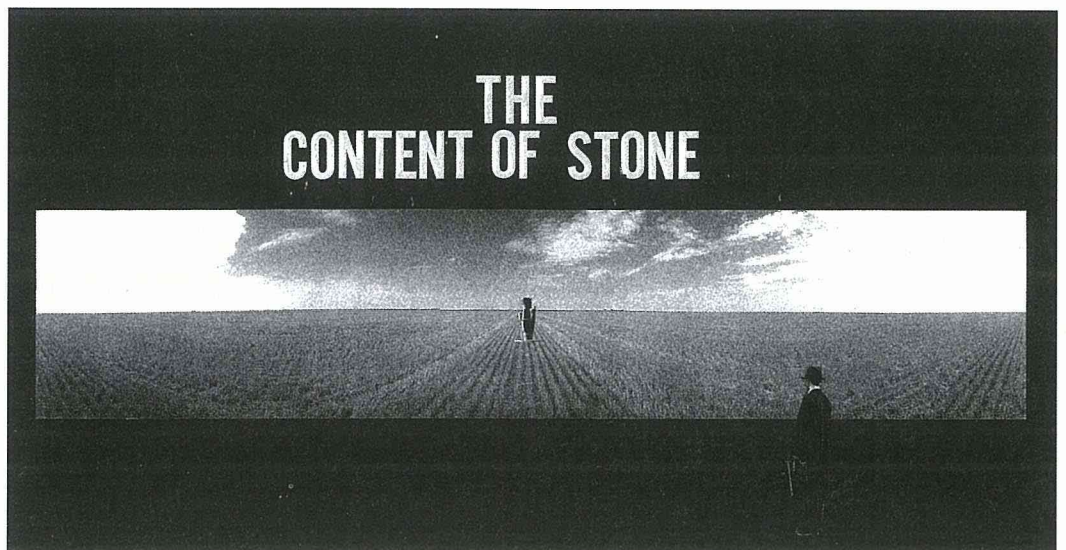
吉田昌矢  
Masaya Yoshida



plan

# The Content of Stone

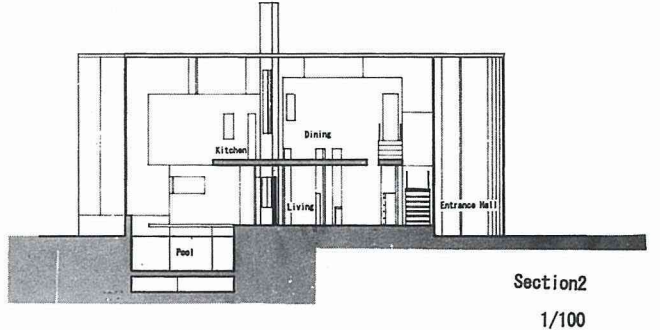
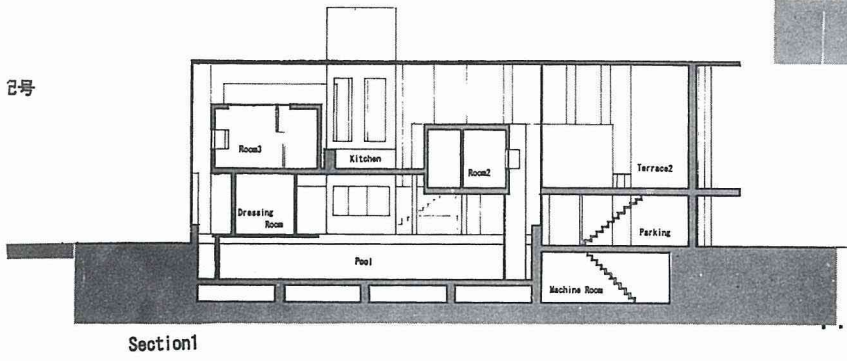
金田 建  
Tatsuru Kaneda



media relationship life 他者の存在=自己の存在

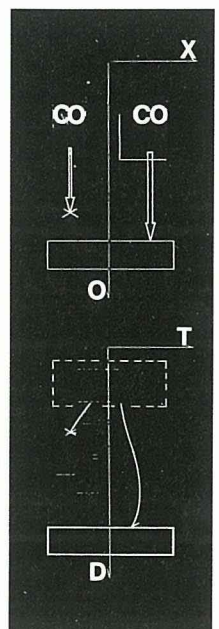
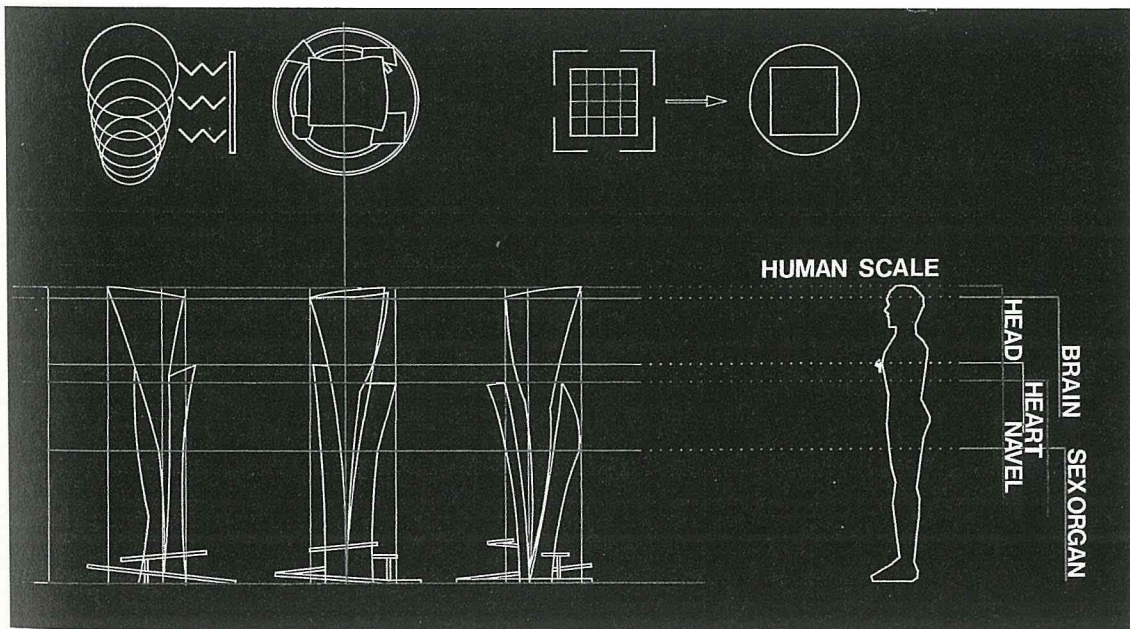
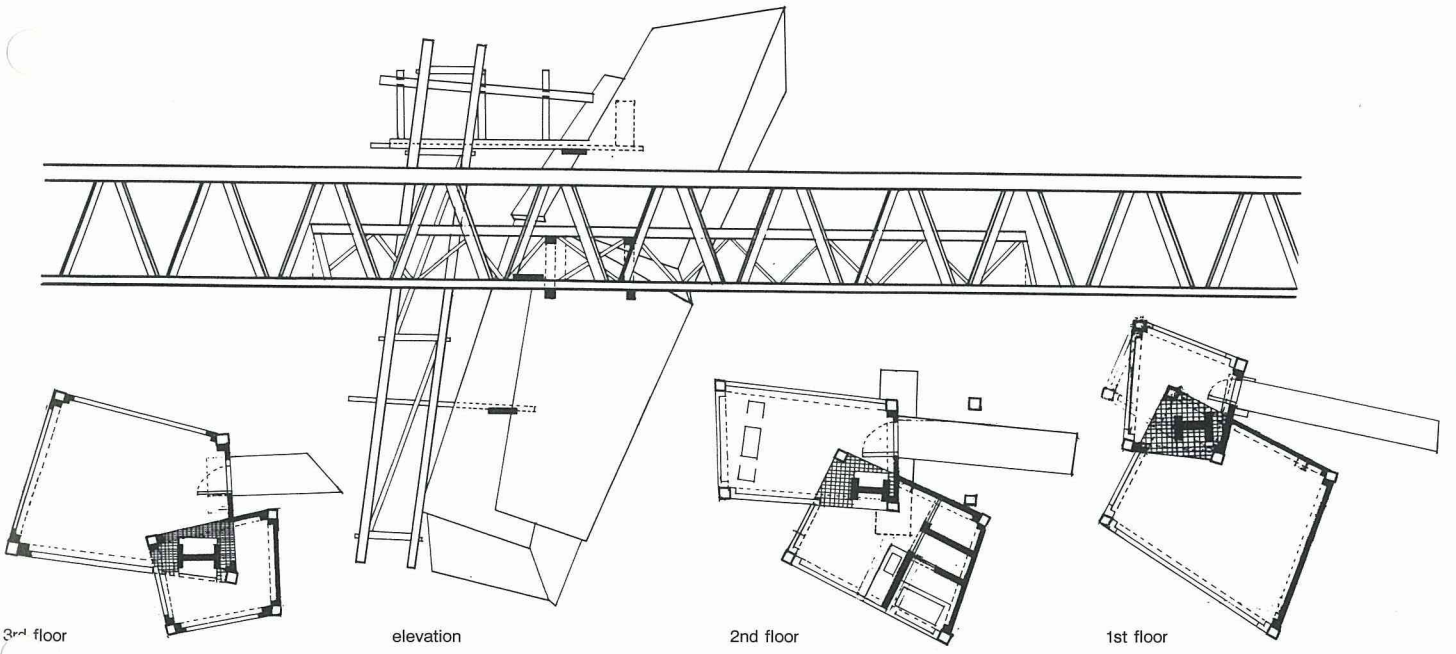
body 情報

Here, There, Where... ?



Less communication in multi con

伝達 意志疎通 言語



# 1994年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Work: Autumn Semester

## 空の建築 Sky Architecture

### 講評

非常勤講師 竹山 聖

初めから課題の全体像を示さずに、段階を追っては次の到達点を設定するという方法をとった。

かつて一度この方法を試したことがあって、その時はまず限定された壁や段差などの要素による場所の構成から入った。次に屋根を架けることによって空間を定め、そこに自身の住まいをつくる。最後に特定のクライアントのための住まいを考える、という段階を踏んだ。しかもそのクライアントが、カミーユ・クロードルという才能豊かな悲劇的女性であったから、住居は単なる住居を越えて、豊かな意味を含むものとなった。

各段階で、次の段階の構想はいっさい告知しなかったから、段階を飛び越えるときの思考のギャップが、逆にバネとなって案に緊張感が賦与されたように記憶している。

その時の試みをさらに高度で詩的なものになりたい。そのような試みに東工大の学生たちは応えてくれるのではないかと期待してこの「空の建築」という課題を考えた。期待は見事に受けとめられたとっていいだろう。僕の予測も越えていたし、学生諸君も自らの新しい可能性を見いだしてくれたのではなか

竹山 聖  
Kiyoshi Takeyama



1954年 大阪生まれ

1979年 京都大学工学部建築学科卒業。東京大学にて修士・博士課程修了。大学院在学中に設計組織・アモールフ創設。92年より京都大学助教授

主な作品：OXY乃木坂(アンドレア・パラディオ賞入選)、軽井沢の別荘(吉岡賞)、TERAZZA, Stairway to Heaven(名古屋都市景観賞)、パストラル・ホールなど。

主な著書：作品集「竹山聖」「都市を呼吸する」CD-ROM作品集「竹山聖/空の建築」

手続き1. Context

空に近い場所を想起せよ

地形

手続き2. Program

空を呼吸するプログラムを想定せよ

リラックス 冥想  
観測 儀式 運動……

手続き3. Form

運動する身体・物体から形を抽出せよ

力の形象化

手続き4. Element

無意味なオブジェ(関係そのもののエレメント)を想像せよ

階段、橋、塔、壁、水路、泉、  
樹木、柱廊etc…

手続き5. Configuration

建築的シナリオを完成させよ

異物の挿入、対比的空間の設定  
流れ

手続き6. Function

機能を賦与する

?

ったろうか。

緊張感をさらに深めてくれたのは、毎回でってくるアイデアが僕の予想からはずれるという思いがけない誤算のせいで、あらかじめ設定していたシナリオを、そのつど書き換えながら次のテーマを定めざるをえないというはめに陥った。

毎回のワーキング・セッションは、まさしくセッションそのもので、でたとこ勝負、どこへ行くのかわからない。出会い頭の緊張感が、次なるテーマをたぐり寄せてくれた。「言葉」で建築はできないか、「言葉」によって導かれる建築の世界もまたあるのだということを感じたし、感じてもらったのではないかなと思う。そして、建築というものが決して資料集成よろしく機能と寸法を整理していけばできるなどという、貧しい世界に属するものでもないということが、わかってもらったのではないかなと思う。どのような切り口からも、建築にはアプローチが可能であり、しかもなかなかたどり着けぬ懐の深さをもっているのである。

「空に近い場所を構想せよ」という、捉えどころのない呼びかけから始まって、あるいは都市に、あるいは海に、あるいは宇宙に、あるいは自然に、と、自由な想像力の飛翔はとりとめもない。だれもが果たして建築に行き着くのかと、一抹の不安を覚えたのではなかったか。正直いって、僕も不安であった。た

だしそうした不安を吹き飛ばすほどのイメージの豊かさがあったから、僕は用意したシナリオを書き換えつつ、学生諸君の想像力のほとぼしりにとことんつきあおうと思った。心中したっていいではないか、と。心中するほどの建築的構想を鍛えることができたなら、むしろ本望である。

地形の起伏に応じて地表面をおおうブドウ畑の、そのからみ合う枝々の向こうに空を透かし見る場所を発見したときから、和田さんのイメージの結晶純度、鮮やかさは卓抜<sup>1</sup>ていったとっていい。それだけに、具体的空間に悩むところ。もっと悩んだ方がいい。

宇宙との交信を果たす小倉君の案は、逆立ちする人間というユニークでユーモラスな形態に独創がある。有機的な身体的イメージはともすれば下品に走りがちだが、不思議な愛らしさと動きの感覚が陥穽<sup>かんせい</sup>から救っている。

柳君の硬質の叙情詩的形象は宇宙の開闢<sup>かいびやく</sup>を思わせる。形態に対するセンスは天性のものだから、磨きをかける努力をおこたらぬよう。

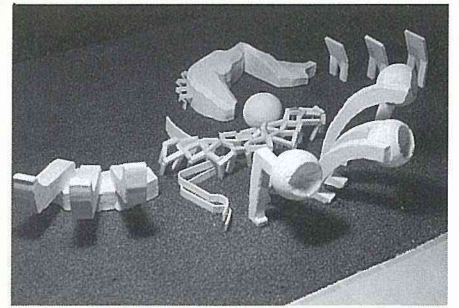
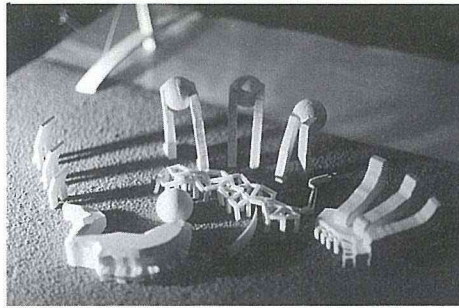
兪さんの案は場所に根ざした空間のあり方をじっくり練り上げた暖かみが魅力だ。

安森君は、もっとも社会的なインパクトをもつ提案を果たしている。都市の現在をコンテキストとして、批評的挿入を行うことで渋谷が過激に加速されている。空が都市のエアポケットという構想へ導いたことに、出題者として喜びを覚えている。

# 宇宙との交信

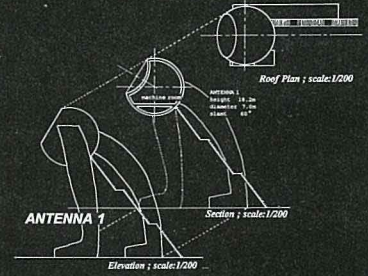
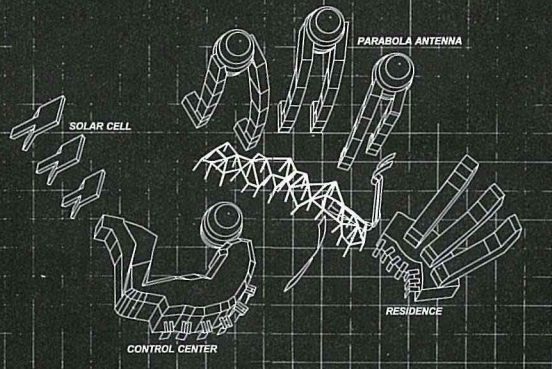
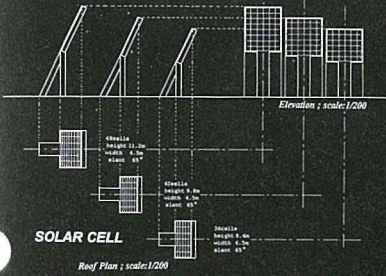
Interactive Communication Across the Universe

小倉 哲  
Satoshi Ogura

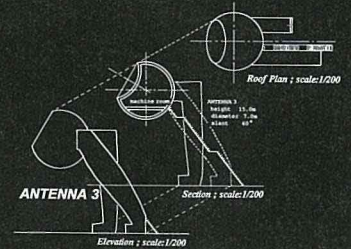
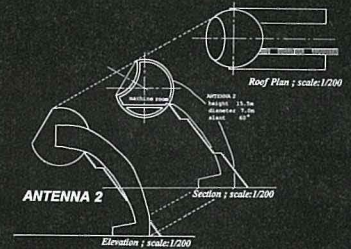
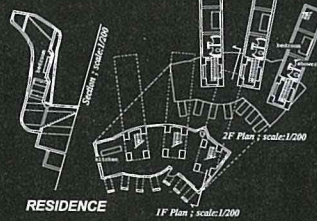
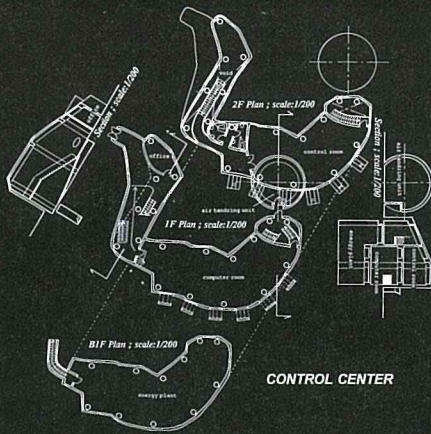


## Step.6 Function

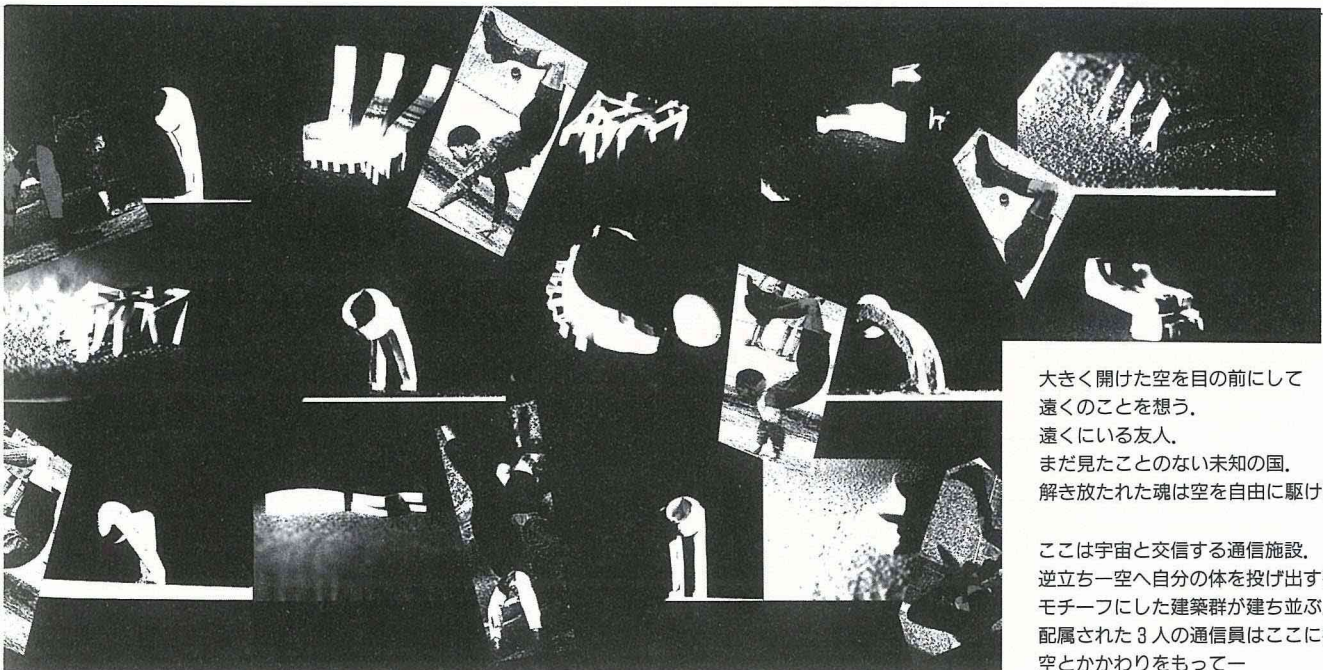
機能と構造



## Step.5 Configuration



0942 S. OGURA



大きく開けた空を目の前にして  
遠くのことを想う。  
遠くにいる友人。  
まだ見たことのない未知の国。  
解き放たれた魂は空を自由に駆け巡る。

ここは宇宙と交信する通信施設。  
逆立ち一空へ自分の体を投げ出す行為一を  
モチーフにした建築群が建ち並び、  
配属された3人の通信員はここに棲みつく。  
空とかかわりをもって一

# Shibuya Project

安森亮雄  
Akio Yasumori



■東京に住んでいたいと思う。しかし、ある時東京が好きかと問われたのだが、自信をもって肯定することができなかった。“空の建築”ということばは、そんな東京をブレイク・スルーする何かを、私に想起させた。■ポードリヤールによれば、現代社会は記号体系の「閉じられた円環」にすぎず、すべては複製であるとする。私たちは制度化・管理化された都市にあって本当に自由だろうか？ 都市は真にエキサイティングだろうか？ ■敷地：渋谷駅周辺。形態：ダンスする身体から抽出。彼らは都市の中で自由に跳躍し、踊りだす。プログラム：食事、睡眠、排泄。■建設者および住人：都市のマイノリティーたち。すなわち、ホームレス、独居老人、身体に障害をもつ人、在日外国人、ホモセクシュアル etc. プラス制度化された都市に気づいている人びと。

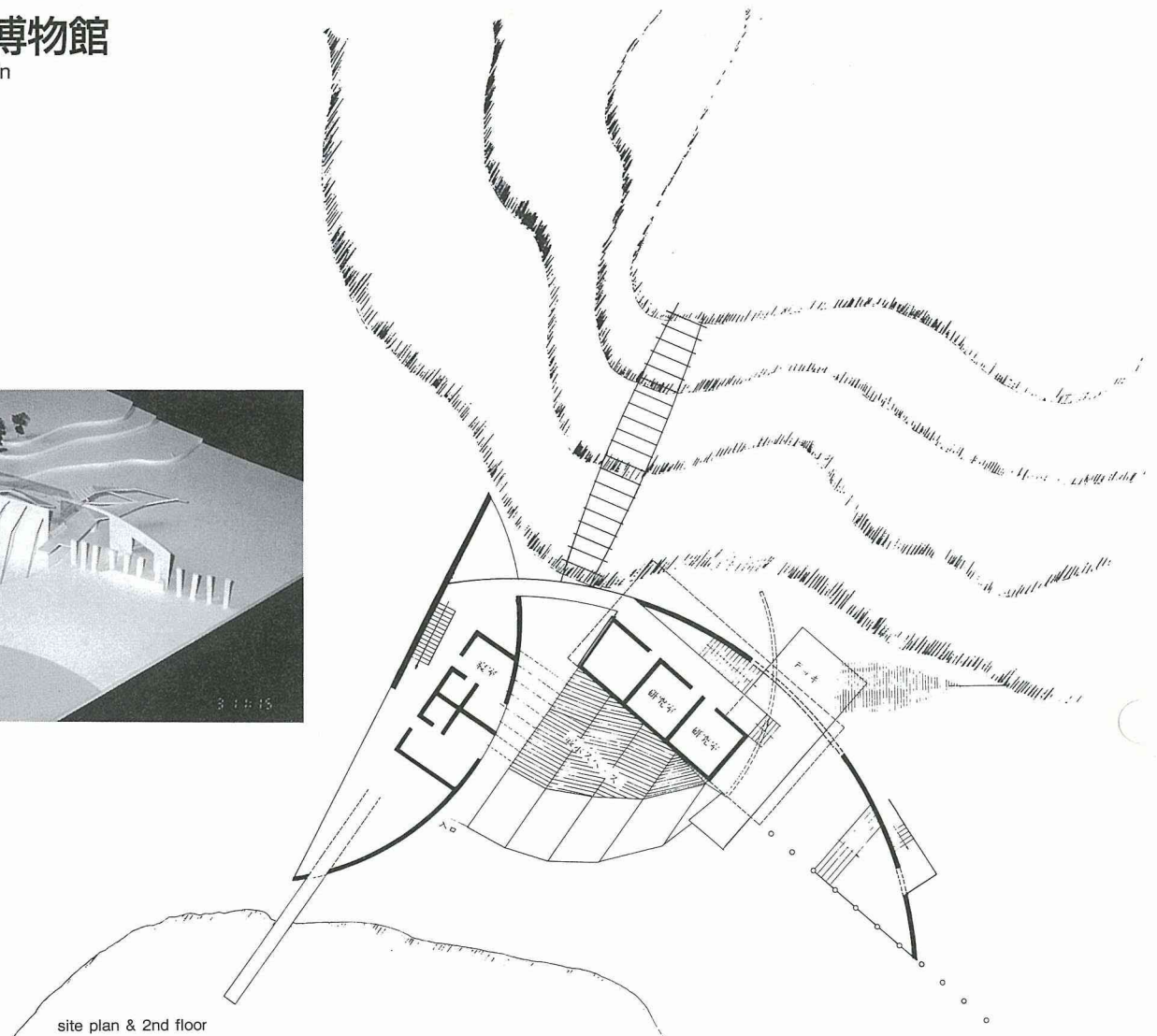
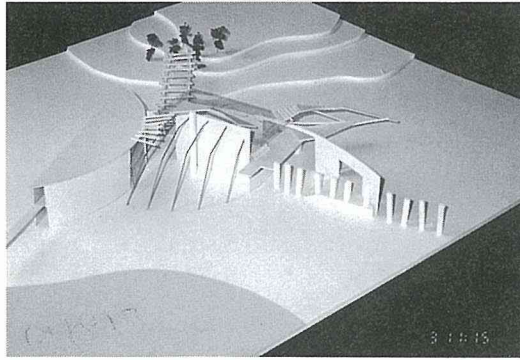


# 大草原の博物館

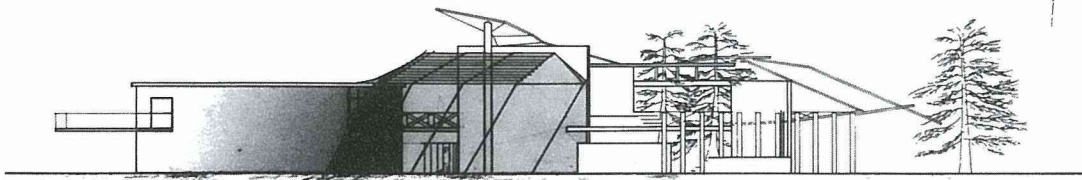
Museum on a Plain

俞 凌雲

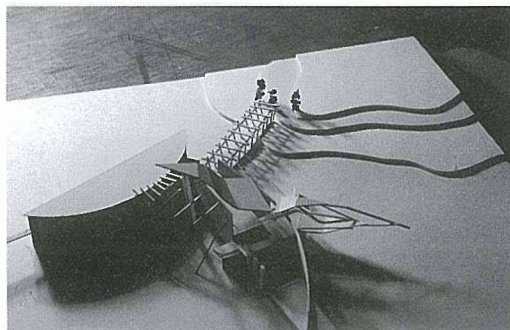
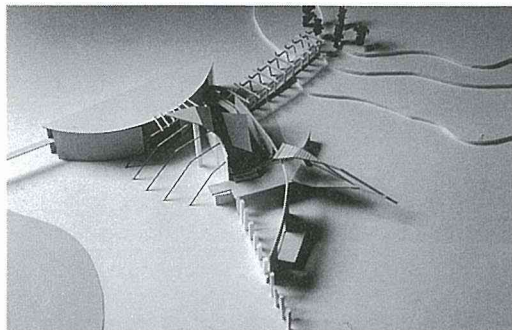
Lin Yun Yu



site plan & 2nd floor



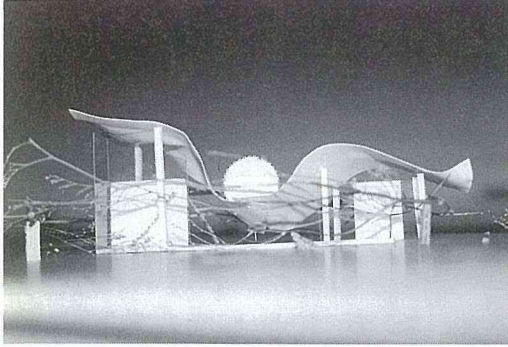
east elevation



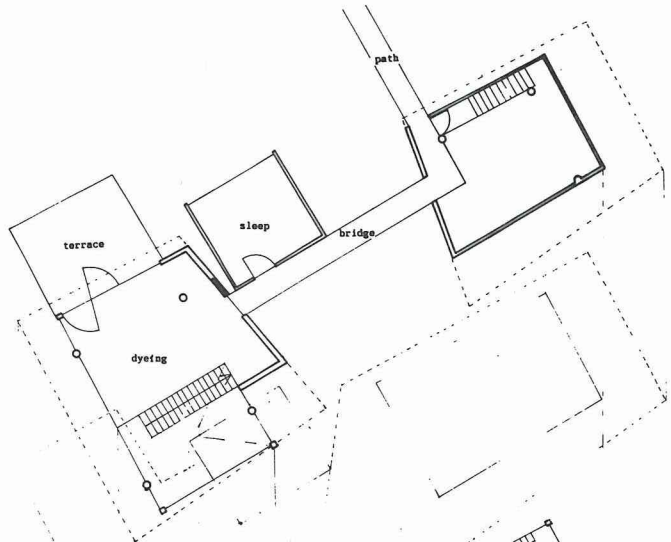
■「空」と言うものは、「クー」と理解してもよく、逆に一切を包容し、育む場所でもある。空に近い場所でまず頭に浮かび上がったのは空がドームのようにおお大草原、次に運動体から形を抽出する段階では、馬が走る姿を想像した。際限のない大草原で、馬が走る時、風、光…空の一切を思う存分呼吸できるのでは？■敷地は大草原のオアシスの近辺にあって、その地に原始時代では原始人が生息し、その後なんらかの原因でその地を去った。しかし、今ではそこに陶器が発見され、そして、たまたま3人の学者がそこを訪れ、住み着いてしまった。■建物は小型の博物館であり、陶器などが展示され、主に3人の学者の研究用につくられた。全体の立面は馬の走る姿をイメージし、スピードを感じさせ、空を呼吸させる。■建物の前にオアシスがあり、後ろに小さな木の茂った丘がある。建物の入口から丘につなぐ橋の柵の交錯する影が見え、そこへと人を誘う。

# Dyer's House

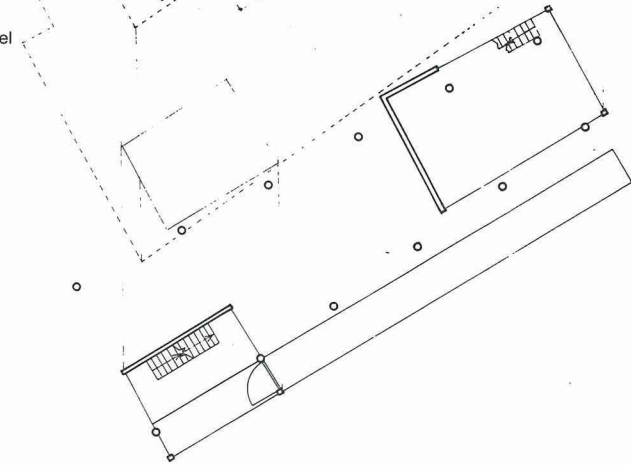
和田七重  
Nanae Wada



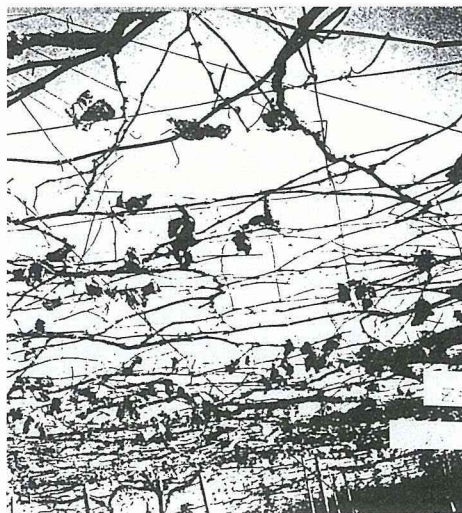
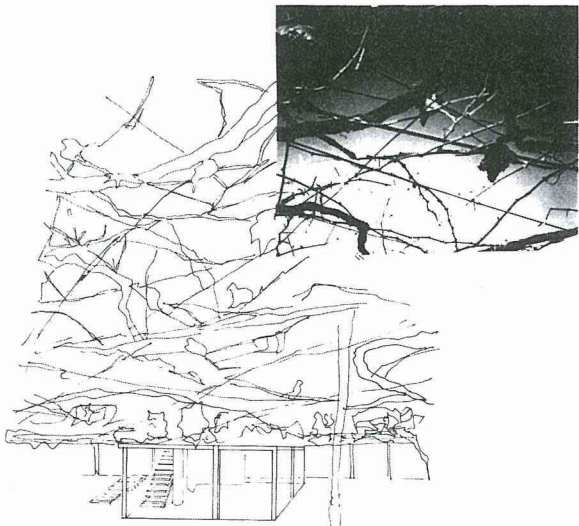
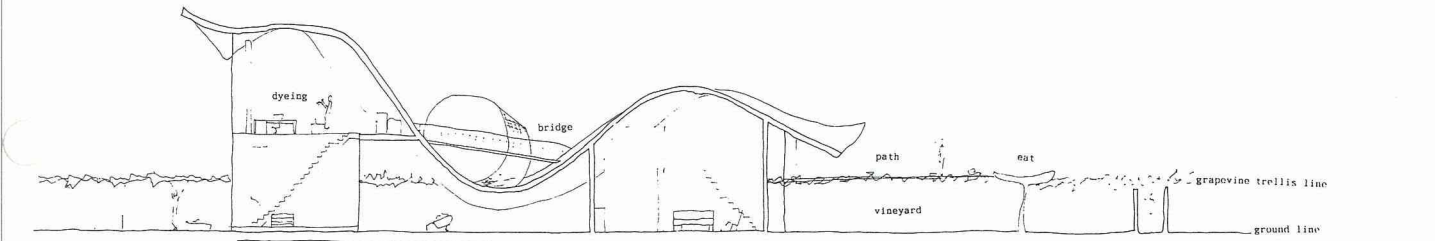
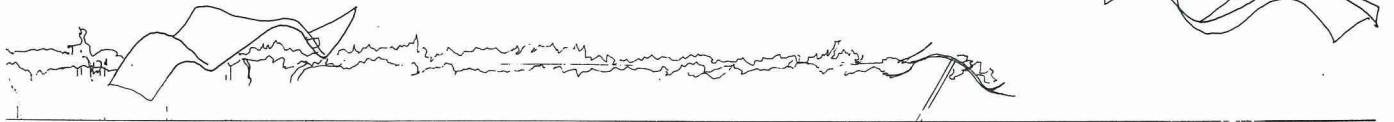
sky view level



view trellis level



ground level



■空に近い場所を探して旅にでた。空はどこか、近いのか遠いのか、空の境界はどこなのだろう。そしてぶどう棚に行きついた。ぶどう棚が空との境界線をなしている。dyer's house

■ぶどう棚に布がまioriた。そこに彼は住みついた。彼の1日はぶどう畑を歩きまわることから始まる。彼の作業場はぶどう畑はもちろん、階上やテラス、ブリッジなどぶどう棚の上にも広がる。そして夜になると棚に浮くシリンドラーの寝床へともぐりこむ。ぶどう棚と布とがからみあってできた層を上下に動きまわること、同時に彼は空との境界を行き来することができる。

■そして夏が終わり葉が落ちたとき、暗かったぶどう棚下の空がひらけ、この瞬間、彼自身もぶどう畑も空を呼吸する。

# 1994年度卒業設計製図優秀作品より

Best Diploma Design Thesis

## 講評 評にかえて

助教授 八木幸二

芸大などでは優秀な学生の絵画や彫刻を買い上げる制度があり、国有財産となった収蔵品の中には相当高価になっているものもあるらしい。東工大でもかつては卒業設計の保管をしていたが、手間とスペース不足から現在はマイクロフィルム化している。一般的な価値は生み出さないものの、歴史的には有意義である。数年前、学位論文のために中国の研究者が、戦前の日本で建築教育を受けた中国の建築家について調べた際に、卒業設計の記録が大変役に立ったという。

優秀な卒業設計に賞を与えることができるようになったのは、TIT建築設計教育研究会のおかげである。学生にとっては大変な励みで、春の総会の席で、諸先輩から厳しいながらも温かい目で質問されるのを楽しみにしている。その多くは修士課程へ進む学生であるから、賞をもらったことがいずれ就職活動に有利になると期待しているふしもある。学生は現在、4年生になると同時に所属研究室が決まり、12月末に卒業研究の発表会、2月末に卒業設計の発表会というスケジュールで、ほとんどの学生にとって実質的な設計期間は2カ月である。課題設計の時には先生の助言が得られたのに、卒業設計は中間チェックなしであるから、独りよがり行き過ぎると、単なる若さでは済まされなようなものでくる。

今回受賞した人たちの提案にも現実性の欠如が目立つが、あまり現実性を強調すると飛躍できなくなってしまうので、苦言を控えるが、これから卒業設計をする後輩諸君には奇を衒うことのないようにと一言。

## 講評

講師 團 紀彦

1994年度の卒業制作では、4名の学生の作品が優秀作品として大岡山建築賞に選ばれることになった。金賞には梅野圭介君、また銀賞には仲胆君、太田啓介君、木下芳郎君のそれぞれの作品が選ばれた。

梅野君の作品は、東京湾岸に大深度コリドールを計画し、流通と通信システムによる、14のターミナルのネットワーク化をはかりながら、本牧埠頭における物流ターミナルを提案している。東京湾岸の物流と通信のネットワーク化といった新鮮な発想に基づく提案性が評価された。物流ターミナルは、コンテナの収納のためのタワーをその骨格としながら、そこに空中庭園や、情報テラスなどを立体的に配置した構成的でモニュメンタルな建築になっており、機能的な面でのリアリティーに難点があるとの指摘はあったものの、その現代的でスケールの大きな構想力に説得力があったように思う。

仲胆君の場合には、都市における「娯楽」に注目して、東京の代官山駅周辺に、複合的なアミューズメントコンプレックスを提案している。自己完結的な遊園地から、都市全体のアミューズメント化といった、現代的なテーマ設定とその建築の構成員が評価された作品である。梅野君の「物流と情報ネットワーク」と合わせて、「娯楽」もまた、都市をつき動かして、その構造すらも変革してゆく見出すことのできないパワーになっているように思われる。しかし、それらの様相は、すでにアーキテクトのコントロールを越えて巨大なマンモスにまで成長してしまっているということもできるだろう。そうした状況の中で、新たな計画学は、それらのパワーから建築を蘇生するエネルギーを吸収し、それらに追従して加速化してゆくものになるのだろうか。それともそれらに別の角度から一石を投ずるものになってゆくのだろうか。両君の作品は、そうした現代都市の本質的なモチー

フに着目しながら、バランスのとれた優れた作品にまでまとめあげているだけに、そうした新たな問題をも提起するように思われる。

太田啓介君の作品は、現代都市におけるプログラムの多様化に対して、決定不可能という視点によって捉えているものである。計画はblank Aとblank Bとよばれる明確な機能をもたせないものと、もっているものを対比的に構成しながら、渋谷の中心地区に巨大な舞台装置として位置づけている。都市への自発的な参加をテーマにした現代的な提案である。しかし、その自発的の帰結が、どのような場をもたらしてゆくのかといった将来に対する責任のあるビジョンが加われば、さらに計画に重み加わることになったように思う。

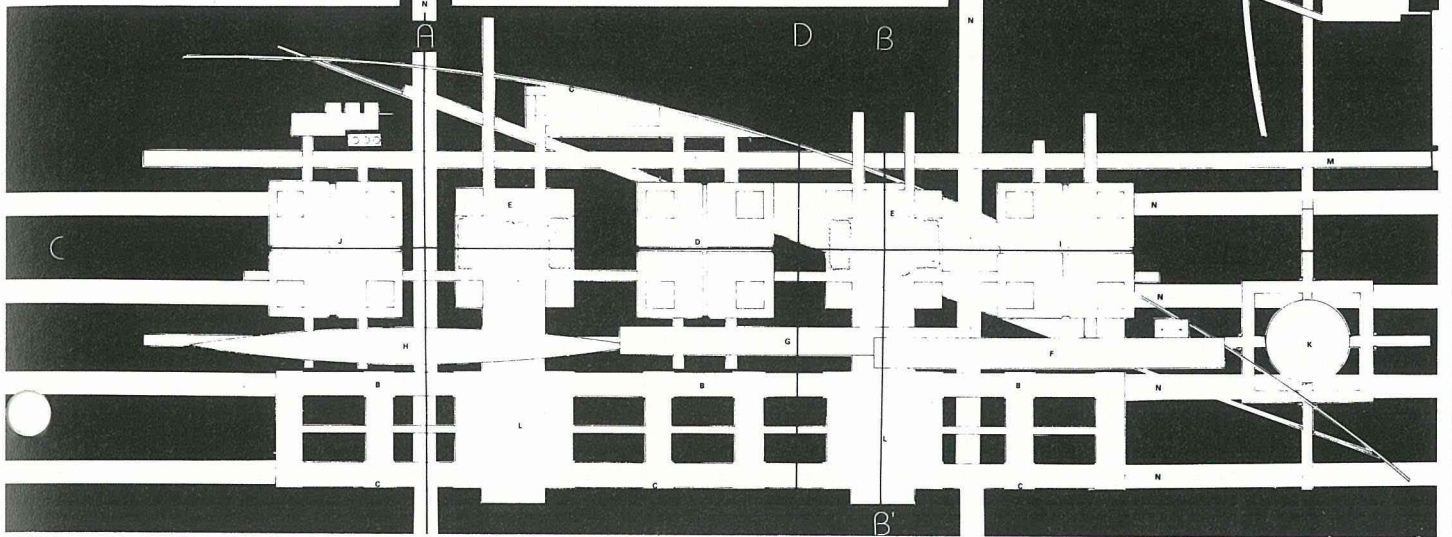
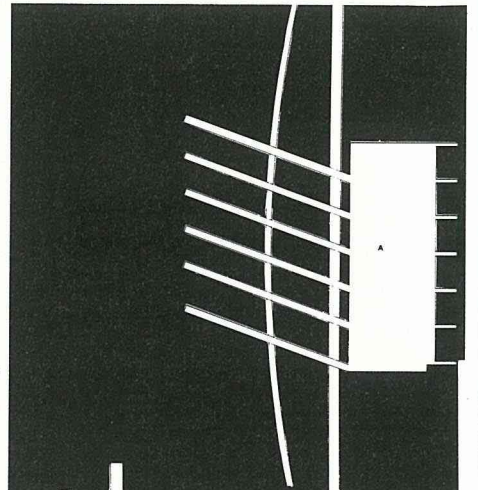
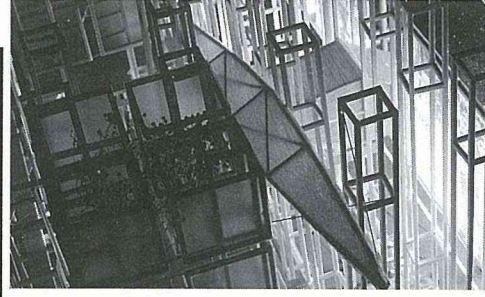
木下芳郎君の作品は、既存の倉庫を住居を含む複合建築化するプログラムの変換をテーマにしている。住居そのもののプログラムを分解し上部と下部を結ぶ階段室のシャフトが林立する中間層にライブラリーやカフェといった共有スペースを位置づけている。プログラム論、構成論的にみて、たいへん独創的で新鮮な作品であるが、最上層の無限定性はともかく、その居住環境にも多少の配慮をしてほしかった。

総体的にみれば、新鮮で現代的なテーマ設定による力作が多く、さらに現代社会に対する責任感と批評性をともなった視点が加われば、一層豊かな計画に発展する可能性をもっているように思う。

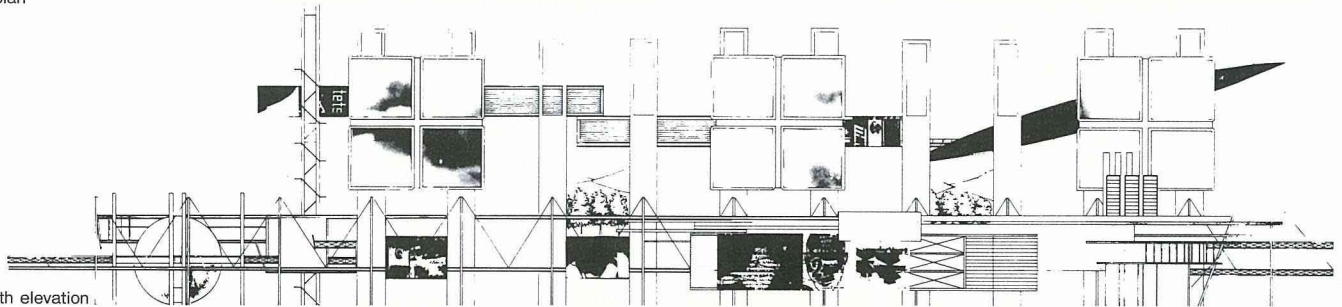
# 東京湾開放計画 東京湾岸大深度コリドールの提案

Tokyo Bay Open Project

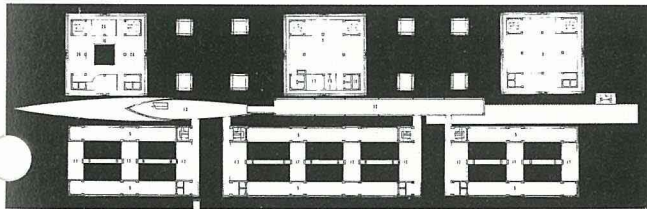
梅野圭介  
Keisuke Umeno



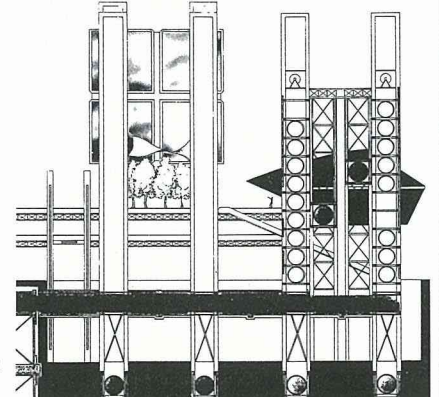
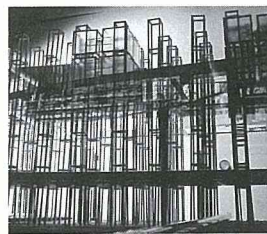
roof plan



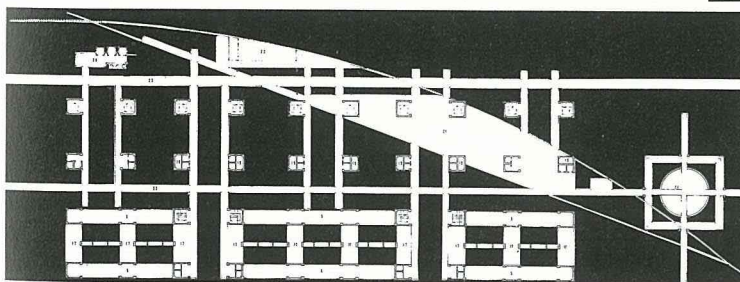
south elevation



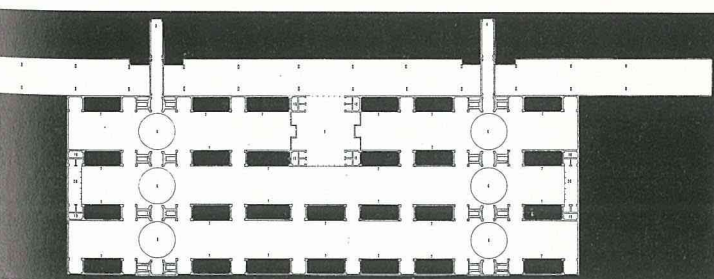
+24.5M plan



A-A" section



+6.0M plan



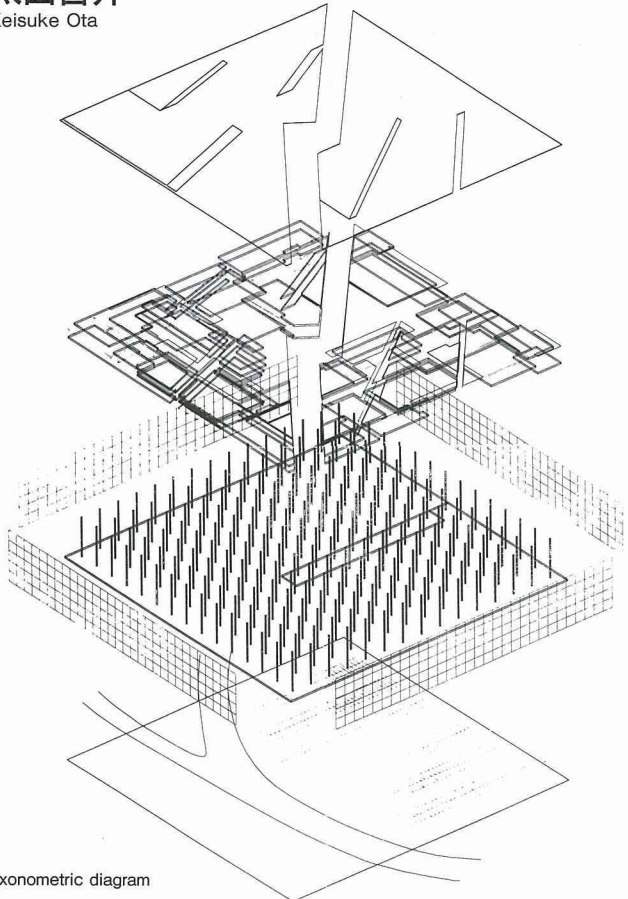
-4.5M plan

■本計画は、現在船舶によって東京湾に出入りしている貨物をコンテナ化し、東京湾に巡らした大深度コリドールによって輸送するものである。■コリドールは東京湾内の14ターミナルを結び、各ターミナルからは、都心のバックアップシステム・石油系ネットワーク・物流型ネットワークを一体化している。その結果モーダルシフトが進み、交通環境・生活環境の改善がはかられる。■今回は、この計画のターミナル拠点のひとつである横浜本牧埠頭における物流ターミナルを計画した。■東京湾大深度コリドールから都心部および地方の広域配送センターに向かうコンテナ配送システムのターミナル、機能と

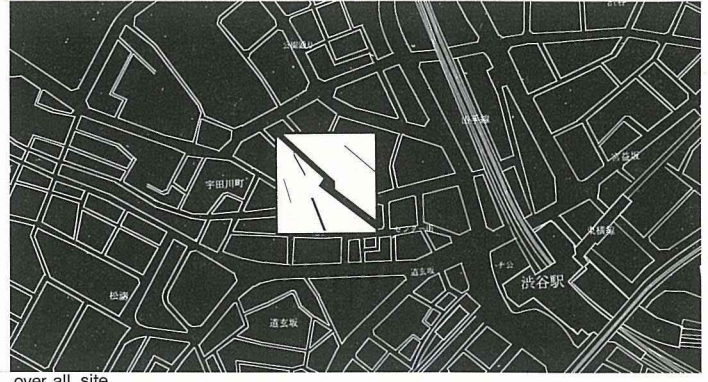
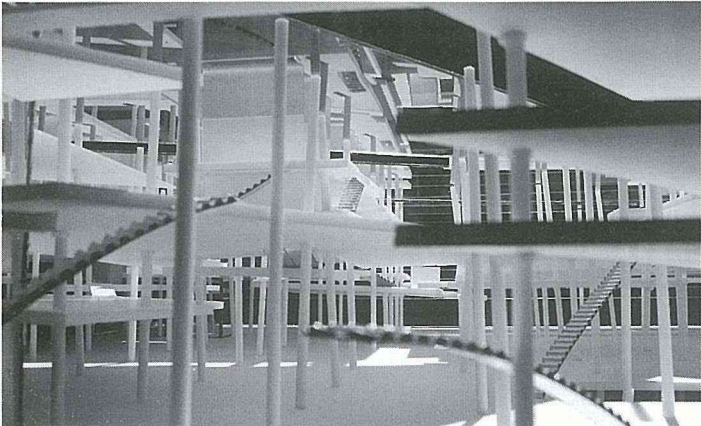
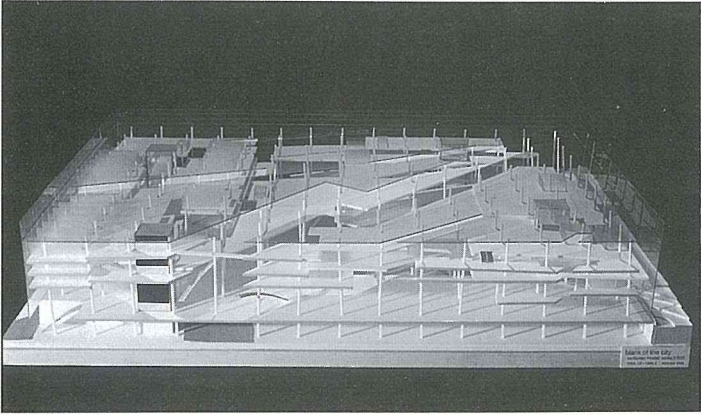
して高度に情報化された、物流の中央管理施設およびマーケティング情報センターを内包し、物流の高度化(LOGISTICS), 付加価値通信網(VALUE ADDED NETWORK), 電子発注システム(EDS), 電子データ交換(ELECTRONIC DATA INTERCHANGE), 流通の高度システム化を目的とする。■トータルな物流を目指しマーケティング施設を併設する。人びとはダイレクトなものの流れを体感し、ビルボードスクリーンに映し出された広告を見ることだろう。この建築群には広告の場が多く取り込まれ、消費者の購買活動が促進される。

# Blank of the City

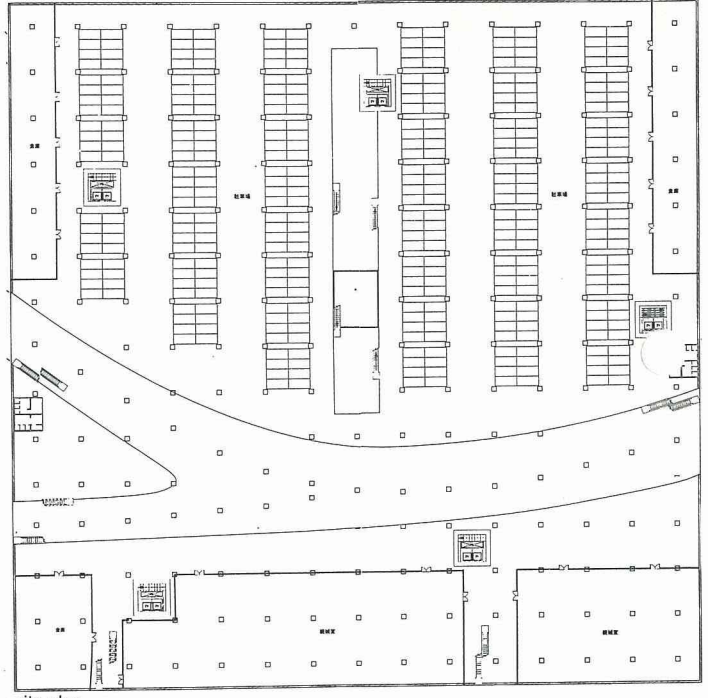
太田啓介  
Keisuke Ota



axonometric diagram



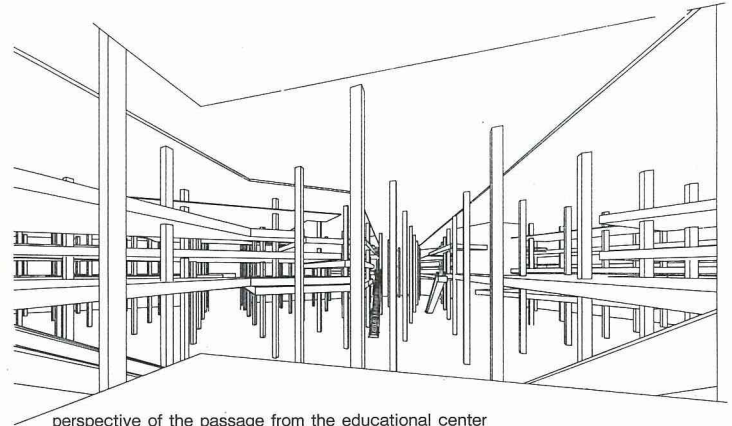
over all site



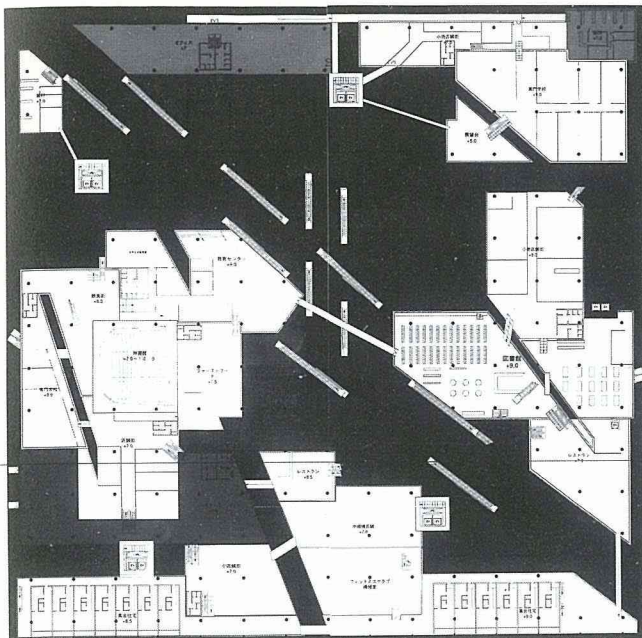
site plan



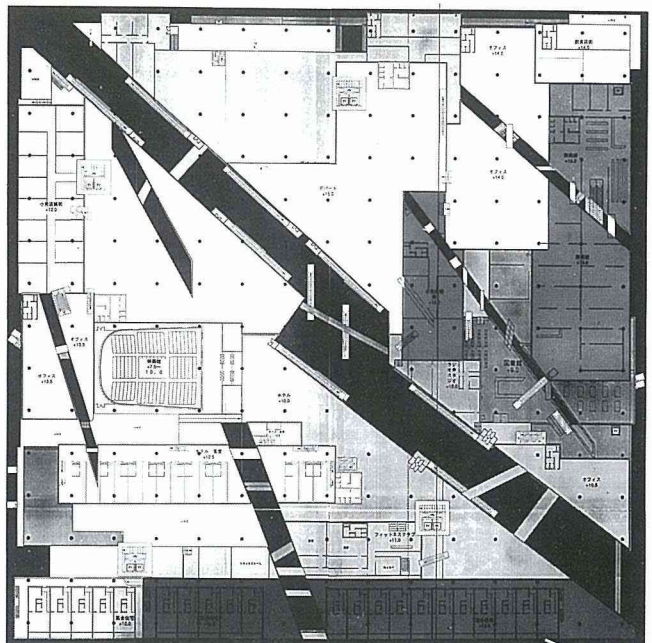
perspective "blank" and the passage



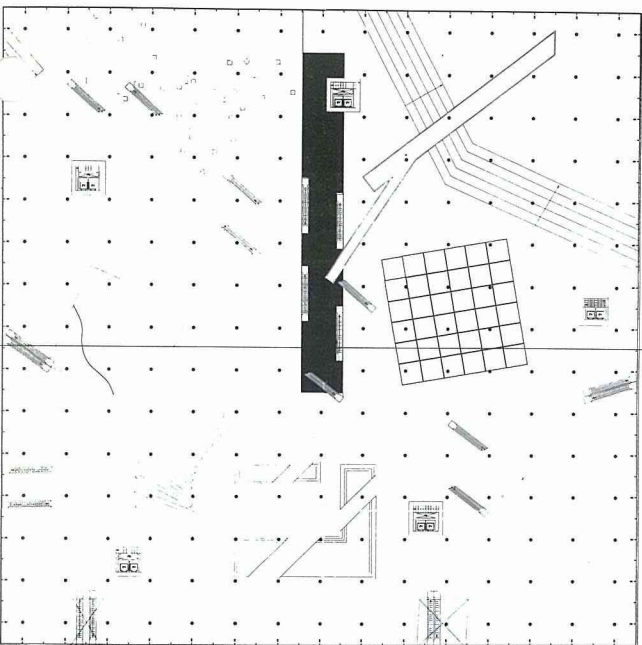
perspective of the passage from the educational center



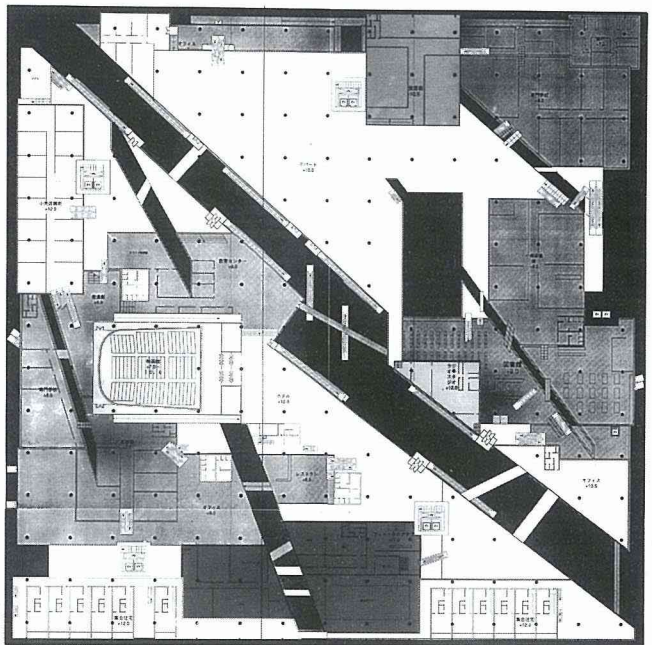
level +9.00m plan



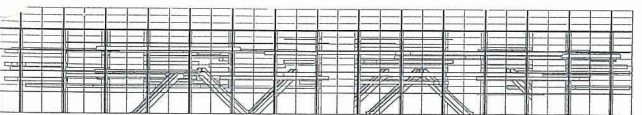
level +15.00m plan



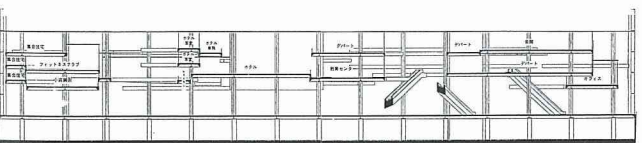
level ±0.00m plan



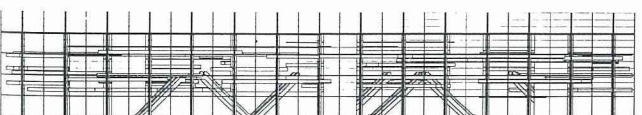
level +12.00m plan



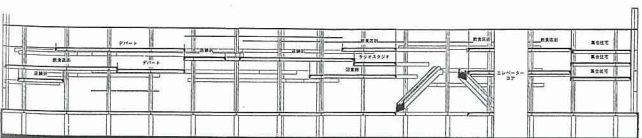
south elevation



section C



west elevation



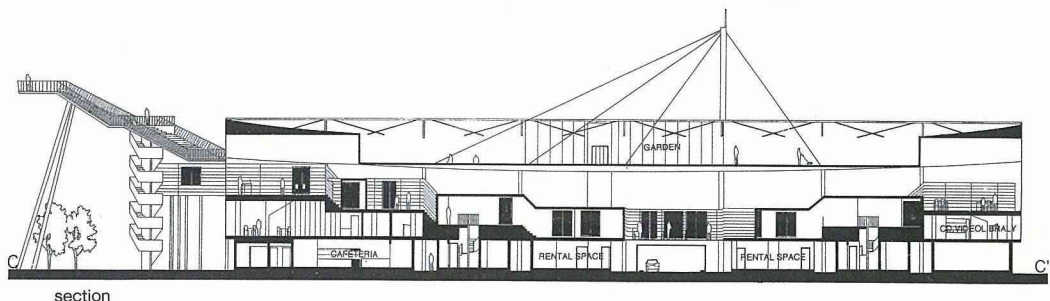
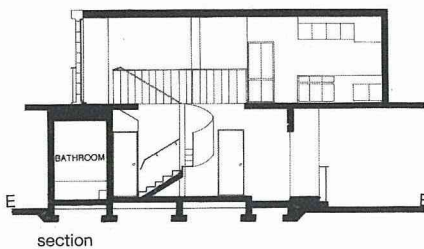
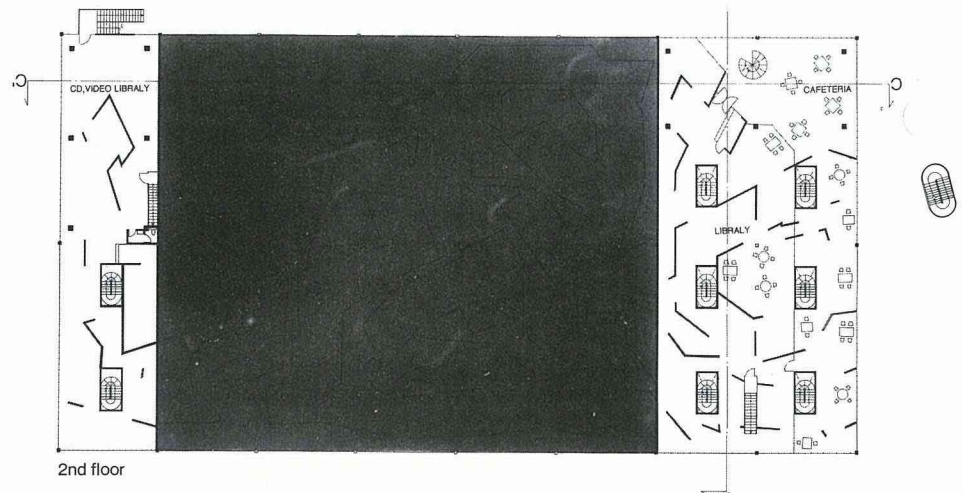
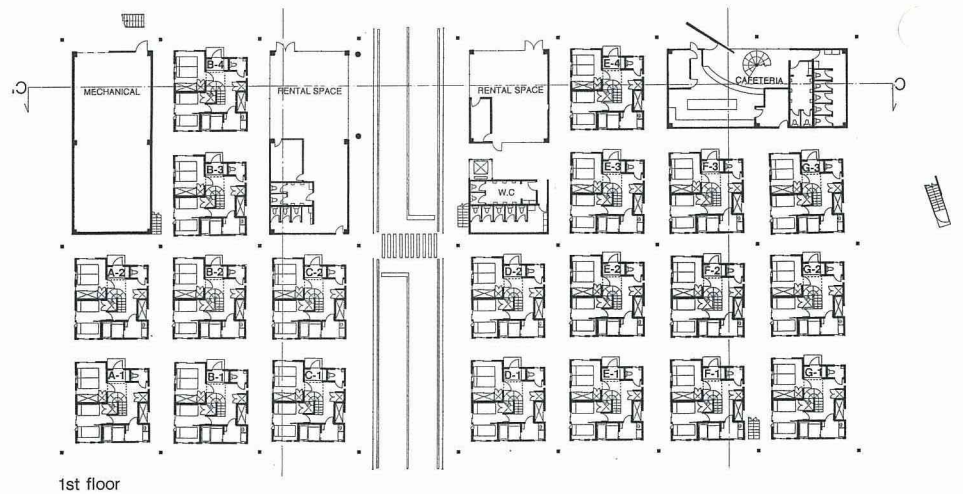
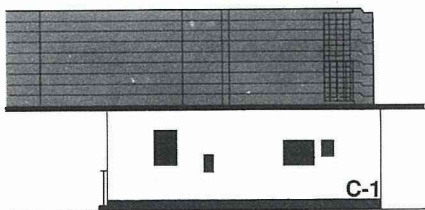
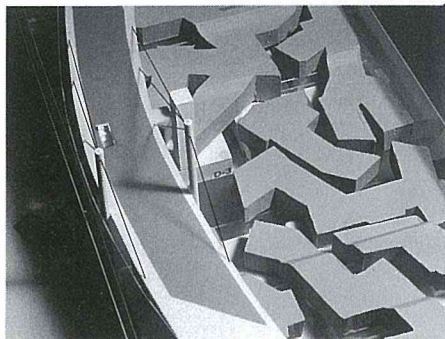
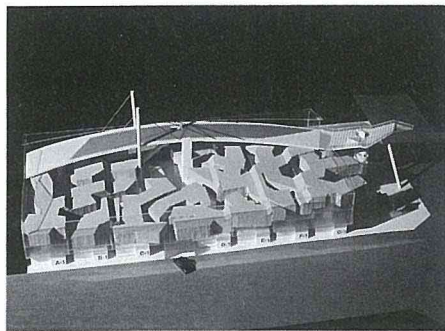
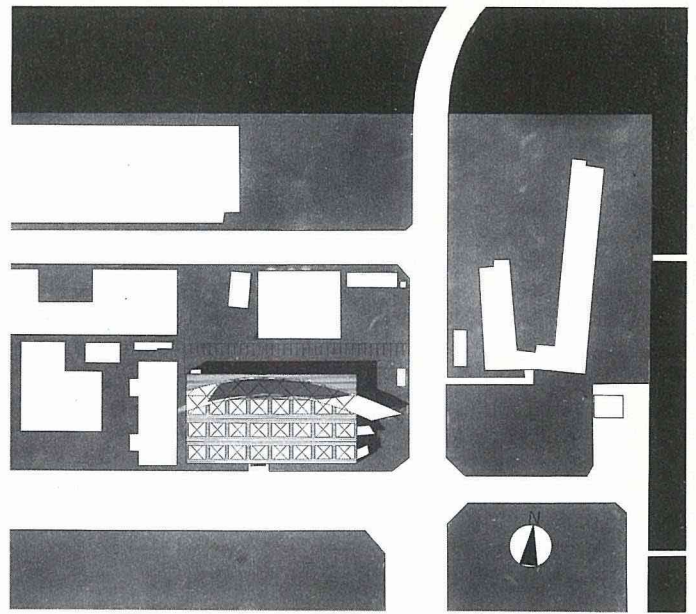
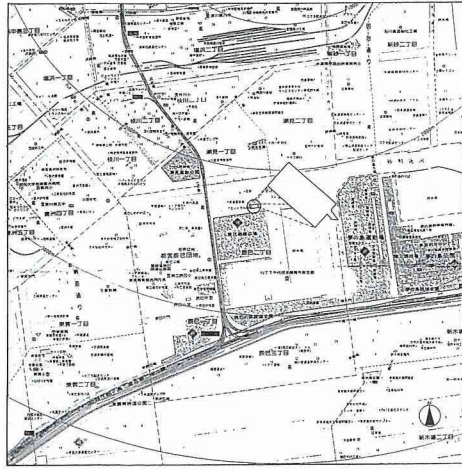
section D

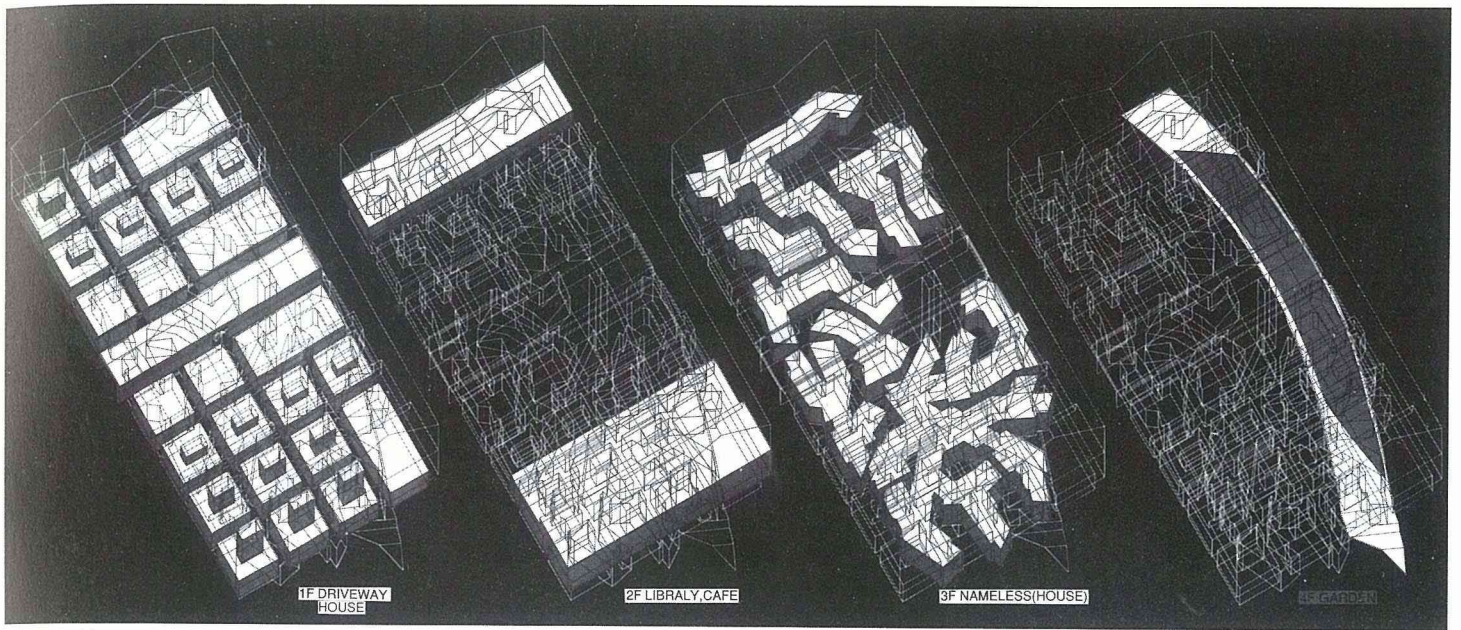
■現在の建築は明確な機能を計画することで、必然的なできごとしか起きないような建築が多いように思う。しかし、今の時代にとって必要な建築とは、人が関与することによって生まれる偶然性を許容するような建築ではないだろうか。この建築はそういった偶然性を目的としてつくられている。タイトルであるblankは空虚という意味であるが、まったく無の空間ではなく過剰なものや情報が飽和し、そこに周囲の雑踏を取り込むことによって再構成し新しいものを生む空間という意味で用いており、このblankを都市に挿入することによって新しい建築の形

式を提案している。■この建築は機能を観点とした2つの形式の並存によって構成される。ひとつは±0.00mの何もない空間（いわゆるblank）であり、ここでは人は自由に活動を起こし、さらに脈絡のないさまざまなイベントが行われる場でもある。もうひとつは+0.00mから+20.00mまでのスラブの積層により、さまざまな機能を混在させた空間であり、ここはスラブごとに明確な機能を与え、人の活動を規制することにより、予期しないものとの出会いを生む空間である。■そしてこの2つの形式を、地階の基礎とガラスのキューブが統合する。

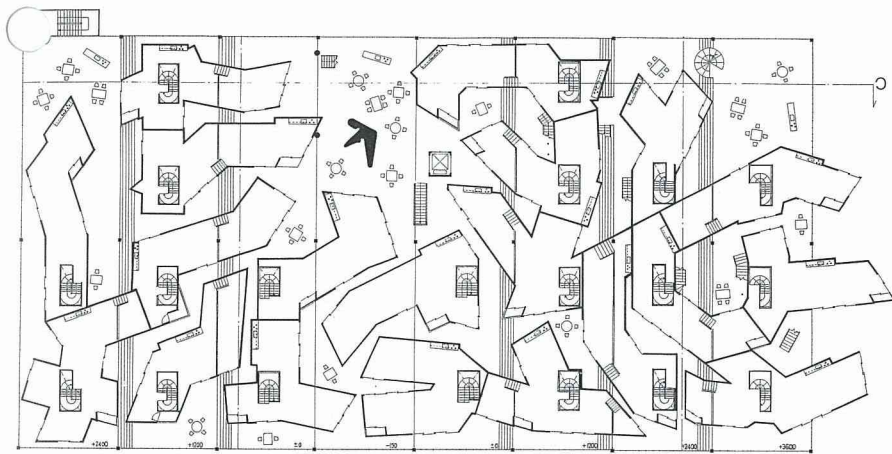
# Xtalline

木下芳朗  
Yoshiro Kinoshita

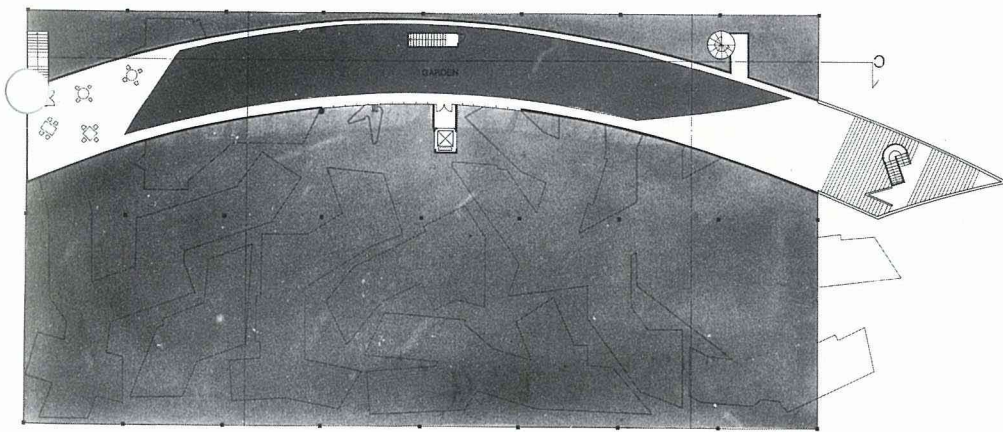




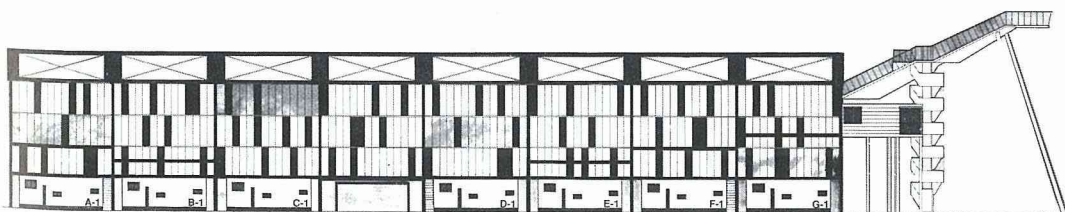
axonometric



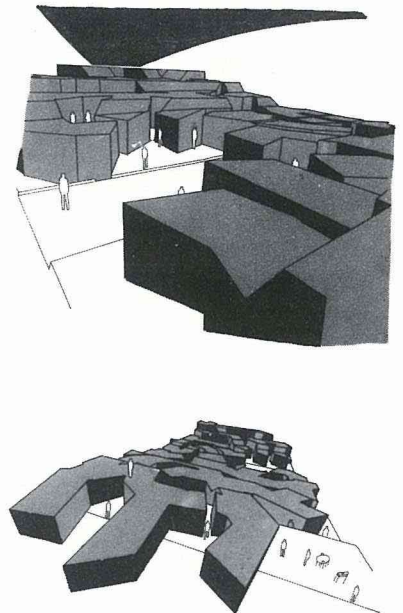
3rd floor



4th floor



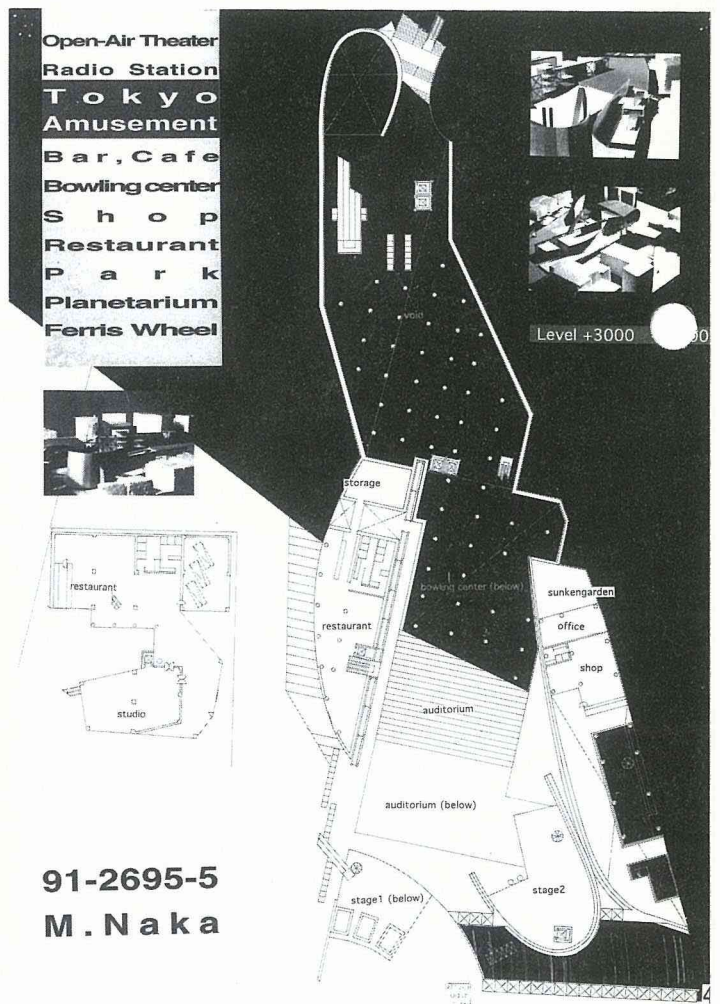
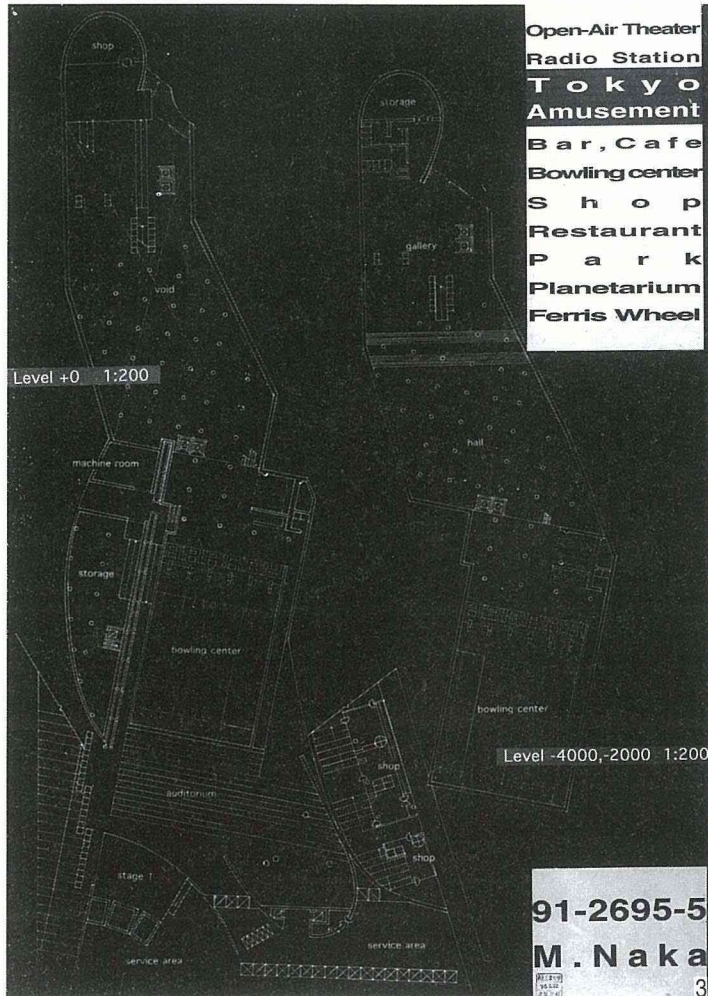
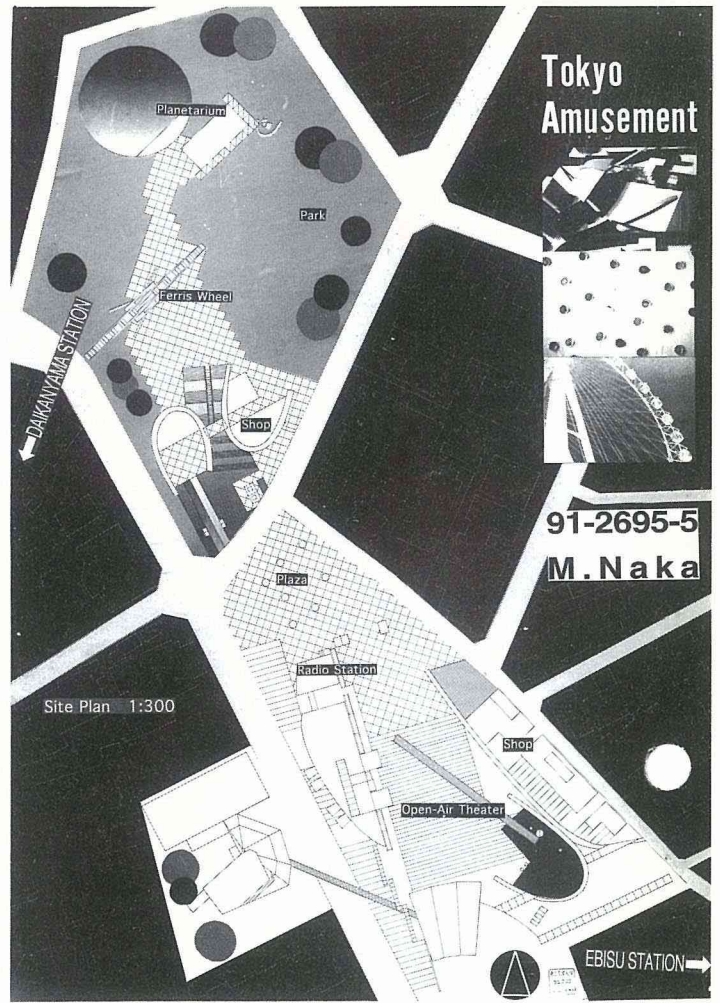
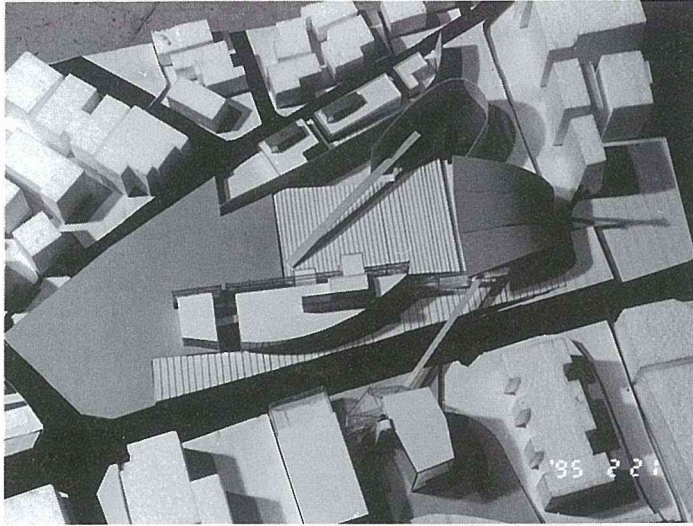
south elevation

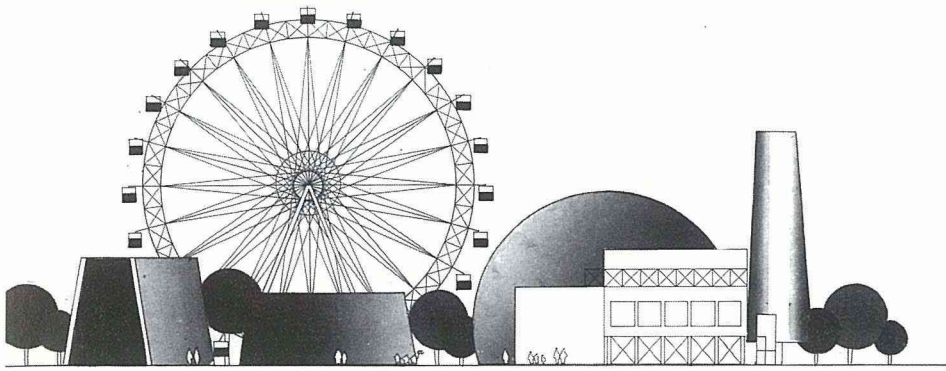


■選定した敷地には現在倉庫が建っているが、住宅に建て直すことになったと想定し、設計を進めた。外観は現存する倉庫の形をそのまま残した。■1階には住宅のうち、すでに名づけられている機能が、番号をつけられて整然と商業施設と共に並び、その中を車は止まることなく通過する。■東西のできる3階と1階のすきまには、図書館・カフェテリア・レンタルショップが入っている。■上に昇ると、倉庫と住宅の間のできる半屋外空間へ迷い込む。ここは、狭まり広がったりする場所、行き止まり、細長い場所、階段、そして唐突に出現する台所といった部品だけを提供し、そこへ住むための積極的な役割を、受け手に演じさせる。■しばらくすると地図をつくりはじめ、場所に名を与え、場所の使用方法を決め、これらを他人と共有するようになる。その中を住宅は道のように巡る。そのときLivingとよばれていた空間は、住宅の外へはみだしている。■最上部には傾斜のついた共用庭がある。

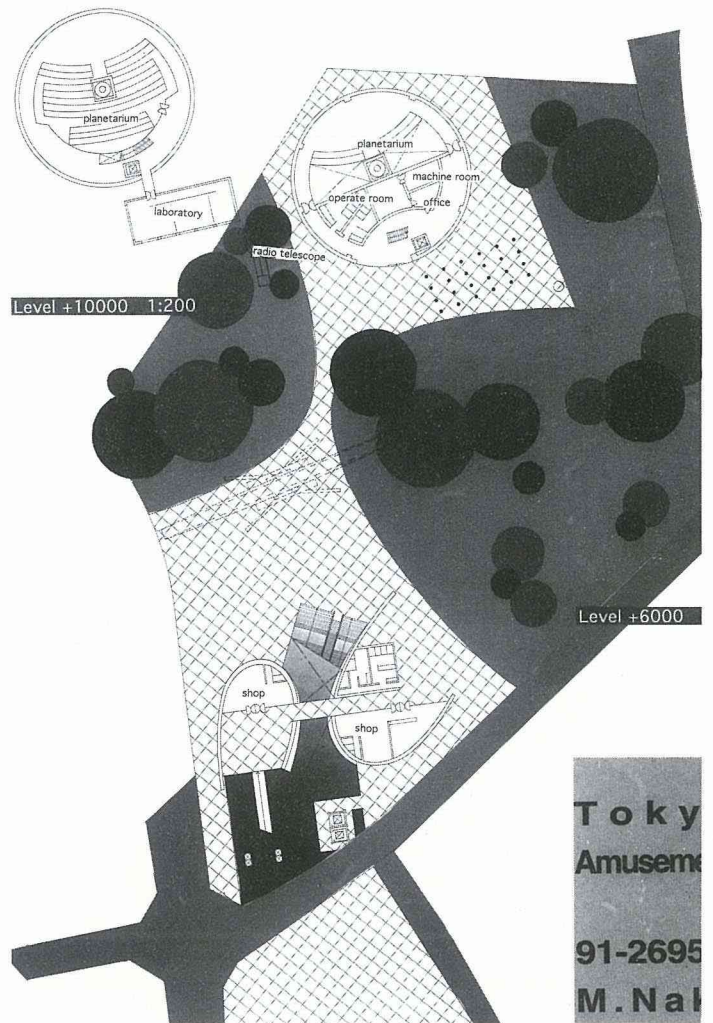
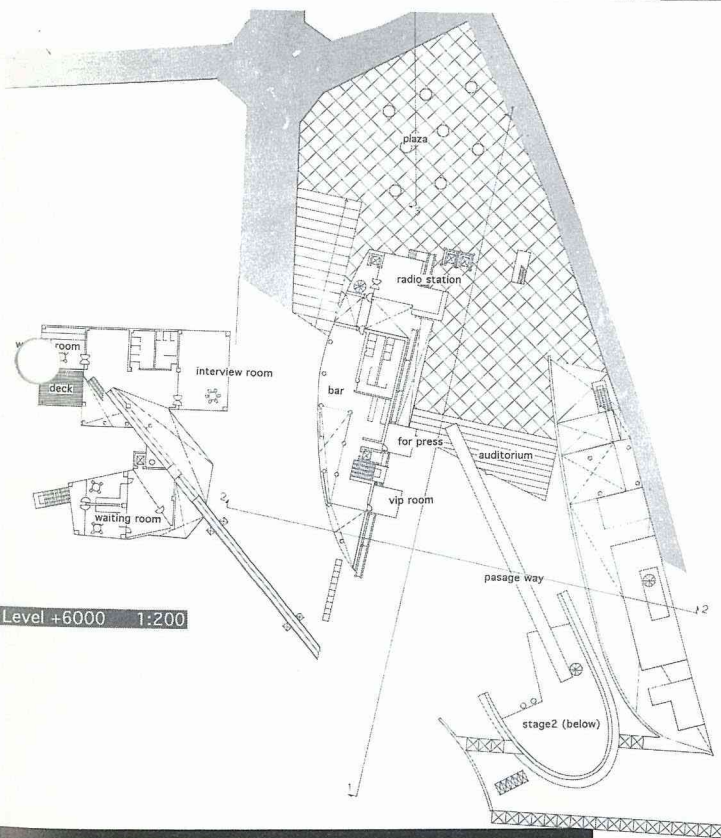
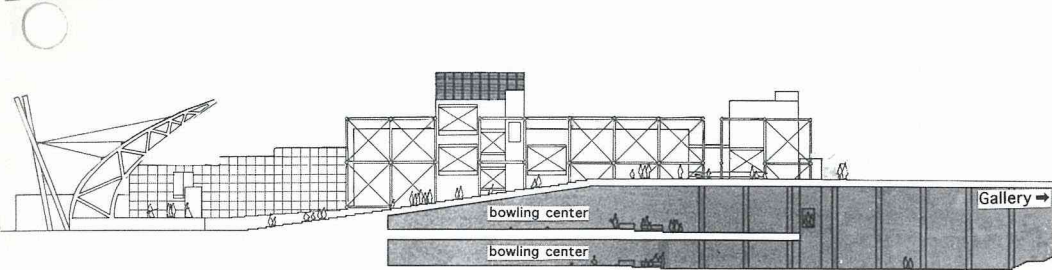
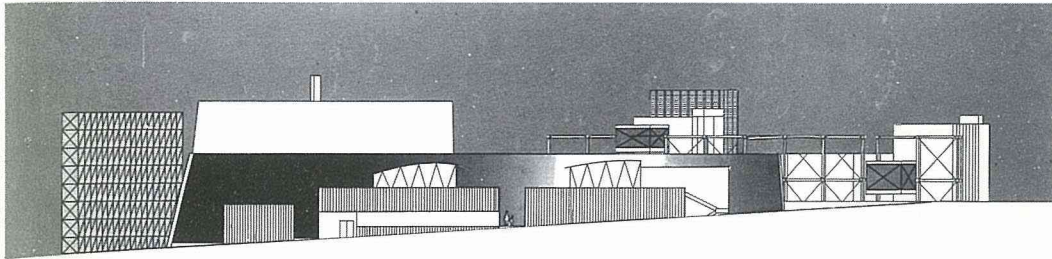
# Tokyo Amusement

仲胆  
Makoto Naka





■都市における「娯楽」とはどのようなものなのか、街中を歩き回ることによって、電車や車で移動しているときにはえられない発見をしたり、寄ってみたいくなるような店やイベント、公園に出会ったりすることで、都市を「楽しんでいる」と感じるのだ。■いわゆる「遊園地」はそれひとつで完結している世界であり、その中で現実世界とは違った世界を楽しませることで成立している娯楽施設である。ならば、内向的・自己完結的ともいえる世界を、現実世界である都市空間に向かって拡大し、街全体を「遊園地」として（もちろん街のひとつの側面として）捉えることで都市における「娯楽」を有機的に連関させて、これまでと異なった魅力の創出につなげることはできないだろうか。■Tokyo Amusementはひとつの「遊園地」であると同時に都市の中のひとつのアトラクション、つまり都市における「娯楽」の拠点でもある。主に野外劇場と公園によって構成され、それぞれの特徴をいかしながらも、相乗効果を得ることができるように個々の施設が配され、街に埋め込まれている。ここは「娯楽」の起点として、終点として、また通過点としてどのようにも位置づけることができ、自由に街そのものを楽しむことができる、ひとつのアトラクションとして存在している。



# Tokyo Amusement

91-2695-5 M.Naka

Tokyo Amusement  
91-2695-5  
M. Naka

# 私たちの 共同作業論

Our Collaboration

非常勤講師

東 孝光先生に聞く

Visiting Takamitsu Azuma, Lecturer

インタビューー

渡辺 竜夫 Tatsuo Watanabe

仲 胆 Makoto Naka

太田 啓介 Keisuke Ota

村田 淳 Jun Murata

インタビューは南青山にある、東先生の事務所で行われた。

私たちの質問に対し、建築との出会い、影響を受けたもの、実際の設計方法を通じた建築観など多岐にわたり、お話をくださった。

建築に興味をもたれたきっかけはなんだったんですか？

映画です。戦後ぼつんぼつんときていた時期にフランク・ロイド・ライトがモデルになったといわれる『摩天楼』という映画がありました。1900年初頭、近代建築のごく初期の頃のシカゴの様子が描かれていて、古い様式主義の建築に対して、新しい前衛的な建築をぶつけ、その実現に激しく取り組んでいくという建築家の物語です。そのときに、こういう職業があると知りました。自分の頭の中でなにかアイデアを考えついて、それを絵にしたり、模型にしたり、それを説明にいて受け入れられたり、受け入れられなかったり……

それはいつ頃ですか？

それを見たのは高校2年生の頃だったかな。これからどういう道に進もうかなと思っていてた時期だったし、非常に興味があったのでとりあえず勉強してみようと思いました。そして大阪大学に入りました。君たちと同じように構造も設備も全部勉強しなければいけないので、技術の勉強が多いということが非常に苦痛でした。だけど実際の仕事をしてみてあのときやったのは無駄ではなかったと思います。やっぱり構造や設備で基礎的な知識がないと、ただエンジニアに条件言ってやらせてもらうだけでなく、いや、そうじゃないんだ、こういうふうにしたらできるはずだとか、いろんな場面があるわけです。

先生の学生時代、社会にでたばかりの頃はどのような感じでしたか？

学生運動の前ですから静かな時期でした。ち

ょうど、全国的な建築学生会議ができた頃で、他の大学でどんなことをやっているか、けっこう興味があったのでそういう人とのつきあいはありました。けど今のように、お互いの作品を見せあうとかそんな交流はあまりありませんでしたね。60年安保というのがちょうど卒業したばかりの頃でしたね。

卒業して、まず最初に郵政省に入って、郵便局の設計の仕事をやりました。その後、坂倉準三先生のところに勤めて、それから独立したんです。卒業してからと独立してからしばらくは、世の中の枠組みが崩れてゆく、ひっくり返ってゆくという感じでした。独立したての頃は大学にしょっちゅうよばれてまして、学生から今の建築をどう考えるかとか、こんなやり方でいいのかとか、そういう質問がいっぱい飛んできました。それで僕たちも、こういうことが疑問だ、こういうところの問題を解決していかなければいけないとか、そういう議論をよくやったことを思い出します。その頃は学生も疑問だらけで、それをだれにぶつけたらいいのか、というのがありました。出口を求めている時代だったんでしょうね。

学生頃はどんな本を読みましたか？

映画の話をしましたよね。ほんとに情報が少なかったんです。本も今だと建築関係だけで何十冊とでてるでしょ。単行本などはその頃本当に年に数冊でした。それを古本屋や図書館で探すわけですから、かえってよく読んだかも知れないですね。ギーディオンの『時間・空間・建築』などは今はあまり読まれないのかな。何がなんだかわかんなかったけれど、悪戦苦闘して読みました。読書会などもやったけれど、なかなかわかりにくかった。最近では、うん、なるほどと思えるようになったけれど、難しい本だったな。

建築以外に影響を受けたことはありますか？

僕は大学生の頃からSFを読んでいて、SFの中

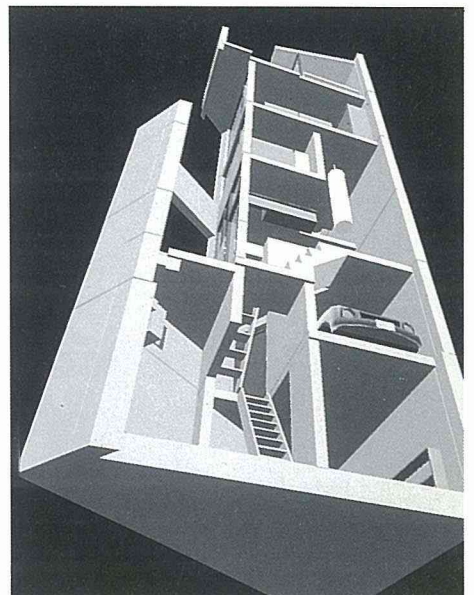
には、科学技術がどんどん進歩しているが、いっぽう人間はそういう進歩の中でも必ずしと幸福にはなれない。むしろその科学技術の進歩が人間を不幸にする。それをどうはね返すかというテーマが共通にあるわけですね。宇宙やロケットというのはそういう科学技術の代表としてでてるわけで、それと人間の幸福というのはどう関係するのかというのがテーマですよ。それは自分の進んでる道ってどうか、自分の勉強している道と非常に近いと思って、ずっと読んでいました。ちょうど僕が大学卒業する頃は手塚治虫が鉄腕アトムを発表していく時期で、僕はそれも読んでいました。自分たちがやっている専門的なことと社会全体の普通の人の幸せというのはどう関係するのか、というのがいつもありましたね。郵政省の公務員の面接の最後の時に、趣味はなんですか、と聞かれたので、「SF映画が好きです」と答えたらみんながどっと笑って、具体的にどんな映画が好きですか、と聞いたら、ちょうどH.G.ウェルズのSF小説を映画化した『宇宙戦争』というのがあったんです。火星人が地球にやってくるっていうものです。それを見て感銘を受けました、と言ったらまたみんながどっと笑って、これで印象づけたな、と思いましたよ。(笑)

先生は住宅を多く建ててらいますけど、住宅を設計するに当たってもっとも大切だと思われていることは何でしょうか？

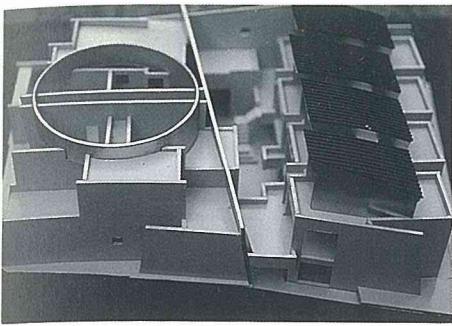
僕、十年間の修業時代に、ユーザーと直接触れることがなかったんです。たとえば市庁舎をやるとします。市長さん、議員さんと話をする。委員会で話をする、ということはあっても、肝心の市庁舎に来る一般の人と会うわけではないのです。そういうことをいちばん感じたのはやっぱり修行時代の最後に設計を担当した新宿の西口広場です。これなんか不特定多数の人が使うわけですよ。直接のク



塔の家



塔の家 (CG制作：大阪大学笹田研究室)



Kフラット

クライアントは広場が無難に使われればいいっていう役所の人たちです。いちばん建築家とユーザーの乖離が激しいところで特にそういうことを感じたんですね。今ならもっと調査をしながら進める設計方法も開発されていますし、大学ではそれも研究していますが。

その時に直接建築を使う人と対話しながらつくった方が手応えがあるし、自分も納得して条件を反映させることができると思っています。すべての建築がそうあるべし、とは思わなかったけれど、住宅だとそれができるから、孤立したらそのへんからもう一度やり直したいと思ったんですよ。

学生の時は割合のんびりしてたんだけど、卒業の前後から世の中が厳しくなってきた、若い世代が考えていることと世の中で動いていることとかなり衝突するような時期でした。そこで疑問をいろいろもっていた。その延長だったような気がします。

共同作業論とはどういったものでしょう？みんなが、自分はこう思う、いや僕はこう思う、といったリズムの中で仕事をみんなの合意で進めていく、仮にも設計をそうするのであれば、クライアントにも自由に発言して参加してもらうというのが本来の姿です。現場にその図面をもちこまれる段階になっても、現)技術者、職人の末端にいたるまで、仕事に参加して、自分の創意工夫が、あるいは自分のアイデアがいかされるようにして、みんなでこうつくっていくべきだというのがひとつのアイデアというか、理想の姿であるわけです。必ずしも現実にはそうはいかないけれど、そういうことを基本にしたらどうかということを、書いたことがある。当時の、若いスタッフのみんなは覚えてますけど、いろいろ試行錯誤して、意見が一致しないときには投票で決めていました。みんな1票ずつ、僕はせめて所長だから2票にして、投票するんです。その前にお互いに一所懸命ディスカッションしたり、スケッチ合戦してますから負けたことはなかったけれどね。

娘さんと一緒に仕事をやられるようになりましたよね。それと、今の共同作業論と関係があるのでしょうか？



Kフラット

僕は基本的にはひとりの天才がアイデアを思いついてそれを実現するよりも、もっといろんな人の考えが反映して、そのいろんな考えが読めるような奥行きのある建築のほうが面白いと思うんですね。そういう意味で、うちではできるだけ、お互いにマイナスになるようなかたちでなくてね、相乗効果を生むようなかたちに植え付けられればいいなと思っています。必ずしも理想的にはいかないけれども。だから、親子でやるということも、そういう意味があるのかわかりません。たまたま、そういうことになったということですね。でも、その意味を問い続けながらやっていくという気持ちはあります。やっぱり長く一緒に育ってきたから、僕たちの場合は基本的な考え方は一緒です。建築に対する見方や細かな好き嫌い、得意・不得意などは微妙に違います。そういうものを、うまく複合的に組み合わせればいいなと思っています。

建築家にはいろいろあって、自分は天才だとひたすら信じて、すべてを全部決めて、それを実現するのに手伝ってもらおうというためにスタッフがいるとか、その実現の機会を与えてくれるためにクライアントがいるとか、そういう考え方でつくってもダメだとは思わない。でも、みんなで作り上げていくというのが僕の方法だと思っているんです。

先生は事務所をやりながら、大阪大学の教授もなさっているわけですが……

二重人格だなと思いつつながら、大学に行ったら、仕事のことは忘れて、その時間はもう集中してやる。事務所もそうなんですよ。あと数年で大学は定年ですが、面白い10年でした。充実していると思います。僕は講義でも、ゼミでも、一方通行で僕の何かを与えるというのだけでは全然面白くないから、何か面白い話しても聞かしてくれよ、こういうことは君たちの感覚ではどう思うのか、とそういう迫り方をします。やっぱり、若い人は、ときどきハツとするような疑問や質問をしてくれるのがいいと思いますね。

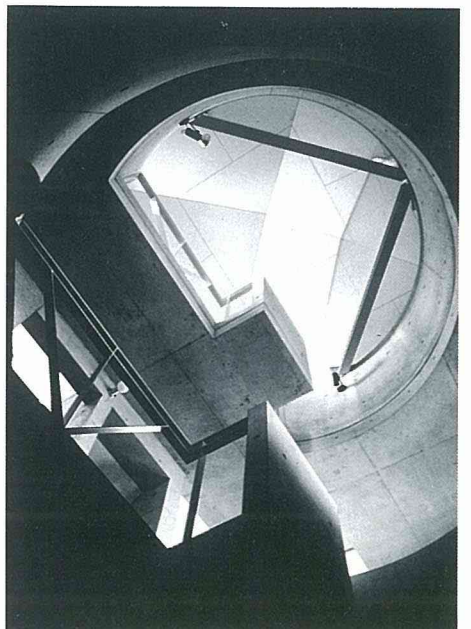
そういう面で、東工大の学生はどうでしょう？

大阪大学もそうだけど、みんな厳しい試験を

通り抜けてるから、けっこう知識はもっているよね。だから素朴な質問はなかなかでてこない。そのへんの不満はあることはありますね。でも、けっこう鋭くつっこんでくる人もいますし、なかなか面白いですよ。だから、もっとデザイン教育すれば、みんなすごく伸びるような気がするんです。でもかえってそれはしない方がいいかとも思います。急速にデザインだけがうまくなるということは、それだけ表面的になってしまうだろうと。もっと悩んだり、本を読んだり、あるいはまた構造や設備にいじめられながらデザインも成長していく。そして、30代や40代になって、それがじわーっと効いてくる、そのほうが本物だと思います。やむを得ないのかもしれないけれど、僕の大学も東工大もデザイン教育という面では、非常に遅れていると思います。だけど、これには半々の気持ちがあります。少し改善したいと思っている。もういっばうでは、自分が過ごしてきたような、もうちょっとハングリーな状態で自分流に勉強する、というやり方も悪くないなと思っています。

最後に、設計を志す学生に対して一言お願いします。

ほんとうに建築の設計は面白い。汲めども尽きぬというか、いろいろな角度があって、自分なりの迫り方ができます。自分なりの方法を見つけだせばいいと思います。職場も、アトリエ事務所がいいとか、大企業の設計部がいいとかいろいろな人がいる。それは自分の生き方と照らし合わせて、考えればいいと思います。建築を考えさせる領域というのは無限に幅の広いところだと思いますよ。自分はどんな設計をして、どんなことをやりたいかということを見いだせるようになったら幸せですね。学生の間はいろいろな機会に、幅広く見てまわることが大事だと思います。



阿佐ヶ谷の家

# 建築は多面体

Architecture-Polyhedron

非常勤講師

北川原 温先生に聞く

Visiting Atsushi Kitagawara, Lecturer

インタビューー

仲 胆 Makoto Naka  
渡辺 拓 Taku Watanabe  
太田啓介 Keisuke Ota  
村田 淳 Jun Murata  
小田宗治 Muneharu Oda

インタビューは三田にある、北川原先生の事務所で行われた。私たちの質問に対し、学生時代のことから始まり、建築以外の話、現在進めているプロジェクトやご自身の建築観など外岐にわたり、お話をくださった。

先生は学生時代どのように過ごしましたか。学生運動に乗り遅れた世代で、私たちのちょうど上までが学生運動で華々しくやっていました。それで表舞台にでられなかった。そういう世代だったから、大学に入って反抗期になっちゃって(笑)。課題提出拒否とかやりましたね。ある時図書館の課題をだされたんですが、コンセプトがわからなくて、とにかく図書館を設計しなさいと。どういう図書館を考えればいいのかとか、図書館とは何なのかとか、そういうことをまったく言及しなくて、ただ設計しなさいと言うんで、そんなのはわからないと、課題だすのやめようとみんなで結託してださなかった。それでほとんど全員が落第した。

20年以上前のことです。私たちの時はそのようなことがよくありました。課題の主旨を無視して、博物館の課題なのにそんな面白くないからと、集合住宅の設計をしたり、けっこう好きなことをやっていました。

私の大学は吉村順三先生の雰囲気か非常に強かったから、吉村先生に対する批判というのがありました。要するに吉村先生の設計するものは完璧なわけです。よくできていて、非の打ちどころがない。ただたとえば住宅を設計する場合、住宅とはなにかとか、住とはなにか、居とはなにか、というようなことは口にださない、そういう概念は最初に決まったものとして、それから出発しているわけです。私たちはその概念をもう一度解体して確かめたいという気持ちが非常に強かった。

そういう意味で非常に反抗していたのです。今はないでしょうね。東工大も芸大もみんな素直ですね。

東工大ではどのようなお考えであのような課題をだされたのですか。

なるべく東工大の先生がださないような課題をだすのが非常勤の役目だと思いました。発想の視点を変えることを、みなさんに少し触れてもらえばいいかな、というぐらいに。

建築以外に強く影響を受けたものや、今も続いているもの、その時に培われたものはありますか。

建築を考えるとときには、たとえば文学者の折口信夫の考えを知っていると、おもしろい着想ができたりします。彼は、文学とはなにかということ掘り下げ、古代の文化がどのように日本人の生活観、芸術観、いろいろな世界観に関連しているかを研究した人です。「まれびと」ということばは、折口が初めて使ったことばです。たとえば昔のお坊さんは全国行脚して、村や集落に立ち寄り、説法をしていました。そこに、ある異質な文化を置いていったわけです。折口はそれを「まれびと」としています。ある時間に、ある特定の場所に神が降りてくると、そこにあるまったく人間が知らなかった文化や、哲学とかを残す。磯崎さんはそのことを用いて異質な文化、ここでは彼の建築ですが、それをたとえば田園風景の穏やかな村にスーパーインポーズし、残すことにより文化の活性化をはかると述べている。建築の技術論とか、機能論とか、歴史からだけでは絶対に「まれびと」の話はでてこないと思います。やはり建築というのは、総合的なものですから。いろんなことから発想のきっかけをえるということが大事です。

また幼児体験というのが私の建築を考える上で非常に関係があります。私の家は田舎のすごい山の中で、たとえば夜中に、おしっこしたくなって便所に行こうとします。いったん外へ出て、その方に歩いて行こうとして反対側を見ると、土蔵があり、大きな土蔵の扉に大きな蝶の紋が描かれている。その巨大な蝶がポーッと暗闇にあるわけです。気持ち悪くて怖い。縁側で立ちしょんしてしまう

(笑)。そういった空間の恐怖みたいな経験が幼い頃ありました。

また、私の家はいたるところに不思議な探検場所があって、縁の下も少し屈めば歩けるほど高い。そこに山で見つけてきた石や、珍しい木のかけら、そういうのを隠しておいて、次の日曜日に確かめるとか、そういった幼児体験がなにか関係ある気がします。

もうひとつ影響があるとすれば、大学院時代、サウジアラビアに行ったことでしょうか。当時もかく日本を出たくてしょうがありませんでした。ちょうどその頃就職難で、大学院に入ったけれどなにか面白いことはないかなと。そしたらサウジでアルバイトを探しているというので、すぐ行ったわけです。

そこで驚いたのは、ものをつくらないことが美德と考えられていることです。ものを所有することや、つくることに価値を認めない。むしろつくらないことのほうが、気高い。どうもうまくコミュニケーションがとれないと思ったらそこが違う、と思いました。無にかっこいい建築つくってもなにもない砂漠のほうがほるかに迫力あるし、美しい。そういう一種のカルチャーショックを受けて日本に戻ってきたから建築に対して批判的になり、しばらくはあまり仕事はしませんでした。

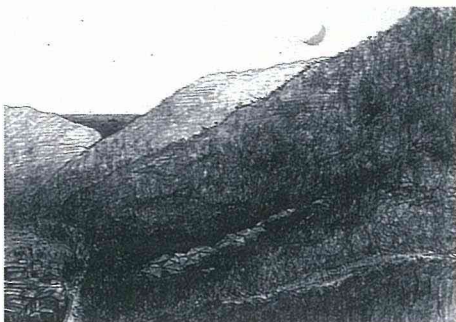
シュールレアリズムとかダダイズムとかの研究をしたのもあの頃、20代後半の頃です。建築以外の分野に目がいき、演劇や、音楽、ジョン・ケージとかナム・ジュン・パイクを知って、驚いたのも当時です。

建築家になるという決心をされたのはいつぐらいでしたか。

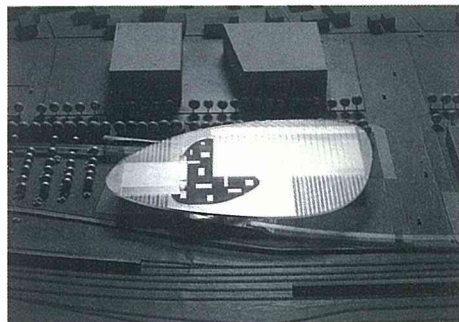
特に決断したわけではなく、気がついてみるとやはり建築やっていると気がします。

でも、どこかでなにか、空間的なものに対して関心が強かった。幼いときからのいろんな環境があったから、きっとその建築をとりまくいろんな分野をみながら、結局は空間として表現をしたいと思っていたのでしょう。だから若干、東工大の人たちの受ける教育とは違うと思います。

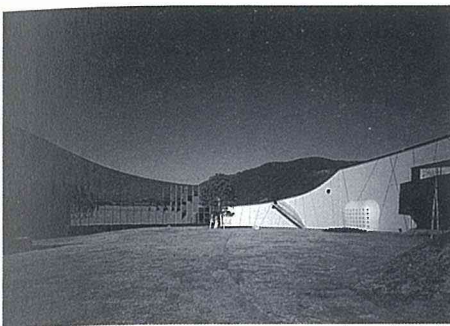
技術的、機能的、あるいは社会的なこととは、やや違うところにおぼ下っていたんじゃない



港区箱根保養センタープロポーザイル | 等案

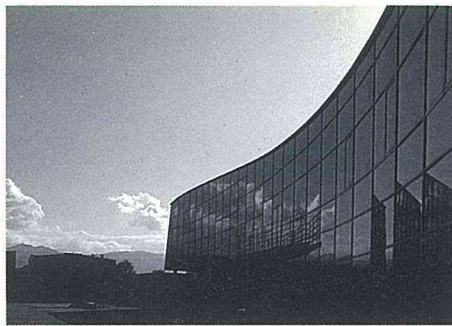


福島県産業見本市会館公開コンペ最優秀賞

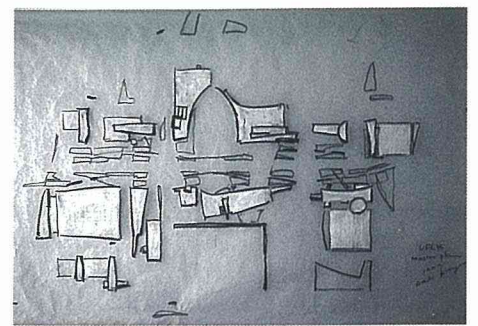


ARIA：中庭をみる

photo/H.Ueda



ARIA：東側外観



ARIA：マスタープランスケッチ

ないかと思えます。

先生は建築に対して葛藤というか、ある程度無力感というものをもってたと、うかがったのですが。

いろいろまわりまわって、なんとなく空間的なものにたどり着いたときに、すでに建築はなかったということかもしれません。

近代という時代は、自己を抹殺するメカニズムがあると思います。その自己矛盾を最初からはらんでいて、それが100年の間にだんだん呈示してきて結局自分で自分を否定しなくちゃならない。そういう意味で、結局自分にできることは、建築かもしれないと思始めた頃には、もう建築というものではなく、一種あきらめたいなものも持っています。

建築家として、自分の役割をどう表現しようとしていますか。

そのあたりはきちんと見極めていかなければならないと思います。建築とはなにかという質問は不毛かもしれないけど、常にそういうところに立ち戻っていかなければならない。むしろ、建築に対し、ある種の不信感を持ちながら仕事をしていたいと思います。「これが建築だ、これを信じろ」というようなことはできない。不信感が払拭できる時がくるのかということのは、むしろ君たちの代で実践することなのかなと思います。

今、途中段階の答えとしてたどり着いていることはありますか。

今自分にとって面白い仕事を始めています。最近になってオープンコンペを毎月ひとつくらいだして、福島と、港区のプロジェクトに当選しました。これがけっこう面白い。オープンコンペは、かなり純粋な思考の延長上につくれる気がします。それがどんなもののできるか、自分なりのある答えというよりも、さっきの質問に対しての何らかのものが見えるかもしれないと思います。

福島のプロジェクトで、空間の渦をつくる建築というのをおっしゃっていましたが、それはどういったことなんでしょうか。

場所は郡山市で、阿武隈川という大きな川が流れています。それから奥羽街道があり、最

近では新幹線がはしっている。要するにそういうリニアな流れが線状にある。それでこれはなにか流れがあるから、流れて考えようというのがひとつのスタディのきっかけになっています。たとえば水の流れていうと単にまっすぐ水が流れているだけでは、なにも生まれてこないけれども、川が蛇行して流れの違いができる渦ができたり激みができる。そこに生命が育まれる。そこからある密度の違いが生じることにより、生命が育まれる運動が発生しているんじゃないか。そのイメージからあの建築の形態につなげていったわけです。だからインキュベーターというか、子宮の形となったわけです。なにかを孵化させる、孵化器というか。それとマトリクスとよんでいたのですが、マトリクスは女性の子宮という意味もあります。そのようなものを重ねて形になってきました。

先生は激み、都市の白い闇、シュールレアシズムといった、予期しないもの、理性の届かないところに建築の可能性を感じているのではないかと思うのですが。

世の中というのは、激しい快樂とか恐怖とか死という眺望が開けてくると、それはまさに詩の世界になる。その反対側には、効用性の現実的世界が開けている。そして現実の世界だけがまじめな性格を帯びている。効果的な、現実的なものだけがまじめであるという風になっている。実はその激しい快樂や死と効用性は、表裏一体であると思います。東工大では効果的なもの、現実的なもののほうを主に勉強するわけです。その反対側の、快樂や恐怖や死というのはあまり教えない。私は自分にとって建築とは不可能なもの、といいましたが、そのような意味を込めていいたいのです。

いろんな人と共同するときには、先生の考えていることをどのように伝えますか。

建築はいっぱい面があるという意味で多角形です。その面全部について語っていくと大変です。多角形のものに光を当てても全部の面には一点からだとか均一に光が当たらないでしょう。それと同じように、コミュニケーショ

ンをとるのにその相手によって多角形のある一面を拾い出して、そこでコミュニケーションをとらざるをえない。福島のコンペには、考えているあるいくつかの面をいえば、全部の面をいう必要はない、と考えました。しかし、実はとても多面的で、根底には言い表せないものがいっぱいある。それは建物ができあがって社会性を担わされていく中で初めて、評価の是非がわかると思います。

ふだんの設計プロセスを教えてください。特に決まっていませんが、やはり着想が問題です。模型をつくるにもただなにも考えないでつくるわけにはいかない。手を動かすには一応なにをつくらうかという目標があつてつくるわけです。でも着想がなければ、できない。やはりコンセプトがいちばん最初だと思います。

先生は所員の人たちとどのように設計を進めていますか。

私が指示するとか与えるとかいうことはほとんどありません。割合みんな議論します。コンペなども、スタッフがまず考えて模型や案をつくり、壁に貼ってみんなで見たり、ほめたりしてできあがっていく。

ひとつのプロジェクトを担当のスタッフが最初から最後までやります。それに対してみんながいちやもんをつける。私も一緒になっています。自分で描いたスケッチを所員に渡してこれでやれというのはほとんどありません。ただ本を勧めたり、美術館や展覧会があれば、いつでも行っていいことになっています。それは、想像力がわいてくるような刺激を受けることが大事だからです。

建築を最終的に形にするときは、先生はあまり形にはこだわらないのですか。

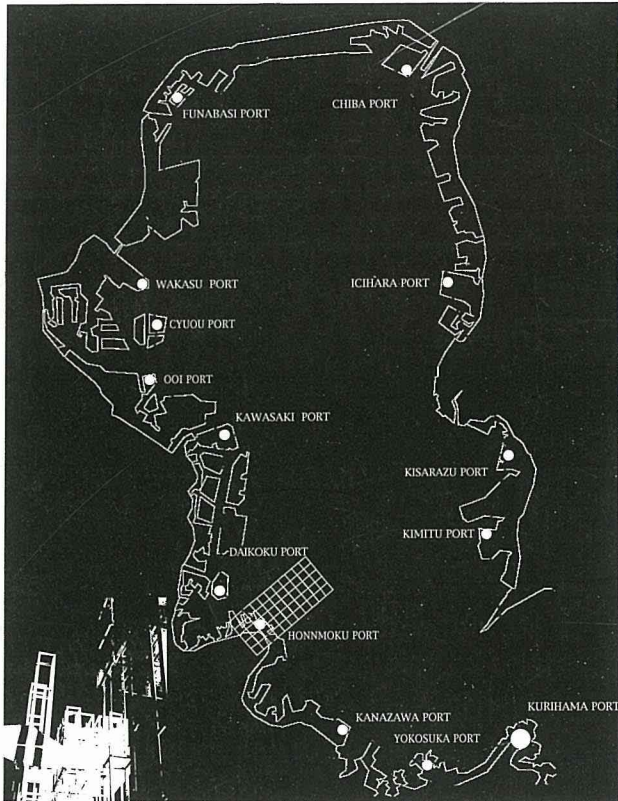
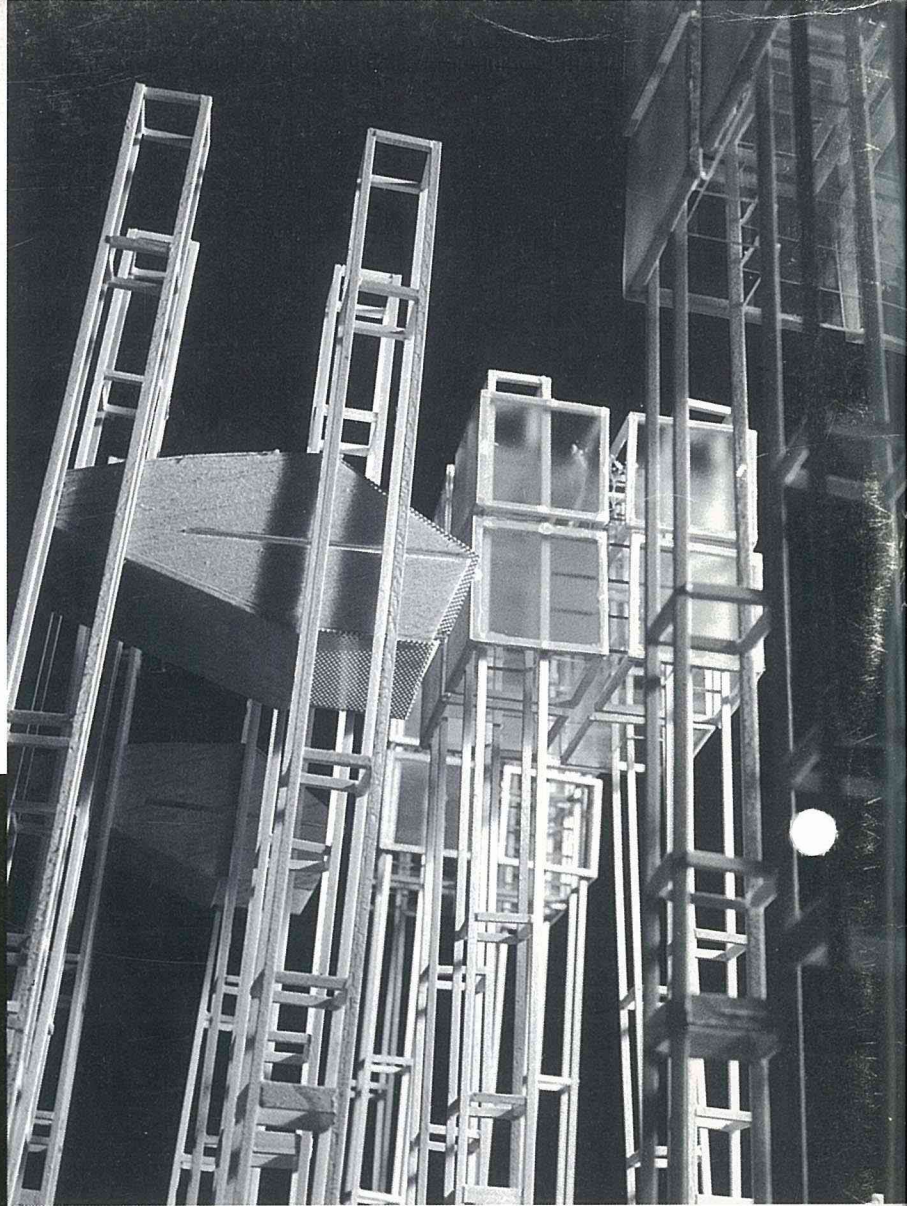
こだわられません。だから私の事務所の作品ってかなり違うでしょう。特定のスタイルがない。つまり、ある特定の形態的なモチーフを使い続けるという感じではありません。

建築の学生にアドバイスをお願いします。建築というものは多面体ですから、もっといろんなことに興味をもってほしい。そうするとすぐおもしろくなると思います。

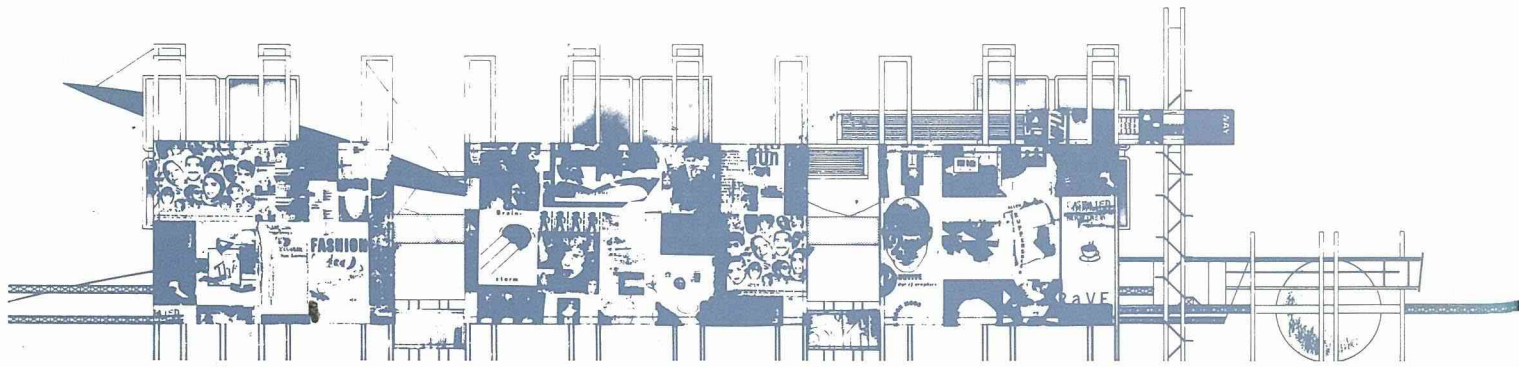


Ka No.10 1995  
 design Journal of  
 the department of architecture  
 and building engineering  
 Tokyo Institute of Technology  
 published by TIT society  
 of architectural design education

編集：東京工業大学工学部建築学科 華編集委員会  
 委員長／仙田満 委員／時松孝次 宮本文人 堀田久人 團紀彦  
 事務局／佐久間治  
 発行：TIT 建築設計教育研究会 林昌二  
 定価：800円



1994年度大岡山建築賞金賞受賞  
 東京湾開放計画・東京湾大深度コリドールの提案：梅野圭介  
 Tokyo Bay Open Project ; Keisuke Umeno



編集協力：(有)松井編集室 翻訳：デビット・スチュアート 取材協力：建築学科修士・研究生有志 印刷：三共グラフィック株  
 Edition: "Ka" Editorial Committee, chairman/Mitsuru Senda member/Koji Tokimatsu Fumihito Miyamoto Hisato Hotta Norihiko Dan  
 secretariat/Osamu Sakuma translation/David Stewart  
 Department of Architecture and Building Engineering Tokyo Institute of Technology  
 2-12-1 O-okayama Meguro-ku Tokyo 〒152 phone 03-3726-1111 ex.3163